

ちばけん そうさぐん ひかりまち
千葉 県 匠 瑳 郡 光 町

さきもと じょうあと じょうやま いせき
篠本城跡・城山遺跡

本 編

ひかり工業団地内埋蔵文化財調査報告 2



平成12年

千葉県企業庁

財団法人 東総文化財センター

はじめに

今世紀も終わりに近づき、世界が慌ただしく動いているなか、千葉県東部の東総地域では、昔から変わらずゆったりと時が過ぎていきます。

この東総地域は東に太平洋を望み、広々と水田が続く九十九里平野と、照葉樹の森が生い茂る下総台地とが織り成す、緑豊かな所であります。その豊かな緑をはじめとした自然の恵みは、昔からさまざまな恩恵を人々に与え、いろいろな文化を育んできました。

旧石器時代には森林の中で動物を狩り、縄文時代には海に行って魚取りや潮干狩りをして生活していたことが、銚子市の遺跡に見ることができます。また、弥生時代から古墳時代には、お米を湿地で作るようになり、奈良時代や平安時代になると、平野に下りて生活するようになったことが、文化財センターの調査で分かってきました。

このたび、ここに報告することになった光町篠本における、ひかり工業団地事業地内埋蔵文化財調査では、今から500～700年前の中世に栄えた遺跡をはじめとして、多くの貴重な文化財が出土しました。この発掘調査によって、中世にも豊かな東総を舞台として、多くの人々が活躍したことが明らかになって来ました。

光町には仏像をはじめとして、中世の文化財が町内に数多くあり、今日の町並みにも当時の名残りをとどめています。その中世文化が今日も生き続く町に、このような中世の遺跡を調査したことは、まさに地の利を得たと言えましょう。

発掘調査が平成5年より始まり、整理作業は未だ続く大変な仕事をされてきた東総文化財センター職員はじめ、多くの調査補助員及び関係者には、心から労い申し上げます。

また、発掘調査及び整理作業においては、多くの方々からご協力及びご教示を賜り、ここに城山遺跡の報告書を上梓できたことを、厚く御礼申し上げます。

財団法人 東総文化財センター
理事長 清古 正士

目 次

はじめに	
目 次	
本書を読むにあたって	
I. 篠本の環境	
1. 篠本の自然	
(1) 篠本の地形・地質	2
(1) 地誌 2) 台地地形 3) 低地地形 4) 地質	
(2) 篠本の動植物	7
(1) 動物相 2) 植物相 3) 花粉分析	
2. 篠本の歴史	
(1) 篠本の原始・古代	10
(1) 黎明 2) 縄文時代 3) 弥生時代 4) 古墳時代 5) 奈良・平安時代	
(2) 篠本の中・近世	14
(1) 鎌倉時代 2) 室町時代 3) 江戸時代	
II. 発掘調査の成果	
1. 縄文・弥生時代	
(1) 縄文時代草創期	16
(2) 縄文時代早期	16
(1) 炉穴 2) 陥穴 3) 土坑 4) 早期遺物集中地点	
(3) 縄文時代前期	20
(4) 縄文時代中期	20
(5) 縄文時代晩期から弥生時代へ	21
(6) 弥生時代	21
2. 古墳時代	
(1) 遺構について	22
(1) 古墳 2) 墓坑 3) 住居跡 4) 柱穴群	
(2) 遺物について	26
(1) 土師器・須恵器 2) 玉・鉄鏃	
(3) まとめ	27
3. 奈良・平安時代	
(1) 遺構について	28
(1) 住居跡 2) 井戸跡 3) 土坑	
(2) 遺物について	32
(1) 土師器・須恵器 2) 墨書土器・硯 3) 金属製品 4) 土製品 5) 石製品 6) 木製品	
(3) まとめ	35
4. 鎌倉・室町時代	
(1) 遺構について	36
(1) 堀 2) 中世区画 3) 建物跡 4) 地下式坑 5) 粘土貼土坑 6) 方形土坑 7) 墓坑	
(8) 馬埋葬坑 9) 埋納坑 10) 水場 11) 階段跡	
(2) 遺物について	52
(1) 貿易陶磁 2) 瀬戸製品陶器 3) 志戸呂製品陶器 4) 常滑製品陶器 5) 瀬美製品陶器	
(6) 土師質土器 7) 瓦質土器 8) 銭貨 9) 金属製品 10) 石製品 11) 石塔	
(3) 中世篠本城跡の復元	74
(1) 篠本城跡の構造 2) 篠本の中世村落の変遷と展開	
(3) 中世村落と生活の復元 1) 屋敷地 2) 水と水場 3) 食べ物 4) 茶の湯 5) 化粧 6) 宗教と死生観	
(4) 陶磁器に見る中世の流通 1) 貿易陶磁 2) 瀬戸製品 3) 常滑製品 4) 土師質土器	
(5) 歴史的背景	
5. 江戸時代(近世)	
(1) 遺構について	92
(1) 炭焼き窯 2) 小屋跡	
(2) 遺物について	92
(1) 陶磁器 2) 金属製品 3) 銭貨	
III. 発掘調査の諸記録とまとめ	
1. 発掘調査と整理の記録	94
(1) 発掘調査 (2) 調査の整理	
2. シンボジウムの記録	96
3. 現地説明会の記録	98
4. 城山遺跡(篠本城跡)の評価と意義	98
5. 城山遺跡発掘調査に携わった組織・人々、及び係わった協力者	98
報告書抄録	100

本書を読むにあたって

本書は、千葉県匝瑳郡光町篠本における、千葉県企業庁によるひかり工業団地造成に伴う、その事業地内の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

ひかり工業団地事業用地内の遺跡は、神山谷遺跡、城山遺跡、新台遺跡、夏台遺跡の4遺跡と、これらの遺跡に重なって篠本城跡があり、これら遺跡群を仮に篠本遺跡群と呼ぶことにする。

本書は、篠本遺跡群の中の城山遺跡についてまとめた報告書である。

本書は、本編と資料編との2編、2冊構成である。

本編は、遺跡の概要、発掘調査の成果などを、資料編をもとにしてまとめたもので、本編だけでもわかるようにした。できるだけわかりやすく記述したつもりである

が、なかには専門的な用語があって、難解な所があればご容赦願いたい。

資料編は、発掘調査で出て来た遺構・遺物の写真・実測図を中心に載せ、それぞれの概要説明を実測図のわきに記載した。

本編・資料編とも時代別に掲載し、縄文時代より近世まで、順にそれぞれ分けて記述している。

資料編では、各時代の扉にそれぞれ該当する凡例を記す。

本編の文中あるいは図に記した遺物の番号は、資料編の遺物番号である。

できれば本編を読みながら、資料編を見るというように活用していただければ、より理解していただけると思う。

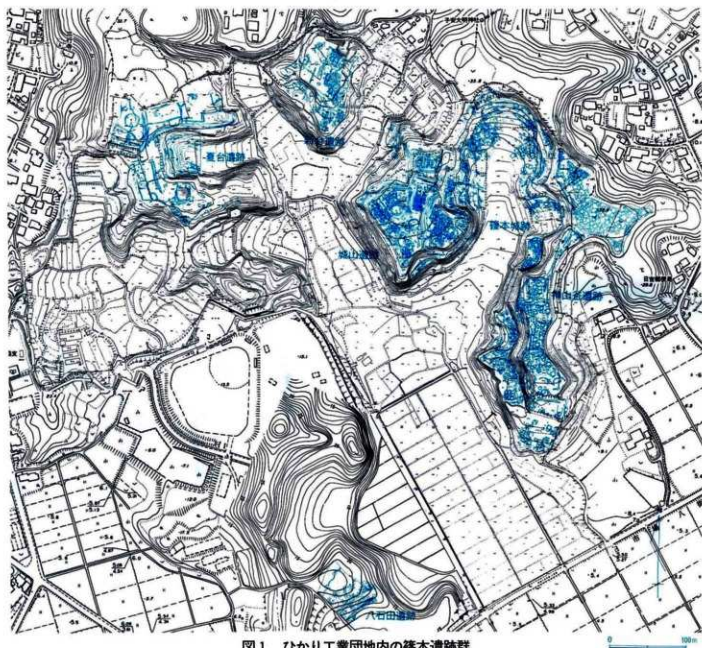


図1 ひかり工業団地内の篠本遺跡群

I. 篠本の環境

1. 篠本の自然（自然地理）

（1）篠本の地形・地質

1) 地誌

千葉県匝瑳郡光町は、県北東部に位置し、太平洋の波が洗う九十九里浜の中ほどにある。町は南北に長く、北半分は下総台地の縁が来ており、南半分は平坦な九十九里の海岸平野が広がっている。海に近く比較的温暖であるが、冬のからっ風が吹いたときの寒さは厳しく、夏の蒸し暑さが耐え難いときもある。それでも古代から暮らしやすかったらしく、さまざまな時代の多くの遺跡があり、中世に至っては多くの城館跡が分布しているところから、人々が多く集住していたようである。現在でも集落を散策してみると、中世の石塔があったり、中世以来のお寺があったり、また近くには中世の遺跡があったりと、中世の雰囲気をいまだに残しているところが多く見られる。このように昔から住みやすかった環境は、東に隣接する八日市場市に「楯の海」と言うところがあったことに表されるように、楯を代表とする照葉樹林が繁茂している事に示される。

古代では照葉樹林帯は稲作地帯でもあり、この樹林帯に沿って稲作が拡大して行ったであろうことは知られている。

光町のある一帯は北半分の台地の間には、台地の浸蝕が進んで広い台地間低地が広がり、またそこから台地の間には狭い谷が入り、初期稲作に適した谷津田の形成が容易であったことを推測させる。南の九十九里平野では砂州（砂堤）と後背湿地とが連続する。砂州上には集落が、後背湿地には水田が配され、このような景観は古代でも同じであったことだろう。しかし、現在では台地を崩して新しい造成地が作られたり、水田を埋め立てて宅地が造成されたりと、昔ながらの景観が失われようとしている。

2) 台地地形

光町は、北半分が下総台地で占められていることは前に述べた。その台地の地形についてここで触れることにする。

下総台地は千葉県の北半分を占め、東は太平洋、南は上総丘陵、西は江戸川、北は利根川で区切られ、標高20～50mのほとんど平坦な台地である。台地は東か



写真1 篠本遺跡群（南東上空から）

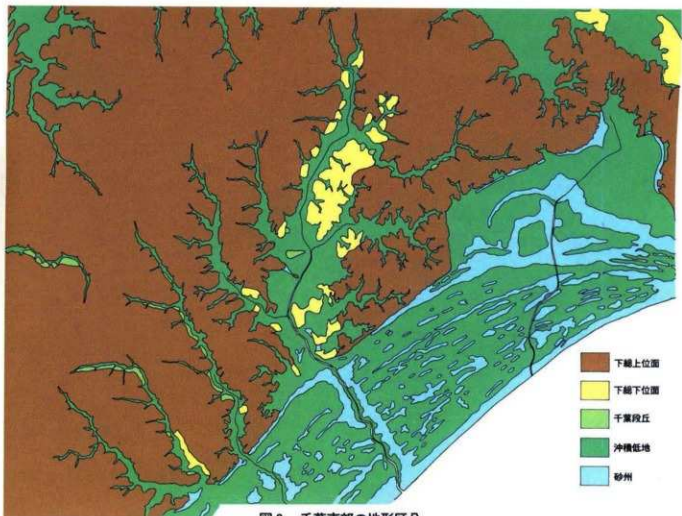


図2 千葉東部の地形区分

ら南にかけての縁辺で高く、北西の内陸へ向かうにつれて低くなる傾向が見られ、関東造盆地運動と呼ばれる地殻変動の結果と見られている。台地には3方向の水系(東京湾・太平洋・利根川)から入り込む谷が多数あり、その谷によって平坦な台地にさまざまな変化を加え、しかも自然のみでなく人々の生活にも影響を与えている。台地の上は森林や畑地が広がり、谷になった所には沖積層が堆積して水田に利用され、埋まり切らない所は印旛沼のような湖沼が形成されている。

下総台地は場所によっては浸蝕が進んで谷が発達し、その過程で谷沿いには河岸段丘が形成されている所がある。それを見ると下総台地を段丘面区分することができ、高いところから下総上位面、下総下位面、千葉段丘の3つに大きく分けられている。下総上位面は下総台地のほとんどを占める段丘面で、形成が最も古く浸蝕が進んで丘陵状になっている所も見られる。下総下位面は台地中の比較的大きい水系に沿って分布し、主に下総台地北西部、手賀沼から印旛沼と栗山川沿いに分布する。高度的には下総上位面とは大きな差はないが、より新期に形成されたことから浸蝕が進んではなく、より平坦であることが特徴である。千葉段丘は中・小規模の水系にも見られる段丘で、より発達して

いるところではさらに2~3段分けられる。この段丘は主に東西に走る中小河川の南側に分布し、千葉市都川沿いや富里町高崎川、松尾町木戸川沿いに見られる。

遺跡のある光町篠本周辺では、光町から八日市場市飯塚にかけて、台地のほとんどが浸蝕は進んでいて、台地上に平坦部がほとんど無い丘陵状になった下総上位面が広がる。その西側に流れる栗山川に接するところには、台地上が平坦な下総下位面が分布する。特に篠本の西に位置する市野原台地、宝米台地はその下総下位面の典型であり、篠本の城山、新台、夏台なども小さくなるが、同じ段丘面である事が地層からも確認できた。またこの地域にも下総下位面よりも低い段丘面が所々に散在し、千葉段丘を見ることが出来る。篠本から北へ栗山川の対岸にある多古町島台地、篠本の南には光町小川台集落がのる小川台などがそれである。また余談であるが、多古町島の栗山川沿いの低地を発掘した際に埋没被蝕台が検出され、まだ沖積低地の下には目にすることができない台地が埋没していることも考えられる。この地域の遺跡は、台地上の平坦面が広い下総下位面や、低地に近い千葉段丘に多く分布する。



写真 2 光町北部の航空写真

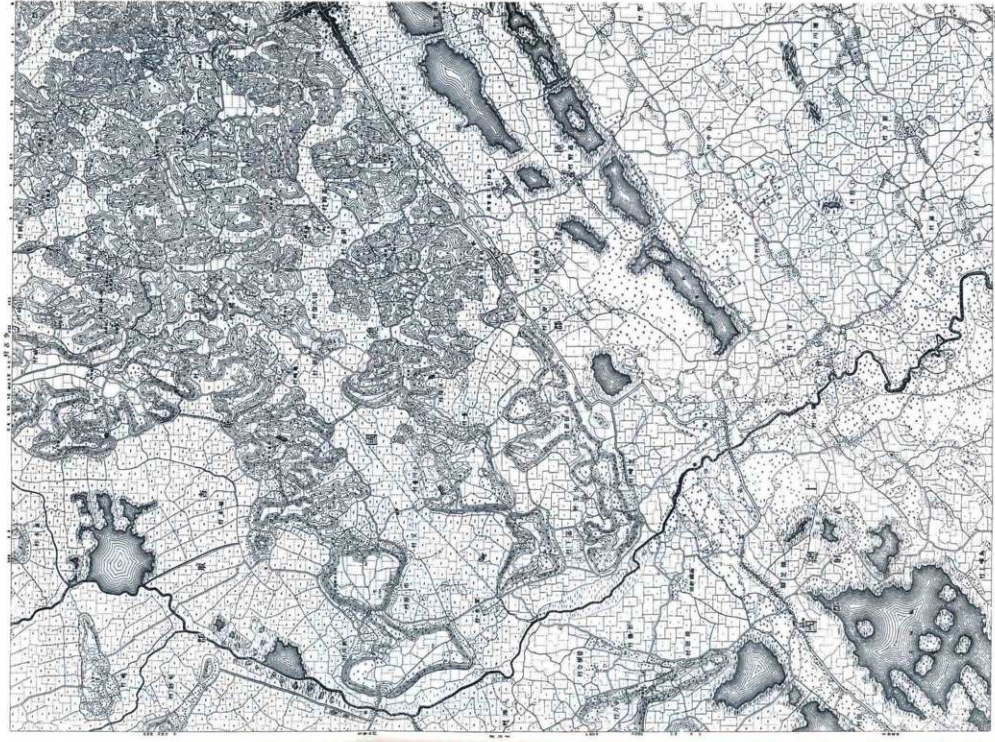


図3 明治時代の光町の地形 (明治18年陸軍部陸地測量部作成)

3) 低地地形

千葉で言う低地とは台地に対して指し、そのほとんどは台地を侵蝕して形成した谷や、海岸沿いの過去1万年以降の更新世に土砂が堆積してできた地形で、沖積平野とも言う。標高は1~10mぐらいで、ほとんど平坦で、地下水位が高いことから水田に利用されている所が多い。また土砂が埋まり切らない所は印旛沼や手賀沼のように湖沼として残されているが、近世以降大規模な干拓などによって陸地化した所もある。八日市場市の東に広がる低地は、元は樺の海と呼ばれる沼があって、江戸時代に干拓されたが、今日樺海という地名がその名残を示す。

海岸沿いに形成される海岸平野は、海流によって運ばれる土砂によって形成され、砂州(砂堤)と後背湿地(堤間湿地)から成っていて、弱い凹凸が見られる。特に九十九里平野は幾条もの砂州が発達していて、後背湿地にはまだ湖沼も見られる。また比較的大きい河川流域にも、川によって運ばれた土砂の堆積で砂州が形成されていて、台地下から伸びる砂嘴や流れに沿って自然堤防などが見られる。これら沖積低地に形成された砂州は、周囲の低地より少し高いところから微高地とも呼ばれ、古く形成された所には遺跡が存在することが少なくない。本地域の九十九里平野の砂州上には多数の遺跡が発見されていて、それらの遺跡をつないで細長い砂州上に古道が走っていたことも想定されている。栗山川沿いにも小規模な砂州が多く見られ、現在は集落や畑地となっているが、中世には船着き場や市場があったのではないかという考察も出されている。

4) 地質

千葉県の北半分を占める下総台地は第四紀後期層である下総層群で構成され、南半分の半島部は第三紀末から第四紀中期層で構成され、その大半は比較的新しい地質で成る大地である。その中で下総台地東端の銚子市大吹崎周辺と半島中部の鴨川市嶺岡は、中世代層や火山岩層などの古い地層が現れていて、千葉県内で



写真3 光町母子にある切り通しの露頭

も様相を異にする。これら台地や丘陵が侵蝕されてできた谷部には、過去1万年以降の完新世に堆積した沖積層がある。

本遺跡のある下総台地東部地域では、削られた台地の崖を見ると下総層群の上部を観察することができる。下総下位面にあたる城山の台地では、赤土である関東ローム層の下には常総粘土層(これもローム層)、龍ヶ崎層、木下層、上岩橋層、清川川の堆積が見られる。しかしすぐ東の九十九里平野に接する付近では、上総層群の上部が顔を出している。これらの層の中で龍ヶ崎層は、下総下位面の段丘礫層になる。木下層は細かい砂で層理が発達していて崩れやすい。上岩橋層は硬



写真4 城山の地層

いシルト層でこの上部が中水層となって水がよく湧き、井戸や水場が作られている。清川層は粗い砂の層である。上総層群上部はさらに硬いシルト層で、これをブロック状に切り出して古墳石室の壁材に使っている。多古町島の低地で出た波蝕台でもこの層が露出している。これら木下層以下は含まれる貝化石から、海中に堆積した海成層であることが分かっている。

下総層群の上で台地に堆積する赤土や粘土層は、関東ローム層と呼ばれる火山灰層で、城山遺跡では3m程度堆積している。この火山灰は主に箱根山や富士山からの噴出物で構成されるが、中には鹿児島湾始良デルタや木曾御嶽山から噴出した特殊な火山灰(始良TN火山灰、御嶽第1軽石)もある。遺跡での赤土は大きく二つに分けられていて、上を立川ローム層、下を武蔵野ローム層と呼ぶ。立川ローム層は主に富士山から、武蔵野ローム層は主に箱根山から噴出した火山灰である。その下の粘土層は水中に堆積して粘土化が進んだ箱根起源の火山灰で、この粘土を採取して縄文時代以降土器を作っていたと推定する。また特殊な始良TN火山灰は今から2.2~2.1万年前に堆積した細かい火山ガラスを主にしたもので、立川ローム層中で黄色を示して肉眼でも見る事ができる。本遺跡群中でもこの火山灰層の上下から、旧石器時代の遺物が出土している。

低地には沖積層が堆積しているが、遺跡のある東総地域には特に泥炭層が発達していて、古くから独木舟が多く出土していることで知られている。泥炭層は栗山川流域から九十九里平野にかけて分布し、厚さ1mから数mに及び、マコモを主とした堆積物で成り、中にはヒシの実も多く含まれる。おそらく3,000~4,000年前の縄文時代に堆積、形成したと考えられる。城山のすぐ南側の谷津を発掘した所、地表下2mで泥炭層が現れ、2mの堆積があり、この泥炭層の花粉分析を依頼したところ、栗の花粉が多量に検出された。

(2) 篠本の動植物

1) 動物相

篠本は台地の浸蝕が進んで丘陵状と成っていて、利用しにくい斜面地が多く、比較的自然が残されていた。斜面地は杉の植林による人口林より、椎や樫などの自然林が鬱蒼と茂り、これら実の成る樹木は動物の棲息にも好条件を与えていた。哺乳類ではタヌキ・イタチ・ノウサギが調査中に見られ、鳥類ではキジが年間を通じているほか、猛禽類のサシバの営巣を確認、そのほか小型鳥ではスズメ・ヒヨドリのほかウグイス・コゲラ・カワセミ、大型鳥では水田にコサギ・ダイサギ・



写真5 篠本のタヌキ

アマサギ・ゴイサギ・マガモなどが飛来した。爬虫類では比較的マムシが多く、アオダイショウ・シマヘビ・ヤマカガシなども見られた。両生類ではアマガエル・アカガエル・ヒキガエルが多い。魚類では谷底の水田にメダカ・モツゴ・ドジョウがいた。このほか無脊椎動物では昆虫など多種類が棲息したが、特に確認していない。水田ではザリガニ・タニシが多数おり、サギ類の餌となっていた。以前に町内虫生鬼堂遺跡でトウキョウサンショウウオを発見したが、ここでは確認できなかった。



写真6 サシバの巣立ち



写真7 城山の初夏の芽吹き

2) 植物相

台地の一部には杉・檜・アスナロを植林した人口林やマダケの竹林があるが、斜面部のほとんどは椎・樫を主体にしたいわゆる照葉樹林と呼ばれる自然林が鬱蒼と覆っていた。照葉樹林は中国南部から日本列島太平洋岸に分布する暖地性の樹林帯で、楠や椿のようなつやのある葉を付けた常緑広葉樹を主とするところから呼ばれる。遺跡周辺で見られる常緑広葉樹は、椎・樫類ではスダジイ・マテバシイ・アカガシ・シラガシ、楠類ではクスノキ・タブノキ・シロダモなどが主体となっている。そのほかモチノキ・ネズミモチ・ツバキ・



写真8 神山谷の常緑樹

サカキ・カクレミノが生える。また常緑広葉樹に伴って落葉広葉樹も多くの種類が見られ、クリ・コナラ・クヌギなどの椎と同じブナ科樹木をはじめ、ケヤキ・エノキ・ムクノキ・ヤマザクラ・ウワミズザクラ・イヌシデ・アカメガシワなどが多く、ニセアカシアのような渡来樹も侵入している。背の低い灌木(かんぼく)ではムラサキシキブ・ヤマツツジ・マンリョウ・ハナイカダなど我々の目を楽ませる木や、サンショウ・ノイバラ・タラノキなど刺を有して、人が森に入るのを拒むような木もある。蔓性ではフジ・テイカカズラ・サネカズラ・スイカズラ・アケビ・ツルウメモドキ・ツタが高木にからむ。

常緑広葉樹林の下には灌木だけでなく、さまざまな下草も生えている。春先に咲くシュンラン・キンラン・ギンラン・ササバギンランや、秋咲きのミヤマウズラ・コクランなどのラン科、ヤマユリ・ギボウシ・ヤブラン・リュウノヒゲ・ホトトギス・ホウチャクソウ・サルトリイバラなどのユリ科、そのほかホタルブクロ・ウラシマソウ・ヤマイモ・フタリシズカ・ノギク・フキ、半木本的なヤブコウジ・フユイチゴなどがある。またワラビ・ゼンマイ・ヤブソテツ・ノキシノブ・ヤマイタチシダ・ウラジロなどのシダ植物も多い。元畑地であった所はススキやカヤ・シノダケがはびこる。遺跡下の谷津は水田であったが、耕作をやめると同



写真9 夏台のギンラン

時に湿地性の植物が多数繁茂した。低いものではキンボウゲ・セリ・ミズワラビ・ミズソバ・オモダカなどが生え、高いものではヨシ・ガマが優勢であった。

3) 花粉分析

城山のすぐ下の谷津中央部を4m程掘削して、沖積層の観察と土層資料を採取して花粉と珪藻の分析をした。試料採取と分析はバリノ・サーベイに委託、その結果について触れることにする。なお、分析結果の報告は、そのまま資料編に掲載しておく。

掘削したところの地層は深さ2m程のところを境に、



写真10 花粉分析の試料採取

上部がシルト層、下部が泥炭層に大きく分けられる。さらに上部のシルト層は1mぐらいのところに変化している。この間で特に古い水田跡は検出できなかった。ただ1m程のところでも中世陶磁器片が出土した。

花粉化石の大まかな傾向は、上層部のシルト層ではマツ属、イネ科が多く、下層部の泥炭層ではクリ属が多い。また中位ではスギ属、コナラ属が一時的に増加している。このように三つの層によって花粉化石の種類構成が異なる要因は、次のような事が考えられる。下層の泥炭層でクリ属が他を卓越しているのは、周辺の台地で栗の木を植林して栽培していた可能性が考えられ、それは縄文時代であった。近年、青森県の三内丸山遺跡でも花粉分析やクリの遺伝子分析をしたところ、クリを栽培していたらしいことが明らかになり、同じような特徴がここでも得られた。上層部のイネ科が多いのは、イネの栽培が考えられ、マツ属が多いのは竈(カマド)の焚き付けに松葉や薪を利用するために松の木を植林していったと推定される(成長した松の木は用材としても使われる)。それは弥生時代か古墳時代にあたり、近年まで松を利用していたところは松林が見られたが、利用されなくなると手入れされなくなり、急速に立ち枯れていったことは記憶に新しい。中位でスギ属やコナラ属が増加しているのは、縄文時代から弥生時代への転換期あるいは空白期に、周辺の台地が一時的に自然に戻ったからではないだろうか。

<参考文献>

- 前田四郎監修 千葉県地学のガイド編集委員会編 (1979) 千葉県 地学のガイド コロナ社
 千葉県史料研究財団編 (1996) 千葉県の自然誌 本編1 千葉県の自然 千葉県
 千葉県史料研究財団編 (1997) 千葉県の自然誌 本編2 千葉県の大地 千葉県

2. 篠本の歴史（歴史地理）

（1）篠本の原始・古代

1) 黎明

前出の地質のところで、篠本やその周辺の大地がいつごろ、どのようにできたかを述べ、2万年前の旧石器時代の石器が出土していることも触れた。

千葉県の北半分を占有する下総台地には、これまでに多数の旧石器時代の遺跡が発見され、古くは今から3万年前に生活していた跡が赤土の中から発見されている。全国的には宮城県の上高森遺跡で出土した、今から65万年前の原人が使ったとみられる石器が最も古い。篠本のある東総地域では、当センターが平成4年に調査し、2万年前の石器が出土した鏡子市三崎3丁目遺跡が知られ、そのほか数箇所確認されている。また南へ行くと松尾町でも、3万年前の大きな生活跡が見つかった。このように下総台地全域にわたって過去3万年以降、人々が住み始めたことが明らかとなった。遺跡のある光町でも篠本の西に位置する宝米台地や、多古町島の栗山川のわきで発掘された低地で、旧石器時代の石器が発見されている。

篠本の遺跡群では神山谷遺跡と夏台遺跡で、2万以上前のもと思われる石器が2点ずつ出土している。しかし、生活の跡は両遺跡とも見つからなかった。石器はいずれも石刃と呼ばれる刃物で、肉や果物などの食べ物を切ったり、つるやひもを切ったりするのに使った道具で、いまだに鋭い刃をもっていた。もしかすると旧石器人はこれを携えて篠本に狩りか、そのほかの食べ物を取りに来て、一休みしたときに石器を置き忘れたか、落として行ったものかもしれない。篠本の旧石器時代は、この時にしか人々が現れていない。そして次に現れたのは縄文時代が始まろうとする1万年前頃である。

2) 縄文時代

1万年前ころの縄文時代の初めは草創期と呼ばれ、人々はまだ土器を作り始めたばかりで、土器を多く持っていないで、まだ槍先形尖頭器という旧石器時代の伝統を残した石器を主に使って生活していた。その中に城山遺跡で出土した有舌尖頭器と呼ばれる石器がある。下総台地にはこの時期の遺跡がいくつも見つかっていて、石器のみが出土している遺跡や、有舌尖頭器と土器とがいっしょに出土している遺跡、旧石器時代の伝統を残す石器はなく、縄文時代の石器である石鏃（やじり）や石斧と土器とがいっしょに出土している遺跡など、さまざまな姿の遺跡がある。これは旧石器



写真11 篠本遺跡群内で出土した旧石器時代の石器

時代から縄文時代への変化を示していると理解されている。篠本の城山遺跡では石器2点と、この時期の土器片が1点出土しただけで、生活の跡はなかったことから、やはり草創期人も狩りに来たのであろう。

8,000年前の早期になると篠本では多くの縄文人が来るようになり、城山遺跡や神山谷遺跡、夏台遺跡では生活の跡である住居跡や炉穴、動物を狩る陥穴などが発掘で出てきた。また城山遺跡では東側の斜面部から大量の土器がまとまって出土したが、この土器を使った人々の生活の跡は見つからなかった。おそらく中世の土木工事によって、失われたかもしれない。7,000年ぐらい前になると、縄文人は炉穴と言う焚き火をする穴に住居跡以外に残し、城山遺跡より神山谷遺跡や



写真12 光町虫生駒形遺跡の縄文貝塚（確認調査で）

夏台遺跡に多く見つっている。また周辺では八日市場市の吉田遺跡や、多古町島の低地遺跡でも遺構や遺物が多数見つっていることから、このころにはこの周辺に多くの縄文人が生活していたと思われる。

6,000～5,000年前の前期になると神山谷遺跡と新台遺跡で、住居跡や土器が発見されているが、城山ではほとんど出土していない。周辺でもこのころの遺跡はあまり知られていない。

4,000年ぐらい前の中期には、城山や神山谷遺跡で土器が出土しているが、住居跡は見つからない。しかし周辺では遺跡の南に位置する光町内の虫生駒形遺跡では住居跡や貝塚が見つかり、多古町千田の千田境貝塚では多くの遺物が出土している。また八日市場市久方に久方貝塚が知られ、このころにこの辺りで縄文の貝塚文化が発展し始めた。また光町内古屋の福秀寺では同時期のものと考えられる石斧が出土している。

3,000年前ころの後期になると、篠本ではほとんど遺物が出土していないが、周辺では前出の千田境貝塚、久方貝塚が中期に引き続いて貝塚文化が営まれた。また八日市場市の借当川流域でも多くの土器や同時期の独木舟が出土していて、低地にも活動の場を広げていたらしい。光町内でも桑郷辺りで同時期の土器が出土している。

2,500年前の晩期には横芝町の山武姥山貝塚が知られ、また多古町島でも最近同時期終末の遺跡が発見されている。その終末期の土器と同じものが城山でも出土し、島の遺跡との関連が考えられる。

3) 弥生時代

2,000年前の西暦1世紀から4世紀は下総台地でも弥生文化が展開し、多くの遺跡が残されている。台地東部の東総地域でも数箇所遺跡が確認されているが、いずれも小規模な集落である。

篠本でも神山谷遺跡と夏台遺跡で中期から後期の住居跡が数軒見つかり、城山では土器が出土している。また遺跡群の北東に位置する神山谷遺跡では、中期の石斧が採集されている。さらに周辺では八日市場市の吉田遺跡や丸山遺跡でも集落跡を発掘している。

4) 古墳時代

古墳時代では遺跡の南に位置する小川台古墳群が有名である。この小川台古墳群は匝瑳物部氏の墓であると言われている。篠本遺跡群にも古墳や住居跡が多数見つっており、この時代には周辺も含めて多くの人々が住んでいたことがわかる。篠本の古墳は調査前にはもう墳丘はなく、発掘によって古墳の周りの溝があったり、埋葬施設が発見されたりして、古墳が遺跡群の4遺跡ともあったことが確認された。また住居跡も



写真13 光町小川台古墳群

それぞれの遺跡で見つかり、小規模であるが集落を形成していたようである。周辺では前出の吉田遺跡でも発掘し、またその近くには同時代の横穴墓が作られている。神山谷遺跡では埴輪の破片を採集している。

5) 奈良・平安時代

奈良・平安時代になるとこの地域は、匝瑳物部氏に代わって匝瑳氏が領したと言われ、下総国匝瑳郡が設置され、八日市場市辺りに郡衙があったと推定され、また同市大寺にはこの時代に創建された龍尾寺があり、地方も整備されて行ったようである。その一方でこのころ下総国を中心として、俘囚の乱(875年 貞観17年)



写真14 城山に出現した平安時代の家

や、平将門の乱(935年 承平5年)、平忠常の乱(1028年 長元元年)などが勃発して、次第に荒廃して行ったと推定されている。

篠本の神山谷遺跡では奈良時代から平安時代中期の住居跡が発掘で多数見つかり、集落が大きくなってきたようである。それに対して城山遺跡は面積が広いにもかかわらず11軒しか住居跡が発見されてなく、新台遺跡や夏台遺跡でも少ない。しかし、新台遺跡では「寺」墨書の土器が、城山遺跡でも「阿弥陀寺」墨書の土器が出土している。このような篠本でも10世紀を境にして集落が姿を消し、再び人々の息吹が戻るのは13世紀の中世に入ってからである。

- | | | | |
|----|---------|----|-----------|
| 赤 | 中世遺跡 | 28 | 多古町飯土井台館跡 |
| 1 | 光町篠本城跡 | 29 | 分城跡 |
| 2 | 要書台城跡 | 30 | 中城跡 |
| 3 | 寒風城跡 | 31 | 物見台跡 |
| 4 | 宝米城跡 | 32 | 並木城跡 |
| 5 | 小川台砦跡 | 33 | 香岡城跡 |
| 6 | 岩室砦跡 | 34 | 千田の台遺跡 |
| 7 | 台砦跡 | 35 | 牛尾砦跡 |
| 8 | 傍示戸城跡 | 36 | 芝山町飯櫃城跡 |
| 9 | 傍示戸遺跡 | 37 | 上細子城跡 |
| 10 | 駒形城跡 | 38 | 上吹入城跡 |
| 11 | 鬼堂遺跡 | 39 | 大台城跡 |
| 12 | 小田部砦跡 | 40 | 田向城跡 |
| 13 | 田中砦跡 | 41 | 宮崎城跡 |
| 14 | 丸塚城跡 | 42 | 山中城跡 |
| 15 | 中の城跡 | 43 | 横芝町小堤要書城跡 |
| 16 | 古城跡 | 44 | 坂田城跡 |
| 17 | 多古町東漸寺跡 | 45 | 長倉砦跡 |
| 18 | 土橋城跡 | 46 | 松尾町八田砦跡 |
| 19 | 井戸山砦跡 | 47 | 山室城跡 |
| 20 | 飯笹陣屋跡 | | |
| 21 | 北の内遺跡 | | |
| 22 | 東台城跡 | | |
| 23 | 多古城跡 | | |
| 24 | 出城跡 | | |
| 25 | 志摩城跡 | | |
| 26 | 大島城跡 | | |
| 27 | 大島砦跡 | | |

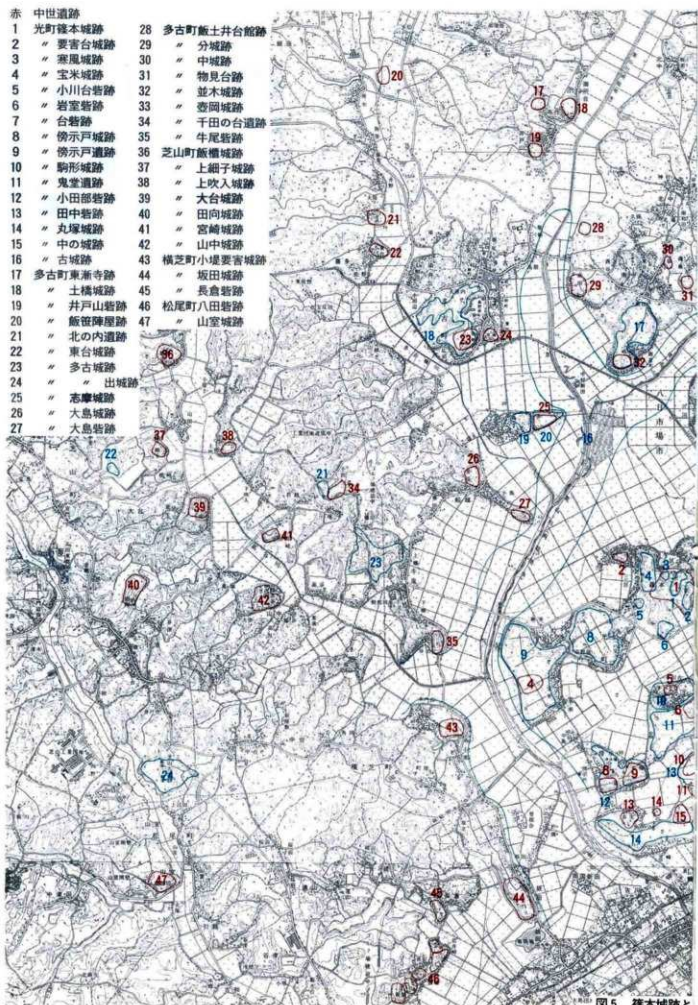
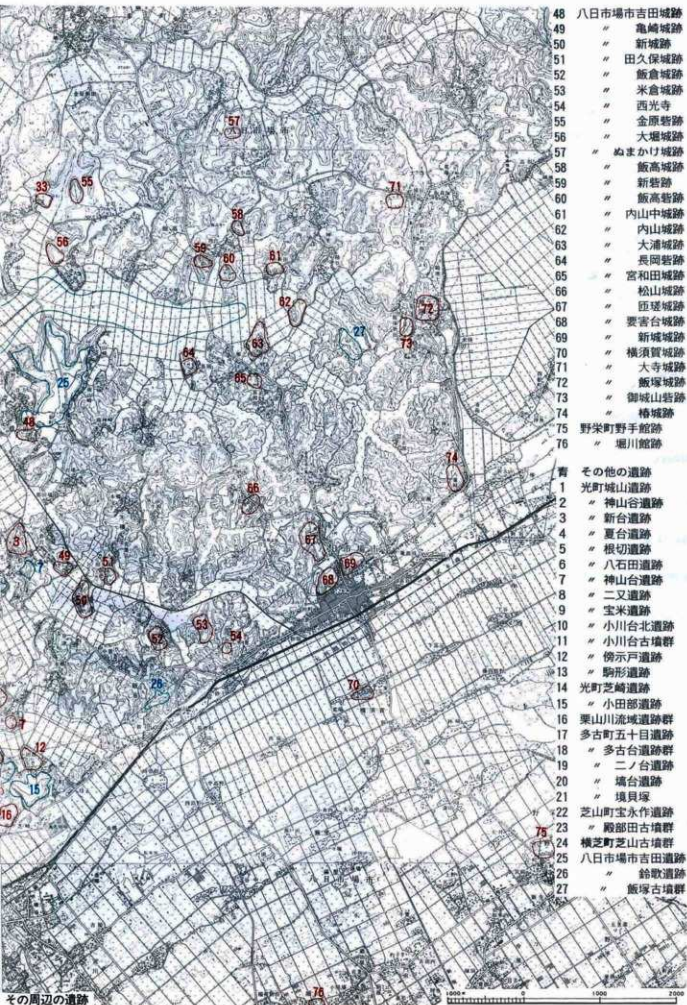


図5 篠本城跡と



- 48 八日市場市吉田城跡
- 49 " 亀崎城跡
- 50 " 新城跡
- 51 " 田久保城跡
- 52 " 飯倉城跡
- 53 " 米倉城跡
- 54 " 西光寺
- 55 " 金原砦跡
- 56 " 大堰城跡
- 57 " ぬまかけ城跡
- 58 " 飯高城跡
- 59 " 新砦跡
- 60 " 飯高砦跡
- 61 " 内山中城跡
- 62 " 内山城跡
- 63 " 大浦城跡
- 64 " 長岡砦跡
- 65 " 宮和田城跡
- 66 " 松山城跡
- 67 " 匠塚城跡
- 68 " 要害台城跡
- 69 " 新城城跡
- 70 " 横須賀城跡
- 71 " 大寺城跡
- 72 " 飯塚城跡
- 73 " 御城山砦跡
- 74 " 檜城跡
- 75 野栄町野手館跡
- 76 " 堀川館跡
- 青 その他の遺跡
- 1 光町城山遺跡
- 2 " 神山谷遺跡
- 3 " 新台遺跡
- 4 " 夏台遺跡
- 5 " 根切遺跡
- 6 " 八石田遺跡
- 7 " 神山台遺跡
- 8 " 二又遺跡
- 9 " 宝米遺跡
- 10 " 小川台北遺跡
- 11 " 小川台古墳群
- 12 " 佛示戸遺跡
- 13 " 駒形遺跡
- 14 光町芝崎遺跡
- 15 " 小田部遺跡
- 16 栗山川流域遺跡群
- 17 多古町五十目遺跡
- 18 " 多古台遺跡群
- 19 " 二ノ台遺跡
- 20 " 塚台遺跡
- 21 " 埴具塚
- 22 芝山町宝水作遺跡
- 23 " 殿部田古墳群
- 24 横芝町芝山古墳群
- 25 八日市場市吉田遺跡
- 26 " 鈴歌遺跡
- 27 " 飯塚古墳群

その周辺の遺跡

(2) 篠本の中・近世

1) 鎌倉時代

鎌倉時代下総国は源頼朝から信任を得た千葉介常胤が守護に任じられ、その子孫が同国各地を分有して行った。平安時代後期から鎌倉時代初期で確認されている遺跡は少なく、この周辺では野栄町の堀川館跡が、また少し離れて飯岡町の佐貫城が知られるくらいである。堀川館は1242年(仁治3年)、後堀河天皇の第2皇子吉仁親王がこの地に来て、居館を建てて住んだことから堀川と呼ばれたという伝説がある。佐貫城は城主片岡常春が源義経と親交があったと言われている。光町虫生広濟寺に伝わる鬼來迎という仏教劇は、鎌倉時代に成立したと言われている。また篠本新善光寺に安置される阿彌陀如来像のほか、小川台隆台寺、宝米光明院、古屋福秀寺、木戸観音院などに鎌倉時代作と言われる仏像が多くあり、このあたりが鎌倉文化の発展していった地域であったことを物語っている。篠本でも13世紀ころの陶磁器が出土していることから、このころから人々が再び住み始めたと思われる。

2) 室町時代

鎌倉時代から室町時代に変わるころは南北朝時代とも言われ、戦乱が全国的に広がった時でもある。この地域もその例にもれず、ここを舞台の一つの争いが起きている。千葉氏の相続争いと南北朝の対立とがからんで、千田の庄の乱が1335年(建武2年)に発生、多古町の東禅寺、土橋城などが文書に現れ、このときに篠本城主らしい人物も登場する。さらに1455年(享徳4年)、古河公方と関東管領との対立(享徳の乱)からんで、またも千葉氏同族の内紛が起きて、多古町志摩城(島城)、東禅寺で千葉宗家が滅ぼされると言う事件がおこる。この享徳の乱前後に東総地域では多くの城が築かれ、特に乱後の城跡は今日までその姿をよく残している。九十九里平野とそれを望むところには、野栄町の野手館跡、八日市場市では飯倉城跡、米倉城跡、光町では芝崎城跡、小田部城跡などは、千葉庶流の匠塙権名党の諸城である。篠本の北端にある寒風城跡も同系の城である。16世紀になると千葉氏は小田原北条氏の傘下に入り、その支配関係から栗山川を挟んで坂田城跡や田向城跡、篠本の東には新村城跡などが築かれている。このほか中世には鎌倉時代から室町時代にかけて、板石塔岩(略して板碑とも言う)と言う供養塔が盛んに建立され、篠本の周辺の新善光寺、光明院、新井路傍、小川台隆台寺、台宗龍寺、虫生路傍などに見られる。これら板碑の多くは、雲母片岩と呼ばれる茨城県波南部産の石材が使われているが、古墳石室から抜かれて使われ、篠本の古墳もその犠牲に



写真15 光町篠本新善光寺山門



写真16 新善光寺の五輪塔と板碑



写真17 多古町寺作東禅寺



写真18 光町小川台隆台寺山門

II. 発掘調査の成果

1. 縄文・弥生時代

城山遺跡では旧石器時代の遺物は全く見つからず、生活の跡も検出しなかった。

(1) 縄文時代草創期

(1万2千年～1万年前)

城山遺跡では、縄文時代の最初の頃の遺物が数点出土し、最も古い縄文人がここに来ていたことがわかった。その遺物は有舌尖頭器と呼ばれる石鏃（ヤジリ）に似た石器で、槍の先か矢の先に付け、狩りに使った道具で、右図上の2点である。また土器の破片が1点（右図下）出土していて、これには表と内面に縄文を施していることから、最も古い土器の一つと考えられる。こうした遺物を有する時期を縄文草創期としていて、千葉県内でも10数カ所の遺跡が見つかっている。

(2) 縄文時代早期

(9,000年～7,000年前)

この時期になると城山遺跡では、生活の跡である焚き火をした穴や動物を狩る穴、人を埋葬したらしい穴などが残され、また土器を多量に捨てた場所が見つかったりして、縄文人がここで暮らした事が明らかになった。しかし、住まいの跡である住居跡は見つからなかったため、どのくらいの人々がどのように生活していたかは不明である。

1) 炉穴（ろけつ）

焚き火をした穴を炉穴と呼び、早期の後半期に多く作られることが知られ、神山谷遺跡や夏台遺跡では多数見つかっていて、城山遺跡では中央部で2基検出した。どちらも1m×0.4mほどの小規模なもので、条痕文土器という土器片が少し出土した。

2) 陥穴（おとしあな）

動物を狩るために掘った穴を陥穴と呼び、早期の早い時期から盛んに作られ、様々な形、大きさ、深さがあり、神山谷遺跡や夏台遺跡でも見つかっている。城山遺跡では長方形のものや細長いものがあり、どちらも早期の陥穴と考える。2～3m×1mの大きさで、

深さは1～3mあり、鹿や猪を追い込んで落として取ったと思われる。陥穴からは早期前半期の燃糸文土器の破片が少し出土した。

3) 土坑

人を埋葬したと考える穴は台地中央部にあって、径1.5mほどの円形で、深さ0.2mを測り、中から握拳大の敲石と早期半ばの土器片が出土した。そのような状



写真20 縄文時代草創期の遺物



写真21 縄文時代早期の炉穴



写真22 縄文時代早期の陥穴

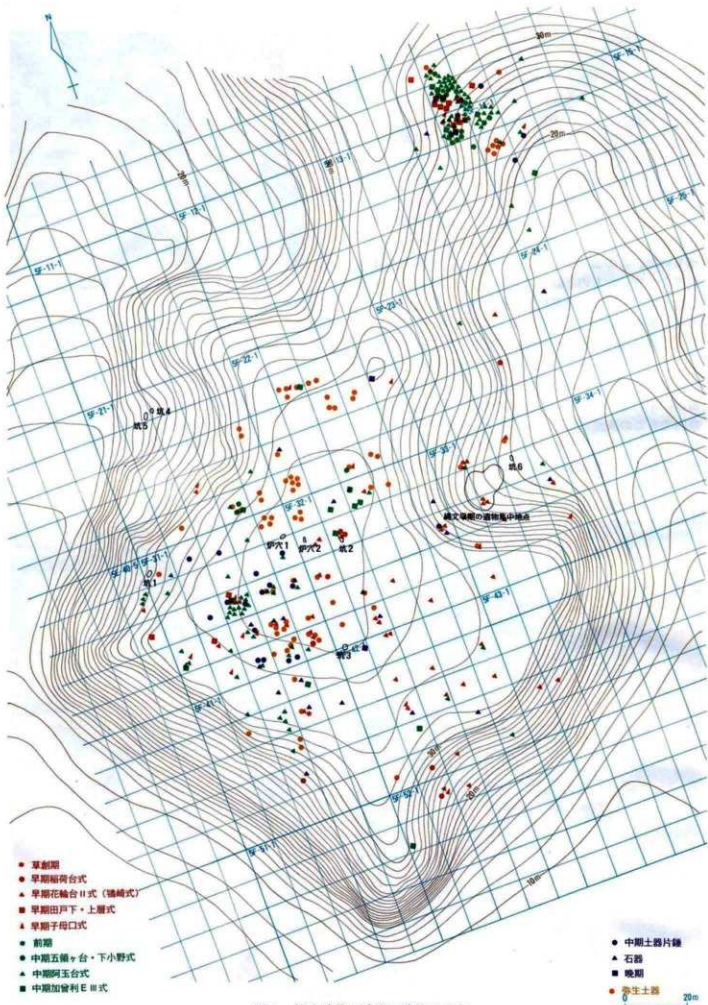


図6 縄文時代の遺構と遺物の分布

況から人骨はなかったものの、墓坑であると推定した。

4) 早期遺物集中地点

土器を多量に捨てた場所は、城山台地の東側を10m下った斜面部にあり、中世の斜面整地から辛うじて免れた200㎡ほどの面積に、約730点の土器片、石器が散乱した状態で出土した。そこは緩やかな沢状になった所で、遺物分布の中央部には湧水があり、水分の多い黒色土が30～40cm堆積し、その中に遺物が含まれていた。このような所から出土したため、土器のほとんどは風化が著しく、軟弱になったり表面剥離しやすくなっていた。この遺物集中地点から出土した土器は、羽状縄文を施したものと同様のものが多くあり、縄文を施したものの中には口縁部に捻糸押圧による文様帯を有する土器や、胴部に捻糸を押圧下垂施文した土器もある。口唇部は丸いものや角張って面取りしたものがあり、底部は平たい平底と丸いか尖った尖底とがある。このような特徴をもった土器は、早期前半の捻糸文土器群の中でも終わり頃の花輪台Ⅱ式に比定され、千葉県内でもこの東部に限定的に分布する極めて地方色の強い土器群である事が知られる。同類の土器は佐原市鶴崎貝塚、多古町宝永作遺跡で発見されている。このような事から、この遺物集中地点から出土した土器群は、ほぼ一時期に捨てられたものと思われ、その斜



写真23 早期遺物集中地点の土器出土状態

面上部か台地上にこの土器を使った人々が生活していたと思われる。しかし、中世の土木工事に際して、その場が失われたのか、それを見つけることはできなかった。またこの遺物集中地点の土器群は、青森県八戸市長七谷遺跡の土器群とも似ていて、もしかすると北日本との関係があるかもしれない。このほかにも城山遺跡からは、縄文早期の様々な土器が多く出土している。最も古いものでは捻糸文土器群の稲荷台式があり、半ばの沈線土器では田戸下層式、田戸上層式、後葉の条痕文土器群では字母口式、茅山上層式などが出土している。



写真24 早期遺物集中地点全景



図7 縄文時代早期の遺物集中地点



写真25 早期遺物集中地点の土器

(3) 縄文時代前期 (7,000~5,000年前)

篠本では縄文前期の遺構・遺物は、主に神山谷遺跡の南端部で数多く出土し、また新台遺跡でも1軒住居跡が出土し、この時期に人々が生活していたことが明らかになった。しかしこの2遺跡に挟まれた城山遺跡では、土器片鍾1点(黒浜式)と後半期の土器片数点(浮島Ⅲ式)が出土したのみであった。



写真26 縄文時代早期の土器

(4) 縄文時代中期 (5,000~4,000年前)

中期になると城山遺跡では土器などの遺物が増えるが、住居跡のような遺構は全く見つからなかった。土器はこの時期初めの五領ヶ台式・下小野式などから、阿玉台式、加曾利E式など、全般にわたる土器が出土した。これらの中で前二者は城山東側の谷奥の沢部に集中して分布し、後二者は城山台地全体に分布していた。土器のほかに、阿玉台式土器の破片を加工して製作した土器片鍾が20点、この時期のものと考えられる石鏃、石匙、石斧、敲石、剥片などの石器が出土した。



写真27 縄文時代中期の土器

神山谷遺跡でも同時期の遺物が出土し、近隣では光町内虫生駒形遺跡や、栗山川を挟んだ多古町埴貝塚など、貝塚が発達した遺跡があり、篠本城山とそれらの遺跡との間に、何らかの関係が考えられる。

(5) 縄文時代晩期から弥生時代へ (3,000~2,000年前)

城山遺跡では縄文後期の遺物は出土してなく、次の縄文晩期の土器と、縄文と弥生との中間的な土器が出土した。晩期の土器は成田市荒海貝塚で出土した土器群を示標とする荒海式で、中間的な土器は表面に縄文・刺突・沈線を施文し、裏面に条痕調整されていて、他に類例を見ない。晩期では篠本の遺跡群を調査中に、栗山川対岸の多古町島で同時期の遺跡が発見され、確認したところ同じ土器が出土していることがわかった。おそらく栗山川を利用した活動の跡として、城山の土器が残されたのであろう。縄文と弥生との中間的な土器が見つかからない所から、今後議論の余地が残る。東隣の神山谷遺跡では弥生中期の住居跡が出土しているが、このような土器は出土していない（関東地方では縄文文化が根強く残り、弥生中期(2,000年前頃)になってようやく弥生文化が入り、生活文化が変化して行った）。



写真28 縄文時代の小形石器



写真29 縄文時代の大型石器

(6) 弥生時代 (2,200~1,800年前)

神山谷遺跡では弥生時代の中期から住居跡が出ていて、生活していたことがわかったが、城山では土器の破片が出土したのみで、住居跡は見つけることはできなかった。土器はほとんど後期(1,900~1,800年前)のもので、南関東系の久ヶ原式と、北関東系の十王台式とがあり、後者の方が多い。千葉県では印旛・手賀沼から栗山川を結ぶ線で、南関東系と北関東系との境が想定され、その境界部ではその混在があって、本遺跡でもその傾向を示している。



写真30 縄文時代晩期の土器



写真31 弥生時代の土器

<参考文献>

落合章雄(1992)山武郡芝山町宝永作遺跡 千葉県文化財センター

並木忠良・林 勝則(1992)千葉県八日市場市飯倉鈴歌遺跡発掘調査報告書 飯倉鈴歌遺跡発掘調査会

高柳圭一(1995)佐原市鶴崎貝塚発掘調査報告書 千葉県教育委員会

2. 古墳時代

(1) 遺構について

城山遺跡では古墳時代の遺構は、古墳の跡である周溝2基と、住居跡8軒のほか、墓坑・溝などがある。

1) 古墳

城山遺跡は、発掘調査を開始する前には畑地と一部山林とになっていて、ほとんど平坦であった。そのため地表面からは古墳の存在がわからず、発掘によってその跡である周溝を検出し、ここに古墳があったことを確認した。それによると古墳は台地のほぼ中央部の最も高いところに大小2基あり、そのうち1基は中世の堀が入っているが、それ以外に中世の遺構が重なっていないことから、500年程前の中世に城が築かれた当時はまだ古墳が存在したと考える。古墳は大きい方を先に検出して1号墳とした。

1号墳は周溝内径16.5m、周溝幅は1.8～5.5m、深さ0.2～0.75mで、南側に段がある。このデータから古墳の高さは2mぐらいであったと推定する。古墳内からは遺体を埋葬する施設(主体部)がないことから、おそらく墳頂部にあったと考える。また周溝の南東部からは須恵器の甕(はそう)が散乱した状態で出土した。これはその出土状態から埋葬者の葬送に使われ、使用後に破碎して周溝に散布したと思われる。この須恵器の甕は大阪府にある陶邑須恵器窯遺跡の中の、TK23と呼ばれる窯の生産品に似ていて(宮内勝巳氏より教示)、5世紀の古墳時代中期のもので、古墳も同時期と推定する。

2号墳は1号墳より一回り小さく、周溝内径12.8mを測る。こちらも埋葬施設がなく、1号墳と同じように墳頂部にあったらうと考える。遺物はほとんど無いが、1号墳と同時期であろう。

1号墳の下には2号住居跡とした遺構があり、2号墳には9号住居跡がある。ともに周溝によって削られていて完全ではないが、方形で古墳より古いことは調査で確認できた。しかし住居跡とするには柱穴が不完全で、炉跡がなく、床面が不明瞭なことなどから、生活痕跡が認められない。それでは何のための遺構であったのか。そのヒントは古墳の下にあったと言うことだろう。古墳時代では甕(もがり)という、遺体を棺に入れてしばらく置いておくという葬送儀礼があった。その甕を置いておく壙屋(もがりや)が、古墳の下から出てきた住居跡状の遺構にあたるのではないかと、想定することもできる。



写真32 1号墳(上空から)



写真33 1号墳(北側から)



写真34 2号墳(北側から)



図8 古墳への葬送

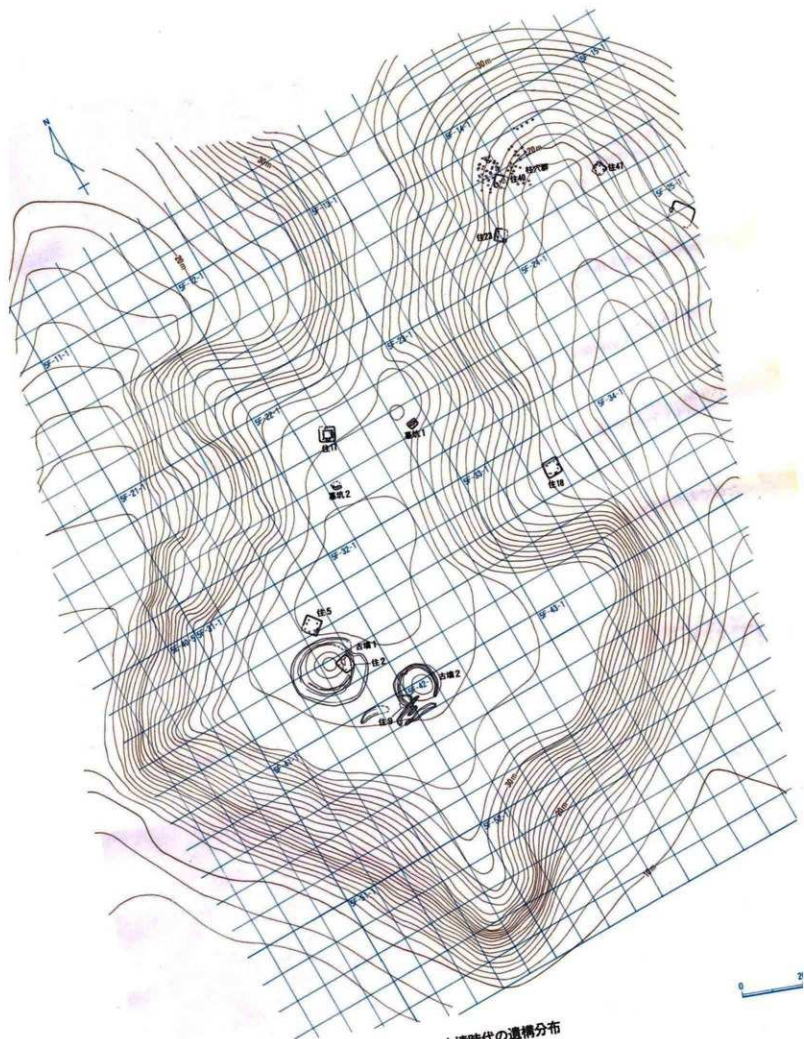


図9 古墳時代の遺構分布

2) 墓坑

城山遺跡では古墳とは別に同時代の墓坑が2基あった。これらの墓坑は、本来古墳の埋葬施設（主体部）であってしかるべきものであるが、周りに周溝がなく、上に墳丘があったとは思えない。そのために古墳の主体部とするより、独立した墓坑として取り上げることにした。位置は台地の北部の1号中世区画の中央部と、その東側見張台にあり、古墳とは異なって台地の端部にあり、墳丘を盛りそうな所ではない。このうち見張台にある方を1号墓、中ほどにある方を2号墓とした。

1号墓は、長方形の掘り方に中央部をさらに掘窪めた形で、棺材が残っていないところから、木棺による直葬であったと推測する。ただ東側に軟質シルト岩礫が枕石のように出土し、覆土を含め全体として荒れた状態であった。そして棺部からは副葬品である玉類や鉄鏃（てつぞくーやじり）などが、散乱した状態で出土した。また人の白歯が1点あった。玉類はガラス小玉、土小玉、琥珀棗玉（こはくなくつめだま）、碧玉管玉（へきぎょくくだたま）などである。これらは古墳時代中期の古墳主体部から、よく出土する副葬品である。1点出土した人の白歯は古墳時代より新しくそうで、とても古墳時代のものではないように見えた。もしかすると中世に、たまたま偶然ここに埋葬された人のものかも知れない。あるいは、中世以降に盗掘被害にあったのであろうか。



写真35 1号墓

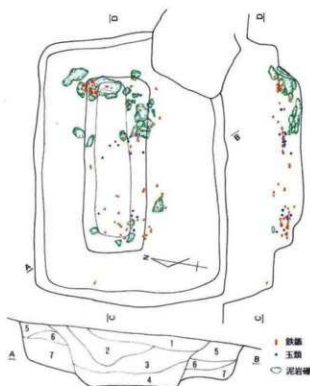


図10 1号墓の実測図

1号墓

時期	中期	層序	1 暗褐色土（ロームが混じる）
位置	5F-22-15	2	※（黒土が混じる）
規模	3.53×2.47m	3	※（ロームが多く混じる）
埋深	2.03×0.85(m)	4	※（ローム、粘土が混じる）
主軸方向	N-31°-E	5	褐色土（ロームが多く混じる）
深さ	0.74m	6	黄褐色土（ローム、粘土が多く混じる）
構造	穴状直葬	7	※（ロームが多く混じる）
遺物	玉類、鉄鏃		

覆土が軟かく、副葬品が散在していたところから、後世に荒されたようである。人白歯が1点出土。中世のものか。

2号墓は長方形の掘り方の中に、軟質シルトのプロックを組み合わせたいわゆる切石積石棺である。しかし中世3号堀に当たり、約半分を削り取られてしまった。堀内には崩れた石棺材とともに、飯岡石と呼ばれる軟質シルト岩礫の石棺蓋石が1点出土した。他の蓋石は中世の石塔に使われたのか、周辺からは発見できなかった。2号墓からは1号墓のような副葬品は、石棺内からは全く出土せず、人骨もなかった。堀を掘ったときに持ち去られた可能性も考えられるが、埋葬に係わる遺物が全くないことから、はたしてここに遺体を埋葬したか疑問が残る。



写真36 2号墓

3) 住居跡

古墳時代の住居跡は8軒見つかり、台地上には4軒、谷部には4軒分布していた。これらのうち台地上の古墳の下から検出した2軒は、古墳の項で述べたとおりである。残り6軒のうち2軒には竈（かまど）を有する後期のものになり、そのほかの4軒が中期のものである。中期の住居跡で台地上の2軒は、炭化した柱材や焼土が出土し、上屋を焼いた痕跡が見られるのに対して、土器などの遺物は少ない。それに対して谷部の住居跡は土器が多数出土した。しかし台地上の5号住居跡ではガラス玉が、17号住居跡の方では石製模造品が出土した。このような住居跡の在り方を推理すると、台地上の2軒はガラス玉や石製模造品など埋葬に係わる遺物から、古墳造成及び埋葬に関わるときの宿泊所であったか、あるいは墓守りの家であったと推定できる。そしてそれらの用が終わったときに、上屋を焼いて始末して行ったのかもしれない。

谷部の18号住居跡は生活用具である土器が出土したことから、通常の生活をした家であったと考えるが、なぜ遺物を住居内に残したかは未だ考える余地がある。これは火事による不慮の事故によって持ち出せなかったのではなく、何か意味を込めて置いて行ったのではないかと、土器の出土状態やその構成から思うからである。

古墳時代の住居跡は、方形に地面を掘り窪め、その中に4ないし5つの柱穴を方形の対角線上に掘り、柱をそこに立て、その柱に梁（はり）を渡し、梁から地面に垂木をかけ、屋根に茅を葺いた竪穴住居であった。そして住居の中には、炊事をする炉（ろ、いろり）や竈、食べ物を保存する貯蔵穴（今日で言う床下収納）などがあり、壁の近くには藁（わら）や筥（むしろ）を敷いた寝床があった。炉は関東では中期から後期になる時竈へと変わり、格段に炊事が楽になった事だろう。城山遺跡の後期の住居跡は竈がある。

4) 柱穴群

古墳時代の建物遺構では、竪穴住居跡のほか高床の住居あるいは倉庫がある。城山遺跡では高床の建物の柱穴と考えられる穴を、谷奥の斜面部で多数検出した。ここで検出した柱穴と思われる穴は、径0.3~0.5m、深さ0.3~0.6mを測り、奈良・平安時代の同様のものと比べると小さい。穴の中には遺物が出土したり、柱材の跡が底に残っているものがあったり、古墳時代の遺構であることを示している。しかし、この柱穴群は斜面部にあって、建物の柱穴として必ずしも配列しないため、高床の建物の柱穴であると断定することはここではさける。隣の神山谷遺跡では、斜面部を平坦にしてから柱穴を掘り、高床建物を建てた遺構が見つかる

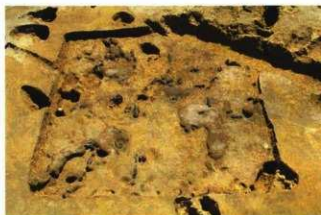


写真37 5号住居跡



写真38 17号住居跡



写真39 18号住居跡



写真40 18号住居跡の土器出土状態

っている。

(2) 遺物について

1) 土師器・須恵器

城山遺跡から出土した古墳時代のやきものは、土師器と須恵器、それに手捏土器、土玉などがある。

土師器には杯(つき)・高杯(たかつき)・碗(わん)・埴(こつば)・甕(かめ)などがあり、中期には特にさまざまな形の器が作られている。これが後期になると杯と甕に収斂する。18号住居跡では杯3点、碗2点、小形壺1点、甕4点が出土した。杯が少し少ないように思うが、これが当時の1世帯の食器一揃えであろう。このほか前期の高杯(38~39・43)・甕(40~41)・壺(42)などが出土したが、遺構はなかった。後期では23号住居跡から杯・甕が出土したぐらいで、中期に比較して少ない。

須恵器は1号墳と18号住居跡から甕(はそう)が、谷奥の柱穴群から長頸瓶(62)が出土したほかは、ほとんどが遺構外から出土したものである。土師器は遺跡の近くで産出する粘土を使って、遺跡周辺で焼かれたのに対して、須恵器はほとんどが関西・東海などの特定生産地で焼かれた器で、その産地、年代によって微妙に異なっている。そこで1号墳から出土した甕を宮内氏に見てもらったところ、大阪府陶邑遺跡で焼かれたものに近いと言うことは前に述べた。18号住居跡出土の甕も同じであろう。そのほか中期の須恵器では高杯(154~155)・甕(46・169~178)・提瓶の把手などが出土している。長頸瓶(62~63・179~194)は平安時代までであるが、ここには古墳時代と思われるものを示した。後期になると須恵器生産は東海地方の猿投(さげ、愛知県名古屋市東部)や湖西(こさい、静岡県湖西市)などに移り、その両産地の須恵器が大量に関東へ流入した。おそらく城山遺跡から出土した古墳時代後期の須恵器の長頸瓶・甕(64~66・195~204)のほとんどは、猿投、湖西両窯で焼かれたものであろう。両窯は平安時代にまでわたって須恵器が生産され、中世になると瀬戸・常滑、瀬美へと、その技術が受け継がれて行った。

奈良・平安時代になると、関東地方にも須恵器の生産技術が伝わり、武蔵国の鳩山窯や常陸国府周辺盛んに焼かれた。本遺跡でも、これらの窯跡生産品と推定される遺物が出土している。また八日市場市八辺にも須恵器窯があることが、確認されている。

古墳時代のやきものでは、土師器・須恵器のほかに、焼きの悪い手捏土器がある。城山遺跡でも住居跡その他で10点出土している。これは祭りの時祭壇に、甕に



写真41 18号住居跡出土の土器



写真42 1号墳周溝出土の甕



写真43 古墳時代の須恵器



写真44 古墳時代の手捏土器

え)を捧げる時に使った器であると言われている。あるいは、子供の手習いや遊びのおもちゃとして、作られたものかもしれない。

2) 玉・鉄鏃

玉・鉄鏃のほとんどは、古墳の埋葬副葬品として多く出土する。城山遺跡でも1号墓から多数の玉・鉄鏃などの副葬品が出土した。

玉類にはガラス小玉、土小玉、石小玉、琥珀玉(こはくなつめだま)、石炭玉(管玉か)、碧玉管玉(へきぎょくだたま)がある。玉の製作遺跡は各地にあり、この近くでは成田市や下総町にあることが知られ、また東総地域でも銚子市椎柴小学校遺跡の発掘で存在が明らかになった。ガラス小玉も最近各地で型が見いだされていて、千葉でも作っていたであろう事がわかってきた。本遺跡でもこのガラス小玉の原材料と思われるガラス棒(113)が、谷奥から出土した。しかし、小玉の型は見つからず、遺跡内でガラス小玉を造った確証は得られなかった。琥珀玉の原材料の琥珀と石炭は銚子市の犬伏崎周辺で採取することができ、縄文時代から使われて来た原石で、唯一地元産の玉原石であるが、その玉造遺跡はまだ確認されていない。

鉄製品の副葬品は、鉄鏃のほか剣、太刀(たち、直刀)などの武器が多い。1号墓からは鉄鏃のみであったが、先端部で数えると15点を数え、平均的数量である。鉄鏃の形は全て先端部が長三角形で柄が長い脇扶長三角形式長頸鏃と呼ばれるもので、中期に多い。全て破損していたが、長さの平均は推定12cmぐらいである。鉄鏃の多くは表面に布痕が見られ、付け根には身の木質が残り、中には鉄鏃同志が同じ部分で付着していることなどから、布製の矢入れに矢をまとめて入れ、副葬したと思われる。

そのほか古墳時代の遺物では、滑石製模造品が2点出土している。143の剣形は表面採集で、17号住居跡からは勾玉形が出土したが、盗難された。

(3) まとめ

古墳時代の篠本では、それぞれの台地に古墳が築かれ、住居(家)が構えられたが、集落(村)を形成して人々が生活していたのは、最も東に位置する神山谷遺跡である。城山遺跡は台地上が神山谷遺跡よりも広いにもかかわらず、集落を形成する事なく、古墳と墓坑、その築造作業小屋らしい住居跡、殯屋らしい遺構があったのみである。ということは古墳時代人は城山を集落として使うより、何らかの精神的な意味を含めて、墓域として使ったのではないか。その傾向は、こ



写真45 1号墓出土の玉類とガラス棒



写真46 1号墓出土の鉄鏃

のあとの奈良・平安時代にも受け継がれ、その墓穴と思われる土坑が見つかっている。

<参考文献>

杉山晋作(1967)宝来六号墳石室調査報告 金鈴20号

滝口 宏他(1975)下総小川台古墳群 小川台古墳群調査団

本多昭宏(1998)千葉県八日市場市大道筋遺跡 東総文化財センター

3. 奈良・平安時代

奈良時代は西暦710年(和銅3年)元明天皇が平城京に都を遷してから、794年(延暦13年)桓武天皇が平安京に遷すまでのわずか85年間である。平安時代はその後西暦1192年(建久3年)源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの約400年間である。奈良時代が短かったこともあるが、考古学上では遺物や遺構が奈良時代から平安時代にかけて連続的に見られ、同じ文化的な様相が認められる所から、区切るよりも同じ区分の中で述べることにしている。

(1) 遺構について

城山遺跡で検出した奈良・平安時代の遺構では、主なものは住居跡があり、そのほかに井戸跡と墓坑がある。

1) 住居跡

城山遺跡で検出した奈良・平安時代の住居跡は、計39軒を数える。このうち台地上では10軒で、圧倒的に谷部の方が多い。また奈良時代と考えられる住居跡は

20軒で、短い期間の中では多い方である。平安時代では前期の9世紀のものとする住居跡は17軒、中頃の10世紀になると考える住居跡は2軒で、かなり少なくなる。そして平安時代後半期の住居跡は、全く見られなくなってしまう。全国的にも平安時代後半期の遺跡が少なくなり、この現象に対してさまざまな論議が交わされているが、今のところまだ解明されていない。

さて、城山遺跡でこの時代の住居跡で注目されるのは、台地上中央部付近の1号墳南側にある1号住居跡である。この住居跡の竪穴の大きさは1.66×2.33mで、規模としては小さい方である。深さも0.17~0.33mで、それほど深くはない。しかし、この住居跡からは、遺物が生活していた当時そのまま、と言って良いような状態で出土した。破損した甕はあるが、向かって電(かまど)の左側には須恵器の甕が並び、その甕の1つの中には鉄鏝が、もう一つには杯が入っていた。その甕のわきには小形の土師器甕や杯、磁石が置かれ、右側にも小形甕があった。また電上には破損したが須恵器甕がかけられた状態で出土した。さらに電前庭の床面上からは炭化した豆(小豆)と麻布が出土した。この時代の住居跡からはよく炭化した米が出土することがあるが、豆が出た例はあまり聞かない。南壁付近から出土した上半分のない須恵器甕は、内面が摺鉢(すりばち)のように使用摩滅していて、おそらく甕を摺鉢



写真47 1号住居跡

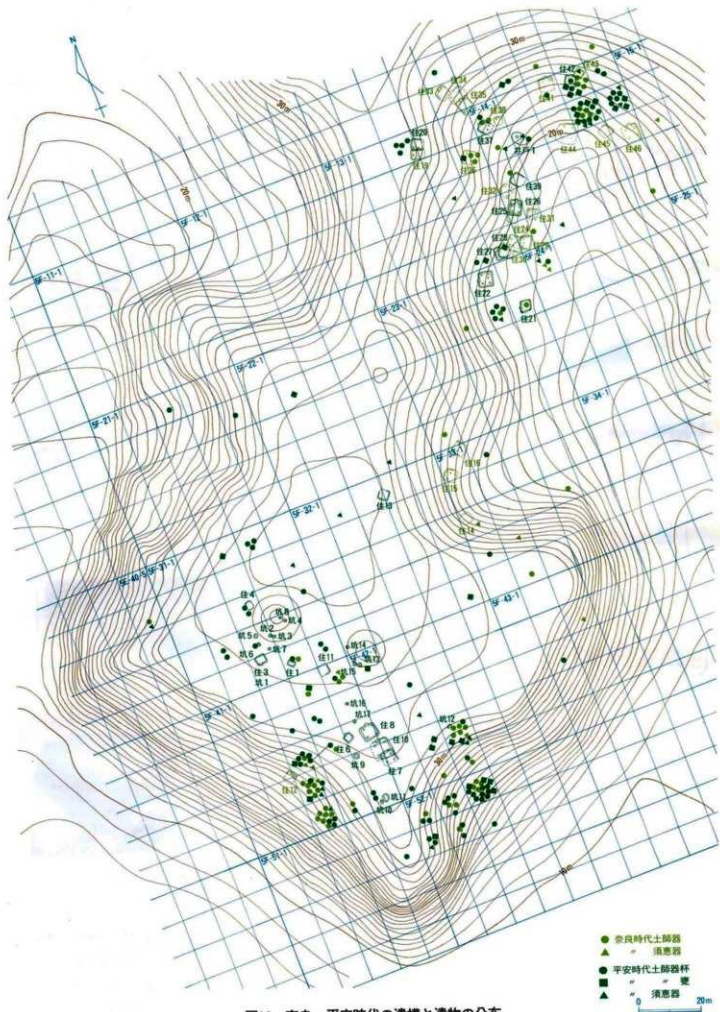


図11 奈良・平安時代の遺構と遺物の分布

に転用して使ったものであろう（豆との関係があるかもしれない）。炭化した木材は少ないが、覆土中には焼土が分布していた。このように1号住居跡は土器だけでなく、その他の道具や食料、衣料なども出土し、あたかもタイムカプセルのような状況を示していた。これは火災による突発的な不慮の事故により、家財道具その他すべてを持ち出す暇も無かったことを想像させる。それならば、その当時既に主食であった米もあっていいのではないか。この想像にも疑問の余地が残る

住居跡であるが、当時の生活の様子的一端を知る数少ない資料である。ちなみに1号住居跡は、平安時代前期の9世紀に属する。

奈良時代（8世紀）の住居跡を概観すると、まずその分布は斜面部から谷部に多い。また東隣の神山谷遺跡にも多く分布するところから、この時代は神山谷遺跡を中心に、城山遺跡との谷部まで広がってひとつの集落を形成していたと考える。住居の竪穴の大きさは一辺3～5mぐらいの方形が多く、ほとんどが対角線

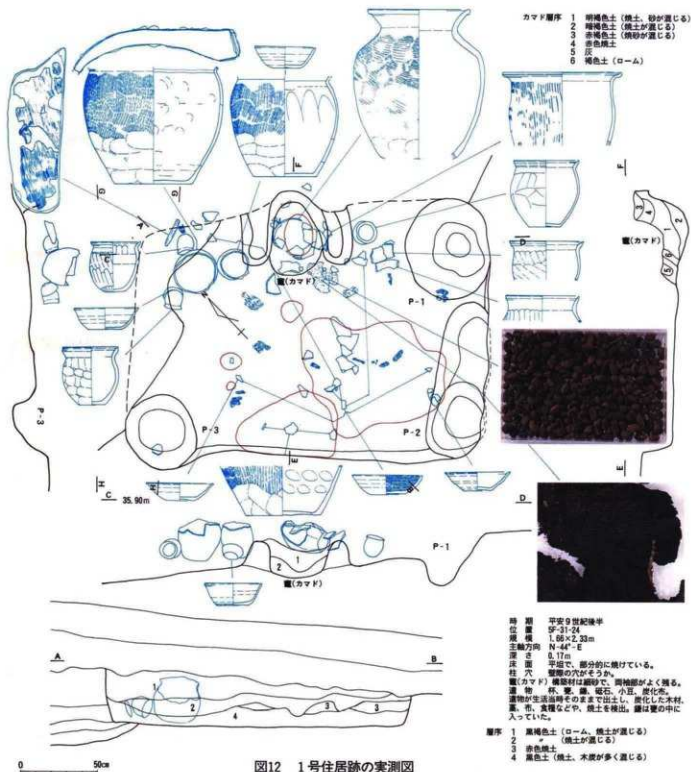


図12 1号住居跡の実測図

上に柱穴を4基有し、北側の壁中央部に竈を配置する。斜面部では特に住居跡の周りを平坦に掘削した形跡は認められない。住居跡内からの遺物の出土量は多くなく、中にはほとんど無い住居跡もある。千葉県内ではこの時代の遺跡・遺構は決して多くなく、ましてここ篠本で一つの集落が発見できたことは、今後の奈良時代集落研究にとって、大きな成果である。特にこの集落は、台地上だけでなく斜面部から谷部に住居跡が分布し、集落形態の再検討を余儀なくさせた。

平安時代前期（9世紀）は、台地上の中央部から南西部と谷部との、二つのグループに分けられる。台地上のグループは7軒あり、後に述べる墓坑と考える遺構の分布と重なる。この中で1号住居跡の西側にある3号住居跡は、大型方形坑の上に建てられ、竈を南側に配置し、普通の住居跡ではないと察せられる。南部の7・8・10号の3軒の住居跡は他よりも一回り大きく、床面・竈・柱穴とも遜色ない状態・規模であるが、遺物が少なく、普通の生活家屋であったか疑問が残る。その3軒の西側にある小規模な6号住居跡からは、銅製帯金具（鉞尾）が出土している。このようにこのグループの住居跡は、それ自体に普通の集落にあるものと性格上異なる所が見られ、それがこれら住居跡の周辺に分布する墓坑と思われる遺構と、何らかの関係があるものと考えられる。古墳時代の項でも述べたように、古墳時代以降、城山が墓域として使われ、平安時代にもそれが引き継がれたとすれば、平安時代の住居跡も埋葬のための作業小屋か、あるいは墓守りの小屋であったのかもしれない。

谷部のグループは奈良時代から続く、神山谷遺跡を中心とする集落のつながりと考えられる。神山谷遺跡ではこの時期の住居跡が100軒を越えると見られ、比較的大きな集落を形成していたと見られる。それぞれに特徴的な所は見られず、出土遺物も少ない。しかし、奈良時代同様、谷頭部の斜面部に集落を形成する在り方に、新たな視点を据えなければならないだろう。

平安時代中頃（10世紀）になると城山遺跡では住居跡が2軒と少なくなり、谷部では見られなくなる。神山谷遺跡の方でも数は減少し、集落が急速に縮小に向かって行っただけ。ただ神山谷遺跡の谷部では平安時代後期（11世紀）にまで下ると考える住居跡があり、その後、細々と人々がここに住んでいたことが考えられる。

2) 井戸跡

人々の生活にとって必要なものの一つに水がある。水は飲料水として、また食べ物や手、体を洗ったり、人々が生活する上でなくてはならないものであり、その安定的な確保が生活拠点の選択に重要な要素である。



写真48 1号住居跡の竈付近



写真49 41号住居跡



写真50 25・26号住居跡



写真51 3号住居跡

篠本には今日も造り酒屋があり、水質が良好であるとのことを示す。また遺跡の周りの台地裾部には、各所に湧水が見られ、古代においてはそうした湧水を生活用水として使用したことが想像される。神山谷遺跡の南側にあった2箇所の湧水地点を調査したが、特に古代に使用した痕跡は認められなかった。しかし、発掘によって城山遺跡の谷頭部で、掘鉢を楕円形にしたような形の井戸跡を検出した。井戸跡の底からは土師器甕や火鑽白などが出土し、雨乞いか何らかの水場祭祀を行ったのではないかと考えられる。同じような水準の斜面からは中世の井戸跡（水場）を何基も検出していて、それらに先行して平安時代に井戸が掘られていたことは、この時代の井戸跡の検出例が少ないことを考慮すると、貴重な資料である。発掘後は湧水が少なかったが、覆土は全体に還元状態で埋没時には水量があったと推定する。

3) 土坑

平安時代の土坑の中で、人骨が全く残っていないが、その半数以上から副葬品と考える遺物が出土し、円形で浅いものを、墓坑として扱った。墓坑の分布は台地中央部の2基の古墳内と、南部に散在し、特に一定区画に集中することはなかった。しかし、古墳の中に墓坑があったことは、古墳時代から続く墓域としての考え方が、平安時代人にもあったと考えられる。1号墳の中から検出した2基の墓坑は、長方形で馬を埋葬していた。そのほか円形墓坑の6基からは、土師器の杯や皿が出土した。これらの遺物から、墓坑のほとんどは平安時代前期（9世紀）から中頃（10世紀）初めに、埋葬されたものと推定する。2号墳南部の2基には軟質シルト岩扁平礫が出土し、これは礫が柱の根石と見ると掘立柱建物（ぼったてばしらたてもの）の柱穴の可能性も考えられるが、同様な遺構は周辺でほかには検出しなかった。ちなみにこの2基の間隔は5mである。3号住居跡の下から検出した1号平安坑は、長方形で深い土坑で他の墓坑とは大きく異なる。中央部覆土中から、土師器杯・皿、須恵器長頸瓶が出土し、この土坑を埋めて南側に甍を配す3号住居跡を造るなど、何か普通でない遺構であると考えられる。

(2) 遺物について

1) 土師器・須恵器

城山遺跡では、奈良・平安時代の土師器・須恵器が、遺構の数に対して多数出土した。住居跡からの出土数も1号住居跡を除いて決して多くない。図11を見て分かるように、遺構外からの出土地点は斜面部が多く、



写真52 1号井戸跡



写真53 11号平安坑



写真54 3号平安坑

その多くは捨てられたものと考えられる。東隣の神山谷遺跡の斜面部でも土器を捨てた場所が見つかり、この時代の物の廃棄を考えるうえで、おもしろい例となろう。台地上では、中世遺構特に堀・土坑や、斜面部の整地盛土の中から出土した遺物が多く、中世においてかなり奈良・平安時代の遺構が壊されたことも考えられる。また、斜面部の25・41号住居跡などは、覆土上部から出土した遺物が多く、これらはその当時に破損したものを廃棄した跡と思われ、本来的に住居跡に属するものは少ない。

土師器の中でも杯・皿類は小形であるため遺存度が良く、なかには完形に近い状態で中世遺構から出土し

たりして、多くのものを実測することができ、遺構出土で125点、遺構外からの出土では150点を図示した。遺構外からの出土分布を見ると、台地南部の斜面部で、中世の整地盛土の中からの多い。このことから中世に、多くの奈良・平安時代の遺構が壊されたことが推測できるが、それがどのような遺構であったかは不明である。

これら多数出土した奈良・平安時代の土師器杯類を見ると、形態の変遷を捉えることができる。奈良時代前半の杯は古墳時代の杯の伝統を残して、手捏ね成形して作るため、底が丸く、底から体部（横の部分）はヘラで削った跡が見られる。また内面はヘラで入念に磨いている。この時期の杯には「赤弥田寺（阿弥陀寺あみだてら）」、「井□」「○」と墨書したものがあり、下総でも最も古い資料になり、はじめの「赤弥田寺」は寺名を記したものとして注目される。奈良時代の後半になると、杯類はロクロを使って成形するようになり、体部はロクロの跡のすじが見られ、底は糸で切り離した後ヘラ削り調整し、平らになる変化が見られる。このような変化の一方で手捏ね成形の杯も、底が平らになりながら作られている。平安時代になるとほとんどロクロ成形の杯になるが、体部の傾きがより開き、底が小さくなっていく。さらに半ばくらいになると、内面を入念に磨いて黒くした杯が現れる。そして底はヘラ削りをやめさらに小さくなり、体部の下半部が丸みを有してくる。このような杯が平安時代半ばから後半に移る頃のものとして推定し、これが中世のカワラケへと受け継がれて行ったと考えられる。

杯は大きさや形に大きな差が見られない。特に奈良時代から平安時代前期の杯は、形が畿内で出土したものとほとんど変わらない。それに対して、平安時代の中頃になると、324や355のような本遺跡独特な形のものが見られ、地域色が強くなって行ったものと考えられる。

このように土師器の杯類は、今日で言えばご飯を盛るお茶碗で、最も身近に普段使われる食器であった。そのため消耗も激しく、多量に生産され、消費されて行ったと考える。そのために遺跡からは最も多く出土するのであるが、城山遺跡は住居跡の数に比較して出土数が多いことは、また生活食器のほかの用途もあったことであろう。

それに対して須恵器の杯・皿類は少なく、蓋・碗・盤を含めて15点を図示したのみである。須恵器杯類は胎土観察から、上総、武蔵、常陸あるいは東海などで生産されたものであるとの指摘があり、遺跡周辺で生産されたものはほとんど含まれていない。

土師器の甕の多くは杯よりも大きく、なかなか原形で出土することは少ない。それでも本遺跡では1号住

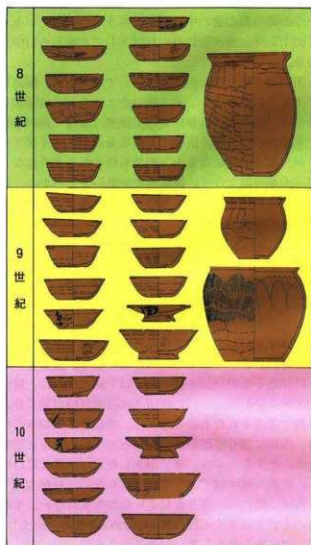


図13 奈良・平安時代の土器変遷

居跡からは小形の甕が、12号住居跡竈からはつぶれていたが甕が使用状態のまま、合わせて5点出土したが、全体の中でかなり少ない数である。甕の形は奈良時代から平安時代にかけて変化が少なく、本遺跡から出土したもののほとんどは口縁部に段をもち、胴部は丸くヘラ削り調整して、下総で多く見られる形態である。12号住居跡から出土した副長の甕は、奈良時代の武蔵のもの影を受けたものと考えられる。ここで触れたように奈良・平安時代の土師器の甕は地域色が強く、関東では下総、武蔵、相模、常陸とそれぞれ特徴的な甕が作られ、それが隣接地域にも影響を与えて分布を広げたりしている。30号住居跡から出土した甕は、口縁部に段がなく、胎土が軟らかい感じで、他のものと異質である。この住居跡からはほかに凹石と砥石が出土していて、住居跡としても他と異なる。

土師器の甕は須恵器の甕と共に、竈にかけて土鍋やお釜（今日では炊飯器）として使われたり、お米やお豆などの食べ物を入れておく容器として使われたりした

と考えられている。しかし本遺跡の1号住居跡からは、一つの須恵器の甕の中に鎌が、もう一つには杯が入って出土した。食べ物以外の容器としておもしろい例である。

須恵器の甕は回転台（ロクロ）で成形され、胴部はタタキ目調整を施し、窯で焼いたところが、土師器と異なる。奈良時代は東海地方の諸窯（猿投・湖西等）で生産された、硬く灰色で良質なものが入って来ていたが、平安時代になると下総でも作られるようになるが、土が良質でなく、焼成温度が低いところから、土師器のように赤褐色であったり、燻べ焼きして黒色で脆いものが多くなる。また甕（こしき）と言う底が抜けた蒸し器も同様に作られる。これら下総で作られた（在地生産）須恵器の甕・甕は、胴部には一様にタタキ目調整痕が見られ、形は土師器のそれと似ていても、区別することができる。燻べ焼き須恵器は、中世になると瓦質土器へと変化し、近世から近年まで火消し壺や火鉢などに形を変えて作られることになる。

1号住居跡から出土した須恵器の甕で、縦目のタタキ目のあるもの（15・16・18）は下総で作られ、横目のタタキ目のもの（17）は胎土に花崗岩粉が混じり、常陸で生産されたものと考えられる。また下半分のみの甕は、内面に摺り痕があり、摺鉢として使われたと思われる。とすると本住居跡で出土した豆（小豆と思われる）を摺り潰す器であったかもしれない。豆が大豆であれば、既に味噌作りをしていたかもしれない。本遺跡の中世では多くの捏ね鉢（片口鉢）や摺鉢が出土し、盛んに味噌作りをしていたようである。

須恵器ではほかに長頸瓶と呼ばれる器が多く出土した。須恵器の長頸瓶は古墳時代後期から前述東海諸窯で焼かれるようになり、下総にも大量に流入し、その多くは古墳や横穴墓から出土する。奈良時代になると高台付きの長頸瓶に形が集約され、住居跡から出土するようになり、古墳時代の埋葬用から一般生活用に変容して普及したと考えられる。この長頸瓶は平安時代にも形に変化が少なく、中頃まで生産されて供給され、下総の在地ではほとんど作られることはなかった。長頸瓶の良質な胎土と、ロクロ成形された技術力はなかなか真似ができなかったことと、その用途が酒等の水物を入れる容器として、水が漏れない締まりが必要であったためであろう。長頸瓶を生産した東海諸窯は、平安時代後期になると古瀬戸・常滑などの中世諸窯へと変化して陶器を生産して行くが、その時代の陶器は下総ではほとんど出土せず、解明できない時代へと行って行く。

2) 墨書土器・硯

奈良・平安時代には、杯類に墨で字を書いた墨書土

器がある。本遺跡では59点出土し、遺構数から比較して多い点数である。特に墓坑からは5点の杯・皿に墨書があり、墨書土器の多さは埋葬と関係があるようである。墨書で判読できるものは、先述の奈良時代のもののほかに、「内」「兄」「又」「田」「従」「集」「万」「置」「天」「土」「粟」などのほか、記号的な「○」が7点あり、ほとんど一字が多い。墨書に関連して硯に使ったと思われるものに、内面が摩耗した須恵器の破片がある。須恵器は硬く緻密な甕が多く、ほかに長頸瓶・盤などが使われている。井戸跡からは転用硯と思われるものが3点出土し、そのほか11点ある。



写真55 1号住居跡出土の遺物



写真56 奈良・平安時代の須恵器



写真57 奈良・平安時代の墨書土器

3) 金属製品

金属製品では鉄製と銅製がある。鉄製品では鎌・刀子・釘・鋤先などがある。銅製品では帯金具の鉞尾が6号住居跡から出土した。

4) 土製品

土製品では、漁労に使う漁網につけたと思われる、有孔土玉が12点出土した。また紡錘車が3点あるが、このうち2点は奈良・平安時代より古いことも考えられる。

5) 石製品

石製品は砥石が多く、住居跡などから凝灰岩製が4点、砂岩製が4点、雲母片岩製が1点あり、これらのうち2点を除いて角柱状である。また凹石が8点、敲石が2点ある。奈良・平安時代の凹石は、千葉県内では千葉市大道遺跡025住・045住、同市大森第1遺跡004住、柏市花前I遺跡040住などで類例が見られるが、それぞれ1点ずつの出土で、花前I遺跡のは鉄分が付着して鉄床とされていた。また畿内のある遺跡でも同様な凹石が、丹あるいはベンガラ工房跡から出土したとの報を目にしたが、再確認できなかった。本遺跡では凹石が30号住居跡、井戸跡から3点出土し、奈良・平安時代の所産と確信し、他の5点と砥石併用のものとも窪みの形態から共通性が認められ、計9点の出土例は下総ではほかに見られない。なお議論の余地が残る資料である。

6) 木製品

奈良・平安時代の唯一の井戸跡から、土器や他の木材とともに、火付けに使う火鑽白(ひきりうす)が出土した。

(3) まとめ

以上、奈良・平安時代の城山遺跡は、遺構が多くないにもかかわらず、多くのそしてさまざまな遺物が出土した。これは遺跡の性格を示す一つの在り方であり、またそれが本遺跡だけでは語れないことは東隣にある神山谷遺跡を見ると明らかである。さらに同時代の遺跡の範囲は台地上から斜面部、谷部まで及び、その連続性は隣の神山谷遺跡に及び、むしろ同遺跡がこの時代の中心であったことが明らかになった。そのために神山谷遺跡の成果をまともない限り、奈良・平安時代の様本は見えて来ないが、その一端としての城山の位置、性格を捉えることができた。遺構の項でも述べたが、城山遺跡は墓坑と思われる遺構と、またそこから出土した墨書土器とに代表されるように、古墳時代以来墓域としてある意味で神聖な場とされて来たので



写真58 奈良・平安時代のその他遺物



写真59 奈良・平安時代の凹石

はないか。そして平安時代の中頃から鎌倉時代まで途絶えてしまうが、城山の西側斜面には鎌倉時代になるとまた墓地として使われている。この200年の時を越えてもなお、城山が神聖な場としての意識が残っていたとすれば、その鎌倉時代の人々は平安時代から近くに住み続けた人々であったかも知れない。平安時代の中頃から鎌倉時代まで途絶える事は、須恵器の項で述べたように、この時期の遺物がなくなるかあるいはわからないかで、全国的に同じような傾向を示す。歴史は関東では平将門の乱を始めとして、数々の戦乱が起こり、奈良時代以来の律令体制が崩壊し、中央では保元・平治の乱を経て、武士が権力を奪い、源頼朝が鎌倉幕府を樹立するまでの激動の時期であった。それでも、民衆はたくましく生活していたはずであり、それが中世発展の胎動になったであろう。

<参考文献>

笹生 衛 (1989) 房総における中世の土器様相の成立過程 - 房総における古代末期から中世初期の土器様相 - 史館第21号 史館同人

千葉県史料研究財団 (1996) 千葉県の歴史 資料編 古代 千葉県

千葉県史料研究財団 (1998) 千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代) 千葉県

4. 鎌倉・室町時代（中世）

中世鎌倉時代になると人々が城山に戻り始め、徐々に村落を広げ、室町時代中期に最盛期を迎える。そして平安時代では東隣の神山谷遺跡が村落の中心であったのに対し、中世は城山が村落の中心になっている。始めは西側斜面の墓地が作られ、また東側斜面から神山谷遺跡との間の谷部や台地中央部に屋敷が構えられた。そして台地中央部を核にして、人々が集住していき、また堀も次々に掘られて行って、城山全体が城として大きく作り替えられ、室町時代中期の15世紀には城が完成したと思われる。このように城山は中世村落城郭を中心とする遺跡で、その範囲は城山に止まらず、東隣の神山谷遺跡、西隣の新台遺跡・夏台遺跡、南の八石田遺跡などにも及び、これら全ての成果をまとめると、中世の地域村落社会が明らかになってくると考える。

（1）遺構について

中世の遺構は、巨視的には1個の城が一つの遺構と見ることできるし、徹視的には1個の土坑も一つの

遺構であり、また建物跡になってはどの範囲が一つの屋敷（居館）かわかりにくく、図示するにも述べるにも大変難しい作業であった。また中世遺構は平坦な所にあるだけでなく、斜面部や掘削して立体的になっているところが多く、従来の平面図と断面図だけでは、遺構の性格を充分表現することができない。そこで平面図と断面図を組み合わせ合成して表した図が、各区画の鳥瞰図（ちょうかんず）である。これは1m毎の断面図を連続的に半分に間隔を詰めて並べ、これに平面図の遺構の線と等高線を重ねたもので、45°斜め上から眺めたように見える。しかし、この図は横方向の距離が後方でも同じため、遠近感がない所から本来の鳥瞰図とは異なる。各区画あるいは堀などそれぞれ、最もいい方向から見た状態の鳥瞰図を作図した。

1) 堀

城山遺跡の堀は、調査前には全く存在がわからず、発掘によって縦横に掘り巡らされた多くの堀の存在が明らかになった。それらは台地上の防御障害のための堀（1類）、区画を仕切るもの（2類）、排水のためのもの（3類）の、その目的によって3つに分類でき、合計で24条を数える。3分類の堀はそれぞれ幅、深さから、断面形態が大きく異なる。

1類の堀には、その中の障壁となる堀底の仕切りや、



写真60 城山遺跡（上空から）

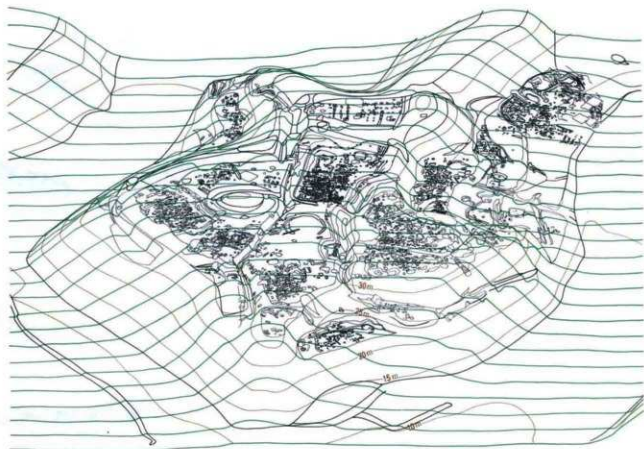


図15 城山遺跡の鳥瞰図



写真61 城山遺跡（南側上空から）

橋をかけた所のくびれ、給水のための井戸、地下式坑、墓坑、粘土採掘坑などがあり、さらに堀底道になっていたところもあり、主目的以外にも多様に使われたことがわかった。その中でも途中で埋められた所や、掘り直しされたところもある。この堀の平面の形態では、1・4・6号堀のように直線的なものと、3・5・12号堀のように蛇行する曲線的なものがある。断面形態では12号堀のようにV字に深く掘られた葉研堀（やげんぼり 葉研は漢方薬を磨り潰す道具で、その臼の形に似ているところから言う）と、逆台形になって底が広い箱葉研堀（はこやげんぼり）とに分けられる。堀の最も深いところでは12号堀の4.5m、浅いところでは15号堀の0.5m、幅の広い所は1号堀の10m、狭いところでは15号堀の1mで、堀によって規模の差が大きい。

1号堀は台地の北部にあって、北からの尾根と城山とを分断するために掘られたいわゆる堀切で、これによって城内と外とを分けている。1号堀の東西両端には堀底仕切が設けられている。

2号堀は1号堀の角から2号区画の斜面部に延びるものである。1・2号堀は底が広い箱葉研堀である。

3号堀と4号堀は1号区画と3号区画の間に、東西に平行してあるが、3号堀は途中で埋められ、その代わりに4号堀が掘られたと推定する。

5号堀は1号堀から続いて、台地の西側を廻るもので、4号区画の北東部で直角に曲がると、西側斜面の変換点を蛇行しながら西先端に向かい、南西の腰曲輪（こしくるわ）に出る。この堀から台地上に這い上がることはほとんど不可能なほど、堀斜面は急で深い。

6号堀は3号区画と4号区画の間から発して、7号区画の西側まで延びる最も長いものである。途中2カ所での字に曲がり、そのうちの北側の屈曲部には五角形の掘り込みがあり、障害か水場としたらしい（雨が降ると水がしばらくたまる）。また6号区画と7号区画の間の北部にはくびれがあり、その部分は仕切のように浅くし、東側には4本柱建物跡の大きい柱穴がある。このような位置関係から、堀のくびれ部に橋を架け、建物跡は柱穴の大きさから屋根の高い檜門（やぐらもん）のような建物があったと想像する。しかし必ずしも城の入り口でない所に、このような檜門があったとは、理解を越えるものである。

12号堀は3・7号区画と9号区画との間に、緩く蛇行しながら南北に掘られ、両端は台地斜面に抜け、9号区画を完全に区切っている。途中には大きな仕切があり、他の仕切と異なって角がなく丸みをもつ。この仕切の北側の堀両側には、粘土層の露頭にいくつもの掘り込みがあり、おそらく粘土を採掘した坑であると考えられる。また南側には一段と深く掘った部分があり、



写真62 1号堀 (東側から)



写真63 1号堀から4・5号堀



写真64 6号堀覆土断面11 (5F-31-24付近)



写真65 12号堀 (北側から)

その中央には円形の井戸穴と思われる坑がある。しかし、上から計6m近くの深さがあるが砂層であったため、水は湧かず、雨水も溜まらなかった。

14号堀は9号区画の中央から途中で曲がって、10号区画へ抜けるものである。この堀の東西条部は途中で埋められ、屈曲部から北行部は10号区画へ降りて行く道として使われたことが、覆土を見るとわかる。また堀の出口には1対の柱穴があり、ここに木戸門があったことを推定させる。

15号堀は9号区画の南側直下であり、検出した堀の中では最も小さいものである。この堀をまたいで41号建物跡があり、これを建てる時に掘削整地したと考えられ、15号堀は本来はもっと深かったと推定する。

16号堀は9号区画東側斜面の途中に15号堀より続いて廻る。東側斜面は自然でも急であったと思われるが、この堀を造ることによって、さらに急崖になっている。途中2か所に古い堀の跡があり、これによって掘り直しが行われて、さらに深くしたことがわかる。またそのときに堀底仕切を6箇所設けている。

17号堀は10号区画の南部、9号区画北側直下にある。2条が平行して堀があるが、覆土断面観察では数度の掘り直しが確認できる。頻繁な斜面崩落があったことが推測される。

以上、1類の堀を概観したが、これによって堀の形態に進化の跡が見られる事がわかった。初期の堀は蛇行する曲線的で、仕切はほとんど無いか丸みがある。中期では直線的で、屈曲が明確になる。後期になると仕切が明確になり、多く設置するようになる。東隣の神山谷遺跡では、連続的に仕切を設けた堀がある。このように堀の発展過程を捉えることができたということは、篠本城が計画的に造られた城ではなく、徐々に拡大発展して完成された城であることがわかってきた。また1類堀の中からは、多くの遺物が出土した。多くは陶磁器、石塔などで、覆土中位から出たものが多い。一部では貝殻も出土して、堀がゴミ捨て場として利用された事も考えられるが、覆土中位から出土した遺物は、堀が埋められるときに投棄したものと考える。

2類の堀は区画を区切るもので、1類よりも規模が小さくなる。堀の中には2類が1類へと変化したと考えられる所もある。

7号堀は6号堀から枝分かれし、4号区画の南側、1号墳の北側を回り込むようにある。この堀を掘った時に1号墳の北側を削り取っているが、この山の利用を考慮して堀の位置を決めたと思われる。

8号堀は4号区画の中央にあり、この区画を東西2つに分けている。

9号堀は5号区画の中央より少し西寄りにあるが、途中で埋められたと考える。



写真66 14号堀 (5 F-33-22付近)



写真67 16号堀 (東側上空から)



写真68 12号堀の遺物出土状態 (5 F-42-12付近)



写真69 7号堀 (東側から)

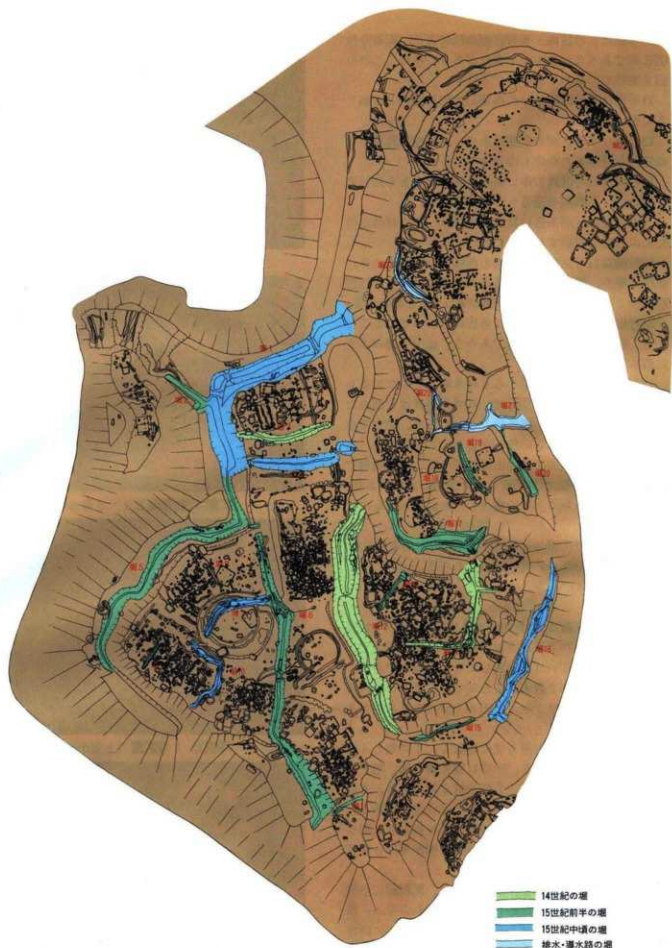


図16 城山遺跡の堀

10号堀は5号区画と6号区画の間にあり、両者を仕切る堀であろう。途中にくびれがあり、多分ここにも橋を架けていたのではないだろうか。

11号堀は7号区画とその南側の外郭見張台とを隔てるものである。

13号堀は9号区画の北部にあり、50号建物跡を南側の部分と分けるためのものであろう。

18号堀は11号区画の中にあり、20号堀とともに区画を分けて、小区画を造るものである。

3類の堀は区画あるいは建物の排水、または導水のためのもので、いずれも細く浅い。

18号堀は11号区画A小区画の西側（山側）にある。弧状に廻り、掘り直しが認められ、これによって柱穴が明確でないA小区画に建物跡があったことがわかる。

21号堀は5号水場に接して谷底に向かっていことから、排水路としてのものであろう。途中で滝のように落ちる。

22号堀は7・9号水場から6号水場までつながるもので、7・9号水場は井戸で、6号水場は水を溜めた洗い場と推定すると、導水路であったろう。途中に水の流量を調節するらしい仕切がある。

23号堀は13号区画の西の山側を巡って、南北両端で谷側に向いている。13号区画には4箇所の水場があり、地下水位が浅いため、その排水のために掘ったものであろう。

24号堀は14号区画69号建物跡の東山側にあるもので、建物の水はけのために掘ったのであろう。

2) 中世区画

一つの中世区画は、鎌倉時代から室町時代にかけて、堀で仕切られたり平坦に整地された空間の一単位で、1戸の屋敷地あるいは墓域として考えるものである。城山では14の区画を数えることができ、またこの区画によっては、さらに2～3に細かく分けられる所もある。

1号区画は台地上の最も北に位置し、1号堀と4号堀とに挟まれた所である。中には建物跡6棟、地下式坑3基、粘土土坑6基、方形土坑4基があり、また東側には一段と高くなった所に、1号見張台がある。北側の1号堀との間の段は、同堀を埋めるときに削り取られたものと考え、尾根部との間に橋が架けられていたか不明である。

2号区画は台地北西部の斜面にあり、尾根筋の階段状部A～D小区画と沢筋のE・F小区画からなる。B小区画には火葬墓が2基あり、2号堀からそこに向けて墓道がある。またE小区画には2基の火葬坑、12基の墓坑、2基の方形整穴、1棟の建物跡がある。このE小区画中央部には土壘状の土盛があり、石塔がま



写真70 18・19号堀（南側から）



写真71 22号堀と7・8号水場



写真72 1号区画（上空から）



写真73 2号区画（北側から）

まって出土した。この土盛下の墓坑ほかの遺構から出土した陶磁器は13世紀のものが多く、初期段階の墓域であったと思われる。

3号区画は台地上のほぼ中央部にあり、北に4号堀、東は12号堀、西は6号堀に3方を囲まれる。また北と西は地山が高く残っていて、ここに土塁があった可能性がある。同区画内からは多数の柱穴を検出し、建物が何度も建て直しが行われたことが推測され、確認できた建物跡だけでも7棟あり、さらに分析すると棟数が増えると考えられる。建物跡群の北部では掘り窪めた部分があり、半地下室をもった建物があったかもしれない。そのほかの遺構は地下式坑5基、粘土貼土坑3基、方形土坑12基、墓坑3基、焼跡（竈・囲炉裏跡か）1基、焼土・灰廃棄坑1基などがある。出土遺物は陶磁器のほか、斧（こうがい）・銭貨、火打石などがある。建物跡の規模、建て替え回数の多さから、この区画が本城跡の中心部であった可能性が高い。

4号区画は3号区画の6号堀を挟んだ西側にあり、北側を5号堀、南側を7号堀に囲まれる。また中央部に8号堀があって、同区画を2分する。その東側区画には規模の小さい建物跡があり、西側区画には規模の大きい建物跡がある。ほかに地下式坑3基、粘土貼土坑3基、墓坑3基、馬埋葬坑1基、埋納坑1基、焼跡1基などがある。本区画の5号堀を挟んだ北側には、2号見張台がある。

5号区画は台地上西端部にあり、北西側を5号堀、東南側を10号堀に囲まれる。また4号区画との間は段があり、そこには柵（垣）の跡らしい柱穴が並ぶ。区画内には9号堀があるが、特に区画を分けたものではなく、その境を定めたものであろうか。南西側直下には腰曲輪状の区画が造られているが、遺構はないが銭貨が12枚ままとまって出土した。5号堀を挟んで西側先端には3号見張台が設置され、ここには区画先端から降りて橋をかけてわたる階段がある。建物跡は3棟確認し、ほかに地下式坑3基、粘土貼土坑3基、焼跡2基あり、5号堀の外側に馬埋葬坑1基がある。

6号区画は台地上南西縁にあり、西側を10号堀、東側を6号堀に挟まれる。ゆるい斜面を平坦に整地し、北側に段を有する。また、南側斜面直下には小規模な区画が造られ、建物跡、地下式坑、鍛冶炉らしい坑などがある。建物跡は4棟、地下式坑6基、粘土貼土坑1基、方形土坑2基、焼跡2基、鍛冶炉1基がある。区画南部からは炭化米が散乱して出土した。

7号区画は台地上最も南に位置し、西側を6号堀、東側を12号堀に挟まれる。北側は2号墳があって、そのすぐ南には、6号堀に付くように櫓門らしい29号建物跡があり、12号堀の縁には掘り窪めて建てた30号建物跡がある。これらの南に本区画の中心遺構群があっ



写真74 3号区画（上空から）



写真75 4号区画（上空から）



写真76 5号区画（上空から）

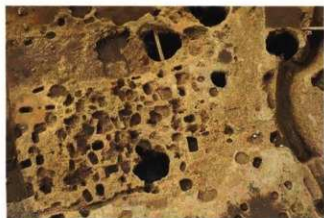


写真77 6号区画 (上空から)

て、建物跡3棟、地下式坑6基、方形土坑3基、埋納坑1基、馬埋葬坑1基、焼跡2基などがある。この区画中心部の南側、11号堀で仕切られた先端部は4号見張台として使われた外郭部で、その先端直下は急崖になっている。この見張台には小柄が出土した方形土坑がある。

8号区画は南東部斜面の沢部を整理した区画で、何度かの土砂崩れと復旧が行われていることが、調査でわかった。その中で最上部(上層)と最下部(下層)の生活面が明らかになり、図に示した。両生活面とも2棟の中規模建物跡と井戸があり、その構成はあまり変化していない。土砂崩れは下層井戸(3号水場)の埋没状況が、ローム層によって一気に堆積していることから推定できた。その同じ土砂は36号建物跡にまで分布する。35号建物跡は小規模で、山側に弧を描く溝があり、床面上に木炭粉と鉄釘が分布する。火事で焼けた小屋であったのであろうか。25号墓坑は最も遺存の良い人骨が出土した。

9号区画は12号堀が西側を、そのほか3方を斜面とその下の堀とで囲まれた区画で、城山遺跡の区画中、最も広い面積を有する。この中には中小の13・14号堀があり、さらに区画を区切っているが、14号堀は途中で埋められている。区画内には9棟の建物跡が確認でき、それ以外にも建物跡があるものとする。南側斜面下に外郭部があり、ここにも建物跡を検出した。また、北側外郭は東側谷に張り出し、見張台としての機能が考えられるが、ここにも建物跡のほか地下式坑もあり、先端は段差があつて小屋らしきものの遺構が確認できた。9号区画には外郭部も含めて地下式坑が21基あり、各区画の中で最も数が多く、区画と地下式坑との用途おいての関係が考えられる。

10号区画は3号区画の東側斜面下を、掘削整地して作った所で、標高25~26mの上岩橋層から清川層に替わる、褐鉄鉱が析出した硬い面を利用して整地面としている。中央部に大きい53号建物跡があり、その南側の小さい52号建物跡は1期古いものとする。南部の



写真78 7号区画 (南側上空から)



写真79 8号区画上層 (南側から)



写真80 8号区画下層 (南側から)



写真81 9号区画 (上空から)

17号堀は9号区画との連絡道としても使われたであろう。53号建物跡の北側には井戸（4号水場）があり、これは発掘後にも水が湧き、当時もよく使われたであろう。ここからは多数の石塔が出土した。

11号区画は10号区画の東側斜面下の、緩い斜面を少し階段状に整地した所で、南側は台地斜面に、東側は谷に落ち、北側は21号堀で画される。中に等高線に沿うように18～20号堀があり、3分割され、それぞれに建物跡が認められるが、あまり柱穴が明確でないため、どのような規模の建物跡があったかよくわからない。

12号区画は21号堀を挟んだ11号区画の北側にあり、地下水位が浅いところから水場が中心となった所である。また北側斜面には掘削整地した小さな区画（B小区画）と、最下面のC小区画には地下式坑群がある。水場には水を汲み出す井戸（7・9・12号水場）と、水を溜めて洗い場としたと思われる所（5・6・8・10号水場）、また水場祭祀をしたのではないと思われる所（11号水場）などがあり、篠本城の水を取り扱う中心であったかも知れない。

13号区画は12号区画の北側にあり、城山北側尾根部の東側斜面下を掘削整地して造り出した所である。こも地下水位が浅く、山側に浅い横井戸が3基掘られ、それに付随して導水路や洗い場が設けられている。建物跡は分散して7棟が認められ、そのほかにもあったものと考え。谷に近いところには28号墓坑があり、これは人骨の周りを陶磁器片で囲っている。人骨は状態がよくなく、土葬か火葬かはよくわからないが、土葬した後には白骨を再葬したことも考えられる。

14号区画は谷頭部を挟んで13号区画の対面にあり、神山谷遺跡の付け根の真下斜面を整地したところである。こも地下水位が浅く、区画南部に横井戸、斜面下に播鉢状の井戸がある。建物跡は中央部に建て替えをしていると考える中規模な2棟と、その南側に小規模な1棟とが確認できた。

以上、中世の区画をそれぞれ簡単に概観したが、これによって基本的に母屋となる建物跡と地下式坑、方形土坑、粘土貼土坑などが組み合わさって、個々の区画が構成されていることが理解していただけたと思う。しかし、中世区画は必ずしも一様ではなく、建物跡の規模、そのほかの坑類の数、種類などが異なり、それぞれにその場所、位置関係に応じた特色ある性格を有している。それは個々の区画がそれぞれ完全に独立しているのではなく、長（城主、村長等）を中心とした武士团组织に似た関係で成り立った、それぞれが有機的に結び付いた集合体であつたらうと考える。この集合体こそを篠本城跡と呼び、あるいは仮に中世篠本村と呼ぶことができるのではないだろうか。



写真82 10号区画（北側から）



写真83 12号区画（北側から）



写真84 13号区画（上空から）



写真85 14号区画（上空から）

3) 建物跡

中世篠本城跡の建物跡は、まだ平安時代からの伝統を引き継いだ掘立柱建物で、地面に柱を立てる穴を掘り、そこに木の柱を入れて立てた構造である。そのために木の柱は腐るのが早く、頻繁に建て替えが行われたものと思われるが、地震には強かったかもしれない。そこで発掘すると、この柱穴が多数出て来て、場所によっては足の踏み場もないほどになってしまふ。中世の建物の柱穴の多くは、平面形が楕円形か長円形で、その並び筋に併せて長軸の方向を決めていて、その長軸方向を見ることによって柱の配置を推定することができる。柱穴の断面形は、筒形に掘っているものと、長軸方向が斜めになってVの字に掘っているものがある。またそこに柱の痕跡があるものと、見られないものがあるが、断面がVの字のものはほとんどその痕跡がない。このことから断面V字の柱穴は、柱の建て替えの際に、古い柱を抜き取るために掘ったとも考えられる。柱穴が多数重なって出て来ると、1棟の建物の柱の配置を検索することが難しくなり、建物がどのような構造であったかわからないことが多い。また、ほかの遺跡の例でも、1棟の建物の柱穴でも、その位置によって大きさや深さが異なることがある。建物跡の中には、地下式坑や粘土貼土坑、焼跡などがあり、同時期にあったとすればその遺構の用途とも考慮に入れて、建物の全体像を推定したい。特に焼跡は、電かいるりの跡の可能性もあり、そうすると焼跡の箇所は厨房（ちゅうぼう 台所）であったとも考えられる。また馬埋葬坑が出たところは、厩（うまや）があった所であろうか。

このようにして中世篠本城跡の平均的建物像を復元すると、4号区画の19号建物跡を例に取り上げて、2間×4間の主屋に、これに縁側が廻り、西側に厨房と厩がついたものとなろう。最も規模が大きいと考える3号区画の14号建物跡では、19号建物跡の2倍近い大きさである。中世の建物は現在まで残された絵図や、発掘によって出て来た遺構などから、ある程度は復元させていただきに明らかになりつつあるが、地域ごとで異なっていることも考えられ、また実際に篠本城跡のように、検出した遺構をもとに復元することはまだ難しい面があることが、改めて認めざるを得なかった。

4) 地下式坑

地下式坑と呼ぶ遺構は中世に特有の坑で、天井をもった室を地面を深く掘ったものである。最近では芋を冬季保存しておく芋穴室があって、それと似たようなものである。篠本城跡の地下式坑は本報告範囲の中だけで63基を数え、入り口の場所や形、天井の形態によっていくつかに分類できる。まず天井の在り方によ



写真86 19号建物跡（上空から）



図17 19号建物跡の復元



写真87 42号建物跡の柱穴



写真88 43号地下式坑（南側から）

で大きく3つに分け、Ⅰ類は天井を有する室とその横に入り口がつく形態、Ⅱ類は天井の真上に入り口がある形態で、Ⅲ類は室を露天掘りして天井を板で覆ったものである。さらにⅠ類は入り口と室の形態で5つに分けられ、Ⅰ-a類は入り口が竪坑になり室は単室のもの、Ⅰ-b類は竪坑の入り口に室が復室のもの、Ⅰ-c類は入り口が階段になっているもの、Ⅰ-d類は入り口が堀あるいは崖面にありほぼ水平に入れるもの、Ⅰ-e類はその他の形のものである。これらのほかに、途中で掘削をやめたものや、掘削途中で落盤したのではないと思われる坑もあり、実際に使われなかったものもあろう。これらの中でⅠ-a類がもっとも多く44基を数え、他の遺跡でも見られ、一般的な形態である。Ⅰ-b類は2基、Ⅰ-c類は20号の1基のみである。Ⅰ-d類は5基で、このうち9号は室が細長く異質である。Ⅰ-e類は3号区画に2基ある。Ⅱ類は3基あり、特に44号は調査に際し、入り口が確認できた。Ⅲ類は9号区画に2基あり、方形土坑の一部もこれに含まれるかもしれない。このほか途中で掘削をやめたものが4基ある。また56号のように室の奥に、さらに副室をもっているものもある。入り口の竪坑に足掛けがつけられていたり、室の出入口にも足掛けや段が設けられているものもある。

城山遺跡の地下式坑の多くは、落盤で埋没しているものが多いが、なかには14号のように天井が残っているものがある。また、入り口の竪坑は室が落盤する前に意識的に埋められたものがあれば、自然に埋没したものもある。地下式坑からの出土遺物は多くなく、五輪塔が計3点、常滑甕片、瀬戸平碗などである。また12号では、廃棄された貝殻が出土した。

このように地下式坑はⅠ-a類を主体として、室の面積は平均6㎡前後で、深さは2～3mが多い。このような遺構が何に使われたか様々な意見があり、未だに定まっていない。墓坑として使われたという説が有力であるが、城山遺跡では地下式坑から五輪塔は出土したが、人骨は出土せず、埋葬した跡も検出できず、墓坑としての確認できなかった。城山では9号区画に最も多く地下式坑が分布し、中心である3号区画では少ない。9号区画はまた建物跡が分散しており、他の建物跡と少し構造が異なる。私見としてはこの建物跡と地下式坑との在り方を見たとき、この9号区画が食料貯蔵庫群の場所であったと考える。そのように推定すると、中心でもないのに4方を堀を巡らした重要性が見えてくる。そして地下式坑の話に戻したとき、それは食料貯蔵庫のひとつであったと帰結する。おそらく、乾燥を必要とする穀物は高床の倉に入れ、温度管理が必要な漬物、発酵食物である味噌などは地下式坑に収蔵した、ということも考えられる。



写真89 30号地下式坑 (南側から)

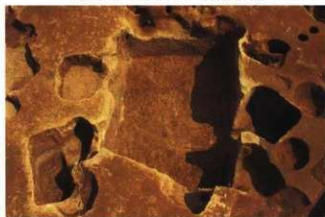


写真90 42号地下式坑 (北側から)

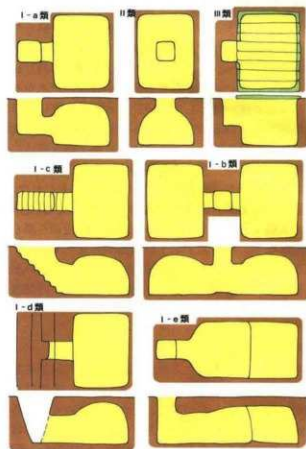


図18 城山遺跡の地下式坑の種類

5) 粘土貼土坑

中世の遺構でもう一つ特徴的なのが、この粘土貼土坑である。城山遺跡で検出した粘土貼土坑は、平面形が長方形で、断面が逆台形に掘り窪めた坑に、粘土を5~10cm程の厚さに貼り付けたものがほとんどで、形態上ではあまり変化がない。しかし中には、10号区画の24号のように、ほとんど平坦なものもある。大きさは1.0×1.6mから3×4mまで幅があるが、おおむね2m前後が平均である。ほとんどの区画に1~数基あるが、7号区画や斜面下の区画では見られず、特に水場がある所ではない。10号区画の22~25号は例外である。また1号区画1~4号のように同じところに重ねて設置しているところもあり、この土坑を設けるに当たって場所をある程度特定していたように思える。

この粘土貼土坑も地下式坑と同じように、その使用目的についてさまざまな論議がある。これも墓坑としての意見がある（近世では土葬に際して、棺を埋める周りに粘土を貼ったという）が、城山遺跡の例ではやはりこの土坑からの人骨の出土はなく、墓坑説は考えにくい。城山では前述したように、10号区画を除いて水場の近くにはないことから、逆説的に水との関連を考える。5・6号水場のように、水を溜めて洗い場としたらしい遺構は、水が漏れないようにすることは当然であり、この両坑は周りの地質が密なため漏水が少なくない。しかし、台地上では衆掘りの坑では直ぐに水が漏れてしまうところから、水場の坑に粘土を貼って漏水を防いだのではないと思う。そのように考えると、10号区画の23~24号のあるところは砂地で水捌けがよく、直ぐ近くに井戸があり、井戸から汲んだ水をそこに溜めるか洗い場として使い、排水は直ぐ下に21号堀の先端が来ているので、そこへ流したと言うような作業の流れが見えてくる。このように粘土貼土坑は、水場あるいは炊事と関連する遺構か、それとも周りに漏れては困るもの、例えばトイレであったかもしれない。余談ではあるが、ある粘土貼土坑を調査中、調査補助員が異様な匂いがすると言う。確かに周辺から漂う匂いではなく、その粘土貼土坑内部から立ち上ってくるようであった。しかし500年を経て、トイレの匂いが残るものか、今後粘土貼土坑を調査する際に、内部覆土の分析を試みる事も必要かも知れない。

6) 方形土坑

城山遺跡で検出した方形土坑は、合計で51基を数えるが、形が不明確なものや、小さいもの、そのほかの遺構に属させたものがあり、それらも含めるとさらに数が増える。方形土坑の大きさは、小さいものでは一辺1m四方ぐらいのものから、大きいものでは一辺3.5mぐらいのものまであり、深さでは0.5~1.5mと幅が



写真91 1~4号粘土貼土坑 (北側から)

ある。形態では正方形と長方形とがあり、かどが丸くなって円形に近いものや、底に周溝や小穴があったり、周囲に小穴があったり、その種類はさまざまである。これを大きく3つに分類する事ができ、I類は正方形で比較的小規模なもの、II類は長方形で中規模なもの、III類はその他である。I類は一辺1~2mで、各区画建物跡の内外にあるところから、身近な取納庫であったことが考えられる。今日の住宅の台所に多く見られる、床下取納庫を思い浮かべてみたらいいかと思う。II類は9号区画に4基あるだけで、平均2×3mの規模であるが、深さは0.5~1.5mと幅がある。これも取納庫と推定するが、浅いものはそれが可能かどうかかわからない。III類はI・II類以外のその他の土坑で、形態・規模ともさまざまであるが、数は多くない。中でも3号区画の5号坑は最も大きくかつ深い。周りの壁には小穴があり、また偶然の重なりで墓坑もある。覆土をみると途中で埋めて何かに使い、その後廃棄坑として使われ、また掘り返したりしている。

以上、ここまでに中世の土坑3種を述べたが、そのほとんどは何に使うために掘られたか不明である。それは全て使用状況そのままでの、遺物が出土したことがないためである。これまで述べたように、地下式坑や方形土坑が食料の貯蔵庫や取納庫であるならば、その食料を入れる容器が出土してもいいのではないかと



写真92 30号方形土坑 (南側から)

また粘土貼土坑が水場なら桶や水甕が出ていいと思う。しかし、現在のところそれは望めない状況である。そこでほとんど推定であるが、当時の生活を復元するために探ってみた。さらに資料が増えることによって、これら土坑類が解明される日がくることであろう。

7) 墓坑

城山遺跡で検出した墓坑は、建物跡の周辺から人骨が出土したものと、2号区画の墓域でまとまってあったものにと、大きく分けられる。前者は各区画1～2基あり、出土した人骨の状態から全て土葬である。墓坑の形態は長方形で竪坑のもの(25号)、楕円形で斜めに掘り込んだ半地下式のもの(18～22号)、また27号のように堀の横に掘ったやぐら(鎌倉に特有な横穴墓)のようなものもある。墓坑から出土した土葬人骨のほとんどは、歯の咬耗が進んでいて、下肢骨は比較的太い。中には23号のように歯が全くなくなってしまった人骨もある。そのように考えると、これらの墓坑の被葬者は高齢の男子であると推定する。各区画の屋敷の創設者が、死後その屋敷の守り神として、そば近くに埋葬されたのかもしれない。しかし、例外として20～22号は、坑が小さかったり、歯が若かったりところから、小児の墓坑であった可能性がある。子供はその母の願いとして近くに埋葬したのであろうか。

墓坑群がある2号区画は、火葬骨を入れた蔵骨器が2基出土したB小区画と、火葬坑や土葬坑、方形竪穴、建物跡などがあるE小区画からなる。ちなみにD小区画には江戸時代の墓坑があった。B小区画から出土した蔵骨器は、1号が常滑壺で蓋に五輪塔の空風輪を利用し、2号が同じ常滑の片口鉢で、両者とも13世紀に焼かれたものである。E小区画の6～16号は人骨がなかったが、土葬であると思われる。5号は歯が出土した。3～4号は火葬坑で、その形態から火葬の仕方の変遷が見て取れる。中世の後期(15～16世紀)では、瓢形あるいは方形坑が2つ連結した形で、くびれあるいは連結部がトンネル状になって、一方に遺体を置き、一方を焚き口にして火葬を行っている。城山の3号は、掘り方が浅く、焚き口がトンネル状になっていないため、その前段階的な形態である。方形竪穴2基は、掘り方が浅く、床面にはムシロを敷いた痕跡が認められた。E小区画では13世紀代の青磁・白磁が出土し、城山の遺構の中でも古い時期に属するものである。

8) 馬埋葬坑

城山遺跡では馬を埋葬した中世の土坑を、合計7基検出した。平安時代のものも2基あり、また近くの小川台古墳群でも馬の埴輪が出土しているなど、この地域にも古くから馬を飼っていたことが推定される。中



写真93 25号墓坑



写真94 22号墓坑



写真95 3号墓坑 (火葬坑)



写真96 1・2号墓坑 (蔵骨器埋葬)

世の馬埋葬坑は、区画内の建物跡の周辺近くにあったり、外周堀の外側にあったり、その位置は一定していない。中には4号区画の21号建物跡の中に2号坑があって、そこからこの建物跡が概かも知らないと推定した。馬と飼い主との関係が、馬の埋葬場所に反映したのだろうか。馬骨の遺存度は歯が最もよく残り、次に下顎骨、四肢で、脊椎と肋骨はまれに、頭骨はほとんど残っていない。馬骨から当時の馬の体格は、背の高さが1.3mぐらいで、今の競走馬よりは小さかった。

9) 埋納坑

城山遺跡の埋納坑は、陶磁器や和鏡、金物などを、意識的に埋納した土坑で、方形土坑で2基、また水場に埋納したものが1例あった。1号は4号区画にあり、瓦貫香炉・大切羽・鋏金具が出土した。これは遺物が少し浮いて出土し、また大切羽は坑外から出土したため、純粋な意味で埋納坑と言えないかも知れない。2号は7号区画にあり、ほぼ完形の瀬戸瓶子と口が欠けた青磁碗が埋納状態で出土した。瓶子には何も入っていないかった。このほか12号区画の5号水場の北西隅から、瀬戸花瓶と和鏡が埋納状態で出土した。城山の西隣の新台遺跡では和鏡が3面まとまって出土した。ほかの遺跡の例でも、遺物の埋納には高級な陶磁器、金物などが多く、神への捧げ物とかの宗教的な意味合いが強いものと考えられる。またほかの遺跡でまれに出土する備蓄銭の埋納は、城山ではなかった。

10) 水場

城山遺跡の水場は、井戸と水溜め坑、それに水に関連した遺構を含めたものとした。

井戸には、8号区画の2号のように円筒形に掘ったり、同じ2号区画の3号のように2段掘りしたもの、14号区画の17号のように櫛鉢状に掘ったりした縦井戸と、13号区画13～15号のように、崖面を横に掘ってそこから染み出す水を利用した横井戸とがある。これらの井戸のほとんどは、地下水が当たるところに掘ってあり、発掘後も水が常に湧き出していて、中世当ても充分使えたことが伺える。縦井戸は全て杵やそれをはめた痕跡がなく、硬い地質（上岩橋層）に掘っているため、その必要はなかったと考える。井戸の中でも4・7号からは、多くの石塔が出土した。

水溜め坑で顕著なものは12号区画に5～6号が接続しており、これの上流には22号堀の導水路で結ばれた7号の井戸があり、下流には21号堀の排水路が配置されていて、これらの遺構が関連しあって水場として使われたと考える。坑の中央にはまた小さく浅く窪んだところがあり、水を入れ替えるときに、最後の古い水をここで汲み出したと考えたのは、雨の後に実測するた



写真97 4号馬埋葬坑



写真98 2号埋納坑 (北側から)



写真99 5号水場の和鏡と花瓶の埋納



写真100 2・3号水場 (南西側から)



写真101 5・6号水場（北側から）

めに、溜まった水を汲み出す作業を実際にしたことがヒントである。中世当時、ここで日がな一日、篠本村のおかみさんたちが集まって、洗濯をしたり漬物にする菜っ葉を洗ったり、また手を休めて井戸端会議に華を咲かせたことであろう。前に述べた10号区画の23～25号粘土土坑も、井戸と排水路との関係から、水場であったと推定している。

井戸と水溜めのほか、12号区画の11号は方形で水が染み出し、中から内耳土鍋片とカワラケが出土した。水神様を祀ったり、水場祭祀が実際どのような道具立てで、どのように行われたかわからないが、この坑にはハレの道具であるカワラケがあることから、水場の祭祀を行った所と推定しておく。

11) 階段跡

城山遺跡の階段跡は、主に上位の区画と下位の区画との連絡に使われたりしたものである。その最も顕著な例は、9号区画の南東側にある3号である。これは9号区画から16号堀の所に降りて、9号区画南側外郭に、さらに8号区画へ連絡する階段であったろうと考える。上部から2m程のところまでは階段がよく残っているが、その下は流失してなくなっている。階段の下半分は堀との関係から、そのまま真っすぐ降りるために木のハシゴが掛けてあったかもしれない。また階段の南側斜面に斜めに降りる跡が認められ、初めは南斜めに階段が続いていたかも知れない。そのほかの階段跡は、8号区画では谷に降りて行くものがあり、11・12号区画にも緩い連絡用のものがある。

このように中世になると、人々の活動のより活発化により、遺跡に残る遺構は多種多様になり、またより立体的になっている。そのために一元的な図の示し方や叙述では、その様相をあまねくあらわすことができない。そこでさまざまな検討を加えて、立体感があられる鳥瞰図のような図を作成したり、写真を並列したりして、なるべく遺構の実感が伝わるようにした。資料編を見ていただいてその実感が湧いて来たら、一



写真102 7・8号水場（西側から）



写真103 11号水場（水場祭祀跡）



写真104 3号階段跡（南側から）

つの目的が達成されたと思う。しかし全ての遺構を、詳しく検討することができなかったことと、把握仕切れなかったのは、調査したものの未熟さゆえである。この経験を踏まえて、中世の遺構の調査をより確実なものにして行きたい。

(2) 遺物について

城山遺跡では、篠本城跡に関連する中世遺物が陶磁器類をはじめ、金属製品、石製品、石塔類など多種多様で、その点数も他の中世遺跡に比較して数多く出土した。多くの中世遺跡は、発掘しても遺物の出土数が少なく、どのような物を使って生活していたか、分からないことが多々あった。それに対して城山では腐ってほとんど残らない衣服や木製品などを除いて、ほとんどの物が出土したと言っても良い。しかし、遺物のほとんどは、埋納されたものを除いて、堀や土坑、斜面から破損した状態で出土したものが多く、古墳時代や平安時代の住居跡のように、生活していた時そのままの状態では出土した物は少なかった。

出土遺物で最も多い物は、日常の生活に使った身近な焼き物—陶磁器である。陶磁器には最も高級な中国から輸入した磁器をはじめ、東海の瀬戸や常滑で生産された陶器や、下総で生産された土師質土器など、その生産地によって異なった焼き物がある。また器形では日常の食事に使う茶碗や皿が最も多く、次いで食べ物を煮る土鍋、水を入れる甕が続き、さらに食べ物の盛り付けに使った深皿、食べ物の調理に使った捏ね鉢（こねばち）など、食事に関連した陶磁器が大半を占める。それ以外では、茶道具関係の天目茶碗・茶壺・茶釜、仏具が嗜好に使った香炉、化粧道具の鉄漿（おはぐろ）壺・紅皿（べにざら）・合子（ごうす）、書道具の水滴など、日常生活に使う実用品とは異なった陶磁器も出土している。

資料編では陶磁器を生産地別と器形別を併用して示したが、ここでは陶磁器を大きく生産地別に分け、その中でそれぞれの器形について述べることにし、それぞれの用途については別項で考えることにする。

陶磁器類以外の遺物でもやはり日常生活に使ったものが多く、武装具は出土したもののその数は少なかった。金属・石製品では火打ち金・火打ち石があり、刃物は少ないが砥石が多く、釘も多い。銅製品では和鏡のほかは飾り金具が多い。そのほか硯、石鉢、茶臼など陶磁器と関連した物が多い。また、中国製の銭貨がさまざまな所から多数出土した。石塔類では五輪塔が最も多く、そのほか宝篋印塔・板碑などがある。それでは出土遺物について、それぞれ述べることにする。

1) 貿易陶磁

貿易陶磁は中国や韓国など日本国外で生産され、国内に輸入された陶磁器で、中国製銭貨とともに中世において大量に輸入された。古代奈良時代には中国唐代の三彩（さんさい）が輸入され、時を経て平安時代後

期になると南宋の代の青磁、白磁、が入るようになり、日本人に好まれて鎌倉・室町時代を通して最も多く輸入された。室町時代後期になると明代の染付（そめつけ 青花とも言う）が入り、日本の有田焼等の近世陶磁器にに多大な影響を与えた。中国製品ではこのほか、青白磁、天目茶碗、褐釉陶器などがある。また隣国の韓国からは高麗の代の青磁、李氏朝鮮代の三島手（みしまで）・白磁などがある。そのほか東南アジアのベトナムの安南陶（あんなんとう）、タイの宗胡録（すんごろく）なども入っている。しかしこれら貿易陶磁の多くは、西日本特に北九州で多く出土していて、東日本の関東では鎌倉を除いて少なくなる。

篠本の城山遺跡で出土した貿易陶磁は、青磁、白磁、天目茶碗、褐釉陶器などの中国製品が71点（個体）、粉青沙器（ふんせいしゃき）の朝鮮陶器1点の、計72点である。

青磁は碗が23点で、そのうち8点は表面に鎬蓮弁文（しのぎれんべんもん）のあるもので、13～14世紀に生産された篠本の中でも古いものである。他は無文か見込みに文様のあるもので、14～15世紀の製品である。青磁皿は10点有り、その中で8点が稜花皿（りょうかざら）と呼ばれるもので、これは15世紀後半の製品である。青磁盤は3点有り、これは内面に蓮弁文や劃花文（かくかもん）があり、14～15世紀のものである。



写真105 中国製の青磁



写真106 中国製の白磁

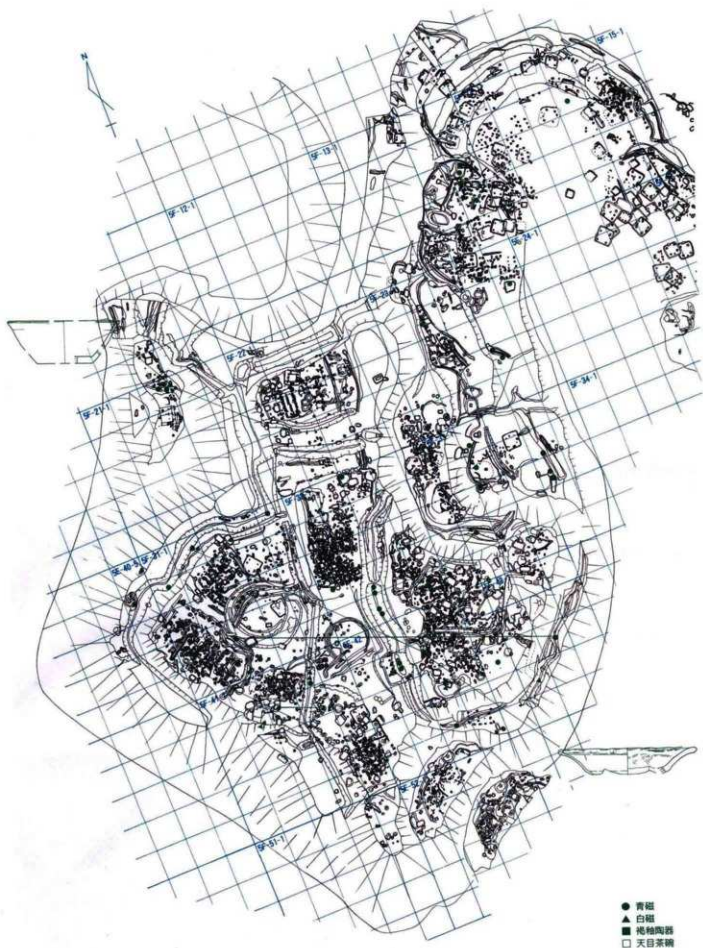


図19 貿易陶磁の出土分布

これら城山から出土した青磁は、良質なものは胎土が白く、釉薬が透明感のある青緑色で滑らかで、質が落ちると灰色の胎土に灰緑色の釉薬で表面に凹凸があるものまでである。器形は蓮弁文や無文の碗、盤、稜花皿などが主体である。このような特徴から、城山遺跡出土の青磁は皆、中国南東部龍泉窯（りゅうせんよう）とその周辺で焼かれた、龍泉窯系青磁と呼ばれるものである。青磁の出土分布は、蓮弁文碗が斜面下の2・13号区画に多く、他は台地上全体に散在し、特に堀に多い。

白磁は皿が29点有り、その中で口縁の釉薬を掻き取った口禿皿（くちはげざら）が13世紀のもので最も古い。14世紀前半の高台皿の底には朱書してあり、15世紀前半の高台を4箇所抉り取った割高皿（わりこうだいざら）は23点有り、15世紀後半の皿は径が大きくなる。また口に角をもった八角杯（はっかくはい）と丸杯（まるはい）は15世紀のものである。これらの白磁には胎土が白色で硬い磁質のものと、乳白色であまり硬くない陶質のものがあり、この質の違いによって表面の色が異なり、城山遺跡出土の白磁は後者のものが多い。白磁の生産地は中国北東部の定窯（ていよう）が南宋代に陶質のものが生産され、明代には中国南東部の景德鎮窯（けいとくちんよう）が磁質のものが生産されたのが有名であるが、城山遺跡をはじめ日本出土の白磁の多くは生産地が特定されていない。城山遺跡での白磁の出土分布は、口禿皿が2号区画にあったほかは、台地上全体に散在し、斜面下では少ない。

2) 瀬戸製品陶器

瀬戸は12世紀頃より操業を開始して以来、今日まで生産が続き、焼き物の代名詞とまでなった日本を代表する陶磁器の生産地であり、中世では日本で唯一の施釉陶器の産地で、これによって全国的に販路を拡大して有名になったものと考えられる。中世の瀬戸産陶器は、12世紀から15世紀前半までは密窯（あながま）と呼ばれる山の斜面にトンネル状のあなを斜めに掘って、窯としたところで焼いたもので、これを特に古瀬戸と呼ぶ。その製品の種類や形は、時期を追って違い、大きく3つの様式に分けられている。15世紀後半から16世紀には生産を向上させるために、製品を焼く焼成室を大きくして地上に構築した大窯（おおがま）が考え出され、生産地も瀬戸の北の多治見・土岐・瑞浪などの美濃にも拡大し、瀬戸美濃陶と呼ばれるようになり、近世陶への梯となる。城山遺跡で出土した瀬戸製品の陶器は、14世紀前半の古瀬戸中期様式から、15世紀後半の瀬戸大窯前半期までのものである。

瀬戸は施釉陶器であるだけでなく、さまざまな種類の陶器が作られ、城山遺跡で確認しただけでも18種類

に及び、その種類は皿・茶碗などの食器類から、花瓶（けびょう）・香炉などの仏具・嗜好的なものまでである。変わったところでは狛犬（こまいぬ）・水鳥などがある。陶器の胎土は鉄分を含んでなく、乳白色か灰色であまり硬くないが軽い。釉薬は前期様式では淡緑色の灰釉（かいゆう）のみであるが、中期様式になると灰釉に鉄分を混ぜた茶色から黒褐色の鉄釉（てつゆう）や天目釉（てんもくゆう）が加わり、後期様式には擂鉢（すりばち）に鉄錆をつけた鬼板釉（おにいたゆう）が増え、それぞれ器種によって釉薬を変えている。これら瀬戸の製品の中には、高価な中国陶磁を補完するために、それを真似て作られたものが多くあり、瓶子（へいし）・四耳壺（しじこ）などは形ばかりでなく、文様も真似てつけている。また天目茶碗（てんもくちawan）や茶壺（ちやつぼ）・茶入（ちやいれ）など、茶道具も茶の湯の作法が中国から伝わったのと同時に入り、またその流行と共に国産品も作られるようになったのであろう。

城山遺跡で出土した瀬戸製品で最も多い器は、小皿類で200点以上にのぼり、そのほとんどは口の部分にのみ釉薬を掛けた緑釉小皿（えんゆうこざら）である。緑釉小皿には底が糸切りのままのものと、高台をつけたものがある。またこれと似たものに大窯の窯道具である挟み皿（はさみざら）があることが、藤沢氏の



写真107 瀬戸製品（小皿・平碗・香炉など）



写真108 瀬戸製品（大皿・擂鉢など）

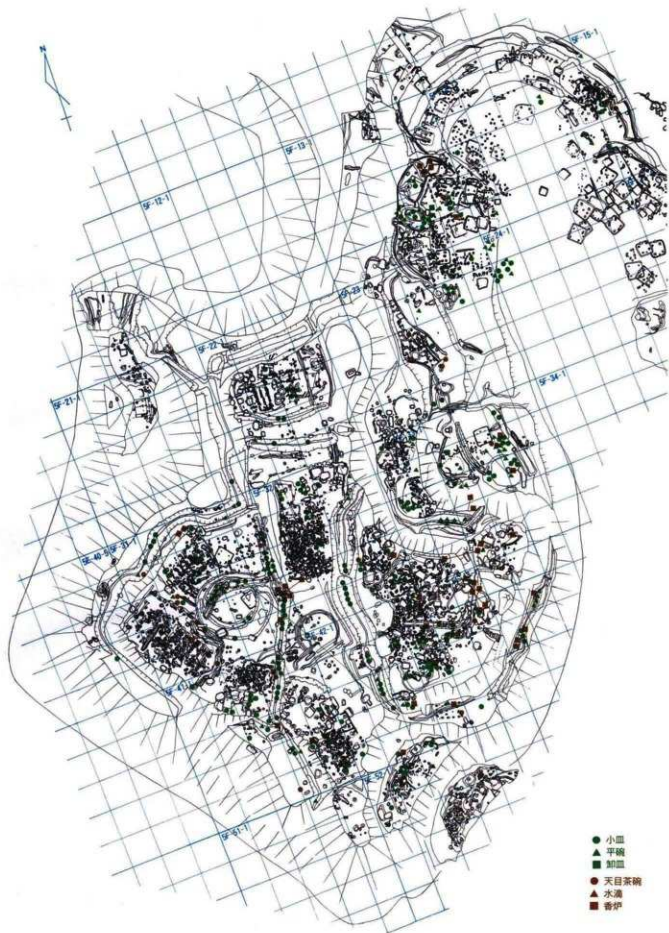


図20 瀬戸製品の出土分布①(小皿・平碗・香炉など)

0 20m

指摘で明らかになった。そのほか大甕では丸皿や腰折皿（こしおれざら）などがある。次いで平碗（ひらわん）が70点で多く、付高台のものから削り出し高台のものまでである。折縁深皿（おりふちふかざら）は52点で平碗に次いで多く、播鉢が46点で続く。折縁深皿は底に足が付くものが多く、また似た形のものに直縁大皿（ちよくえんおおざら）、卸目付大皿（おろしめつきおおざら）があり、これらは破片の部位によっては見分けがつきにくい。卸皿（おろしざら）は4点で少ない。瀬戸製品ではただ一種、無軸の片口鉢（かたくちばち）が3点ある。これは胎土が粗く灰色であるところから、常滑製品に似ている。

茶道具では天目茶碗は30点、茶壺は7点ある。瓶子は20点で、そのうち1点は埋納されて完形であり、2点は中期様式であった。花瓶は10点で、そのうち1点は埋納されて完形であった。そのほか香炉7点、水滴（すいてき）1点ある。瀬戸製品の出土分布は、台地上全体に散在し、特に堀からの出土が多い。中期様式の瓶子232は東斜面下の11号区画であるのに対し、233は台地上南西部の6号区画付近を中心に出土した。

3) 志戸呂（しとろ）製品陶器

志戸呂焼きは現在の静岡県金谷町にあった産地で、中世後半に瀬戸の陶工職人が移転して来て、近世にかけて操業され、瀬戸製品に似た陶器が生産された。城山遺跡では茶壺が3点、播鉢が10点出土し、西隣の新台遺跡では茶入が出土している。志戸呂焼きは胎土に鉄分が多く、茶から紫茶色をして瀬戸より重い。

4) 常滑（とこなめ）製品陶器

常滑は愛知県知多半島の付け根にあり、瀬戸とほぼ同時平行して操業を開始し、今日も植木鉢や急須などを生産する焼き物の町である。中世では現在の常滑市を中心に、知多半島全体に窯が分布していた。常滑は瀬戸と異なり、無軸で鉄分の多い陶土を原料にして、高温で焼き締めた焼き物で、無軸焼き締め陶あるいは拓器（せつき）と呼ばれる。常滑で焼かれた焼き物は初期には山茶碗が多く、次第に壺が主力製品になり、それに加えて片口鉢、壺などがある。中世の常滑は平安末期から安土桃山時代までを12型式に分けられ、その形の変化が明らかになっている。

城山遺跡出土の常滑では、13世紀前半の5型式のものが最も古く、大甕・片口鉢がある。大甕は口縁が外反して角張っていて、肩の部分には淡緑色の自然釉が掛かり、また押印がある。片口鉢は高台があり、灰色をしている。13世紀後半の6型式になると、大甕・片口鉢に加えて壺が増える。大甕の口縁は折れるように厚くなり、色が茶から黒くなってくる。片口鉢は高台



写真109 瀬戸製品 (瓶子・茶壺・花瓶など)



写真110 志戸呂製品 (茶壺・播鉢など)



写真111 常滑製品 (大甕、壺など)

が付き、口縁は丸みがある。壺の433は2号区画で1号墓坑の蔵骨器として出土し、428の蓋口壺は9号区画から出土し、内面に鉄分が厚く付着し、鉄漿（お歯黒）壺として使われていた。この13世紀代の常滑の分布は斜面部が多く、381は14号区画を中心に11・13号区画にも飛び、388は台地上西端の5号堀より出土した。

14世紀前半の7型式は3器種とも少なく、特に380は13号区画の28号墓坑をはじめ、東側谷部から台地上の12号堀からも出土した。380は甕あるいは広口壺と思われる。片口鉢は高台がなくなり、口縁が角張って厚くなる。甕も片口鉢も茶褐色である。7型式の片口鉢も、東側斜面下に分布する。

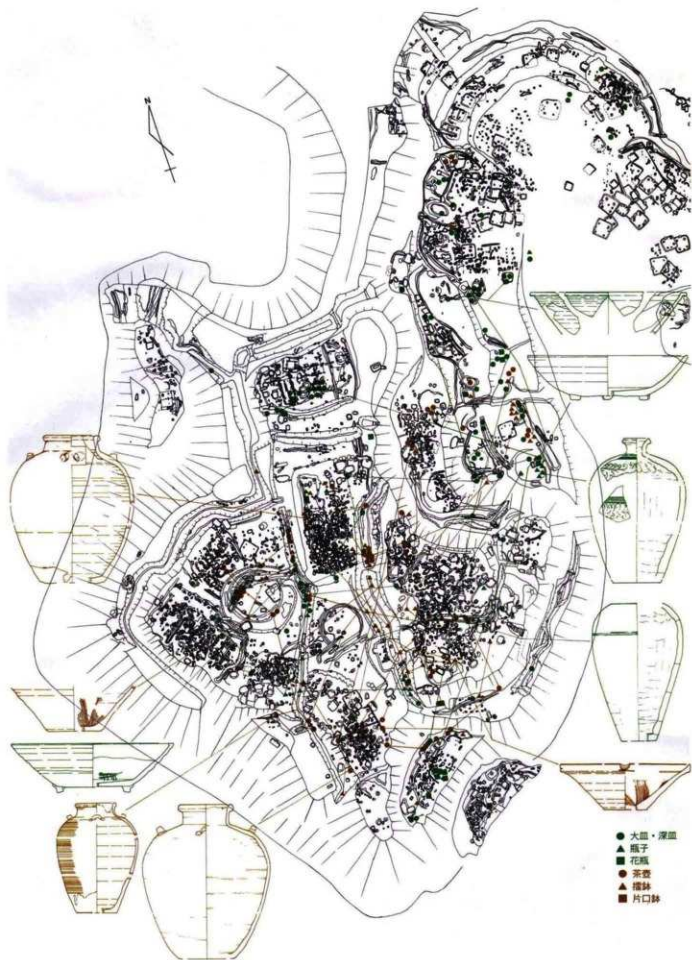


図21 瀬戸製品の出土分布②(大皿・瓶子・茶壺・撞鉢など)

14世紀後半から15世紀前半の8～9型式は、城山遺跡出土の常滑の中では最も多く、甕で80点、壺で10点、片口鉢は12点ある。大甕は口縁の折り返しが強くなって肥大し、9型式では帯状になる。8型式では灰色から黒色であったものが、9型式では高温で焼かれたものは表面が紫色になり、自然釉が掛かるものが多くなる。壺は広口の小形のもの、口がすばまって大形のものがある。小形ものは折り返しの口縁で、茶色から紫色をし、大形ものは玉緑の口縁で、縦長の胴で、赤褐色と黒色がある。425の甕としたものは、広口壺に分類されるものかもしれない。片口鉢では口縁がより厚く角張り、赤褐色が多い。8～9型式になると甕は、台地上全体に分布するようになり、東側斜面下では10～12号区画には多いが、13～14号区画では少なくなる。片口鉢は台地上西部の4～6号区画にはなく、東側斜面下の11～13号区画に多い。壺は南西部に多い。このようにこの時期の常滑は、器種によって出土分布が異なり、区画のあり方と器種ごとの用途の違いに何らかの関係があったのかも知れない。

5) 渥美(あつみ)製品陶器

渥美も常滑と同じ12世紀はじめ頃に操業を始めた焼き締め陶器の産地であるが、こちらの方は14世紀にはほとんど生産をやめてしまったために、遺跡からの出土数はあまり多くない。窯の場所は現在の豊橋市周辺から渥美半島全体にわたり、500基近くが確認されている。最も知られているのは12世紀末の東大寺再建の時に、瓦が渥美窯で焼かれたことである。渥美が常滑と異なるところは、色調が全体的に灰色で、胎土が砂質であり、壺には線書きの文様があり、甕には胴部器面全体に押印がある。

城山遺跡では壺が7点、甕が13点の計20点出土している。壺の中には線刻や変形の押印があるものや、また肩の部分の擦り削って捏ね鉢に利用しているものもある。甕は胴部全体の表面に押印があり、肩や内面に自然釉が掛かっているものがある。ほとんどは12～13



写真114 土師質土器 (カワラケ)



写真112 常滑製品 (片口鉢)



写真113 渥美製品 (甕・壺など)

世紀のもので、城山出土の中世遺物群の中で最も古い一群である。渥美の出土分布は台地上から斜面部にまで遺跡全体に散在しているが、南部ではほとんど無い。

6) 土師質土器

中世では貿易陶磁や瀬戸・常滑など、特定の産地で焼かれた硬質の陶磁器のほかに、平安時代から続く技術で低温焼成された土器が各地で作られていた。その一つはカワラケで、全国的に大量に作られ、遺跡からは数多く出土する。またもう一つは内耳土鍋(ないじどなべ)と呼ばれるもので、これは関東を中心に出土し、他の地域では少ない。城山遺跡ではこの2種類の土師質土器が多数出土したが、さらに茶釜形土器(ちゃがまがたどき)と呼ばれる器も多く出土した。このほかに播鉢、香炉なども土師質で作られたものがある。これらの土師質土器の一群は、どこで生産されていたかはいまだに特定されないが、城山遺跡出土の土器の多くには花崗岩粉が多く入っているところから、花崗岩産地の茨城県南部地方も視野に入れておきたい。しかし主要原料である粘土は城山でも採取できるところから、自前生産もやっていた可能性も考えられ、さまざまな面からの検討を要しよう。

カワラケは城山遺跡では130点出土した。器形の似た瀬戸緑釉軸小皿が190点あることから比べると、城山遺跡

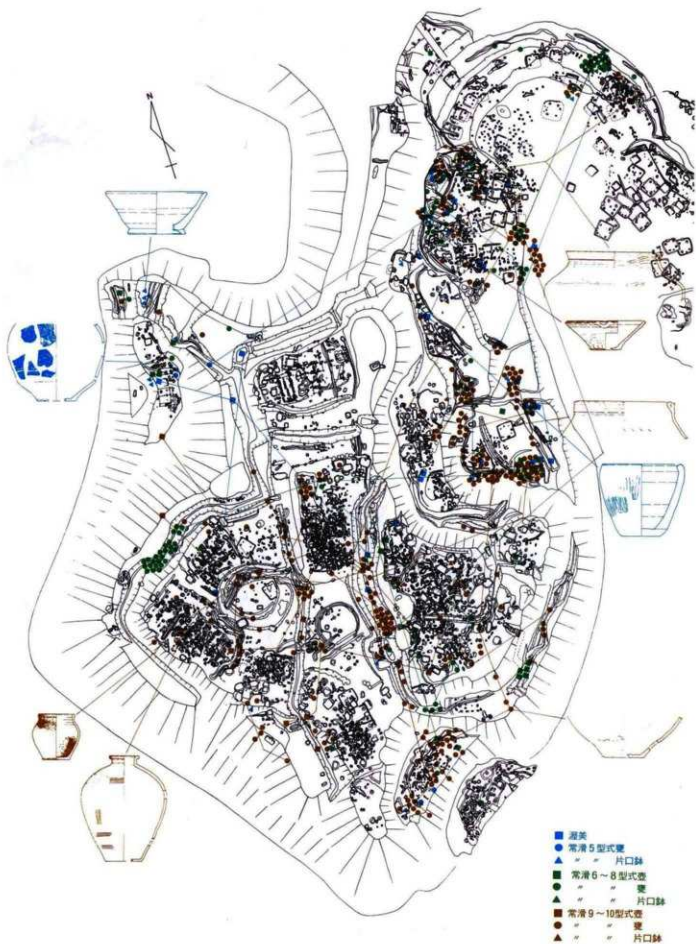


図22 渚美・常滑製品の出土分布

0 20m

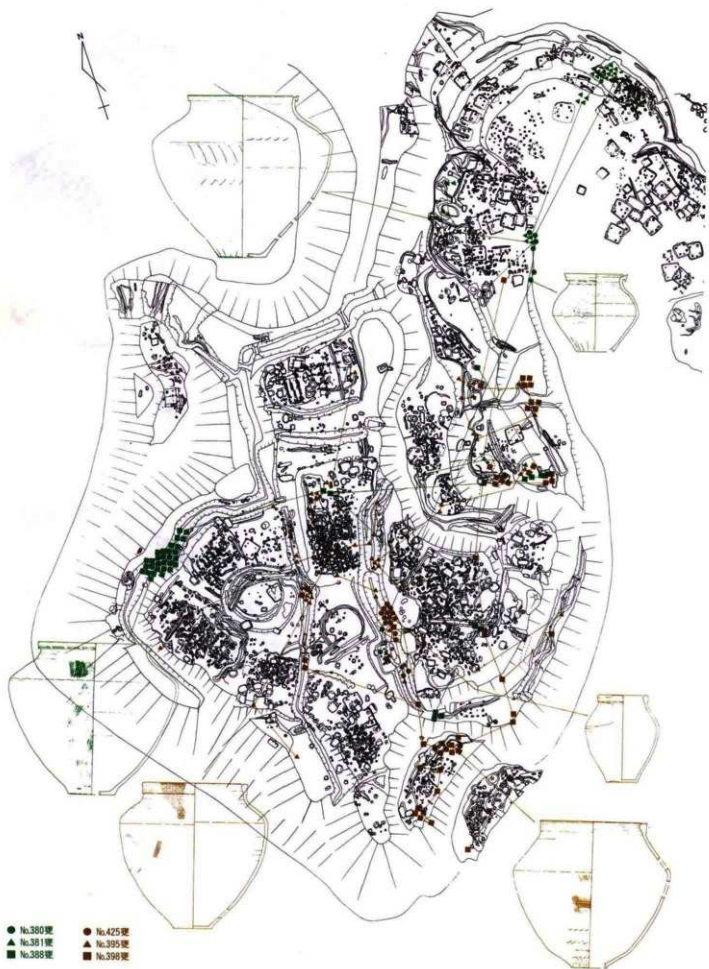


図23 常滑製品の個体別出土分布

0 20m

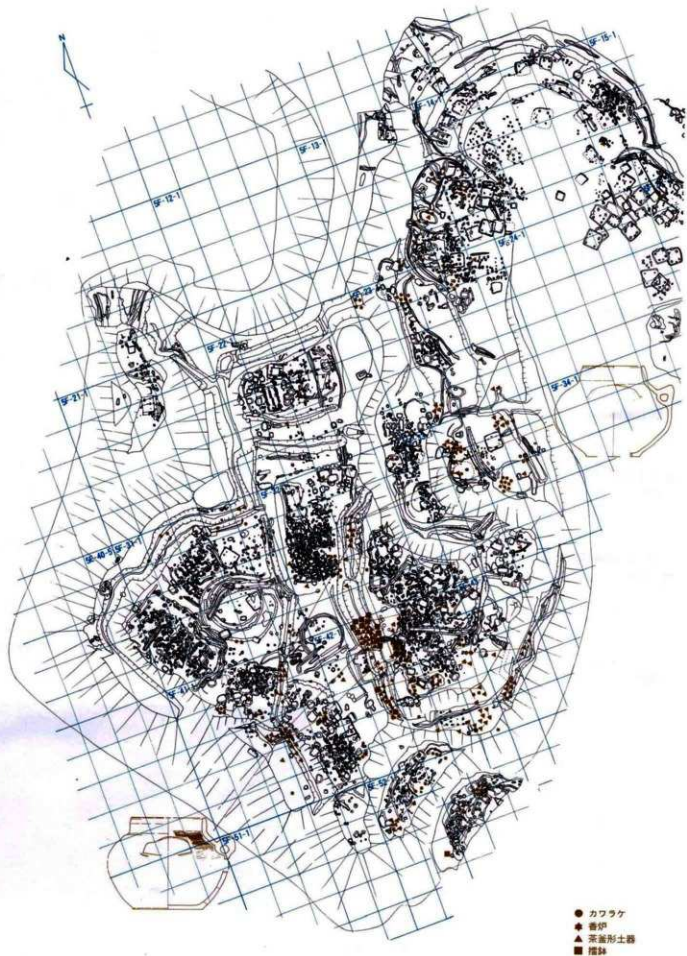


図24 土師質土器の出土分布①

のカワラケは少ないように思う。城山遺跡で出土したカワラケは、全てロク口成形で作ったもので、底部には糸切りの後がそのまま残っている。大きさは口径が6.6~12.6cmで、10cm前後が多い。形は底部から体部の立ち上がりが丸みを有しているものと、40°前後の傾きで真っすぐなものがあり、前者のものの方が古いと思われる。また底部に焼いた後に孔をあけたものが2点ある。底部に墨書したものが3点あり、その中で墨書「禪林(ぜんりん)」と「妙胤(みょういん)」は仏教と関連した文字であり、後者の「胤(たね)」は千葉氏一族につけられた名の一文字であるところから、篠木城跡に拠った人物を知る唯一の文字資料である。そのほか口縁にダール状物が付着しているカワラケもあり、灯明皿にも使われたらしい。カワラケの主な用途は、「ハレ(儀式)」の時の飲食に使われたもので、一回使ったものは不浄とされ、捨てられた使い捨ての器であった。そのため遺跡によっては、カワラケが大量に出土することもある。それに対して「ケ(日常)」の器は、丈夫な瀬戸や貿易陶磁が使われた。

城山遺跡のカワラケは、大きさ、形、胎土、作り方などが一定していないところから、一時に大量に作られたのかもしれない。出土分布は主に台地上全体に散在していて、特にまとまって出土した所はない。

内耳土鍋は、200点と焼き物の中でも最も多い数が出土した。これは食べ物(ご飯や煮物)を煮たり炊いたりする器で、本来は鉄鍋で煮炊きをしたものであった。しかし、鉄鍋は高価でなかなか手に入らなかったために、土器で代用したもの考える。そのため形は鉄鍋を模したもので、口縁の内側に耳状の把手が付き、鉢状の形態をしている。鍋として汁物を入れるため、水漏れを防ぐために黒く煙し焼きしたものが多く、またカワラケと異なって形が一定しているところから、専門の職人が作ったものと考えられる。

城山遺跡出土の内耳土鍋は完形に近いものもあり、これによると内側に付く把手は1対2の3点支持になっていて、土鍋が引っこ返らないように工夫したものである。この把手に紐を通して自在鉤に掛け、いろりの上に乗せて食べ物や煮炊きした姿が浮かぶ。土鍋の外側には厚くスガが付いているものが多く、日々の生活に最も多く使った器であったのだろう。そのため土鍋の消耗も著しく、最も消費していったものであったことから、遺跡からの出土数が最も多いことが裏付けられる。

城山遺跡の内耳土鍋は、口径が26~40cmで34cm前後が最も多く、深さは10cm、底は平らで径が口径のほぼ半分の16~17cmである。体部は45°ぐらいで立ち上がり、中位で少し内向する。口縁は肥厚して角張り、口縁下3cmほどのところに段が有るものと無いものがある。

このような形態のものは下総から常陸地域で多く、その中で城山遺跡では口縁が外反して深めの、形態を異にするのが1点(650)出土している。それ以外は形態的には変化が乏しく、年代的にどのように変遷するかかわらないが、あえて予測すると、内面の口縁下に段の有るものから、ないものへと変化して行ったと考える。表面は煙し焼きとスデで黒いが、胎土は赤褐色が多く、焼成が良くなくもろいものも有り、また灰色のものが数点ある。成形は轆轤みで手撫で調整して作り、多少の歪みを有するものが多い。内耳把手は、成形後に粘土紐をよく接着していて、この部分の剝離はほとんど見られない。底面は砂目と思われるが、よく掻き取っている。

内耳土鍋は、台地上全体から東側斜面に分布し、特に堀からが多く、消耗したものの多くは堀に捨てられたものと思われる。墓域である2号区画では全く無く、屋敷地とは異なる1号区画や古い時期と思われる14号区画は少なく、土鍋が日常生活と密接に関係していたことや、初期段階では無かったことが推定される。

内耳土鍋は近世になると、次第に浅くなって土鍋からフライパン状の焙烙(ほうろく)へと変化して行った、とその形から考えられる。

茶釜形土器は、鉄製の茶釜を模して土で作られたもので、茶の湯を沸かすためのものであろう。本遺跡で出土したものは、丸い胴部に口縁部が直立し、胴部に火よけのある把手が一对付き、胴部の下半分はスデで黒くなり、火にかけていたことが分かる。城山遺跡では15点(個体)が出土し、他の遺跡に比較して多い数量である。

土師質土器ではこのほか、挿鉢が3点(表面が黒い所から下の瓦質土器に属すか)、香炉が2点、狛犬が1点有り、いずれも瀬戸製品をまねて近所で作られたものである。



写真115 土師質土器(内耳土鍋)

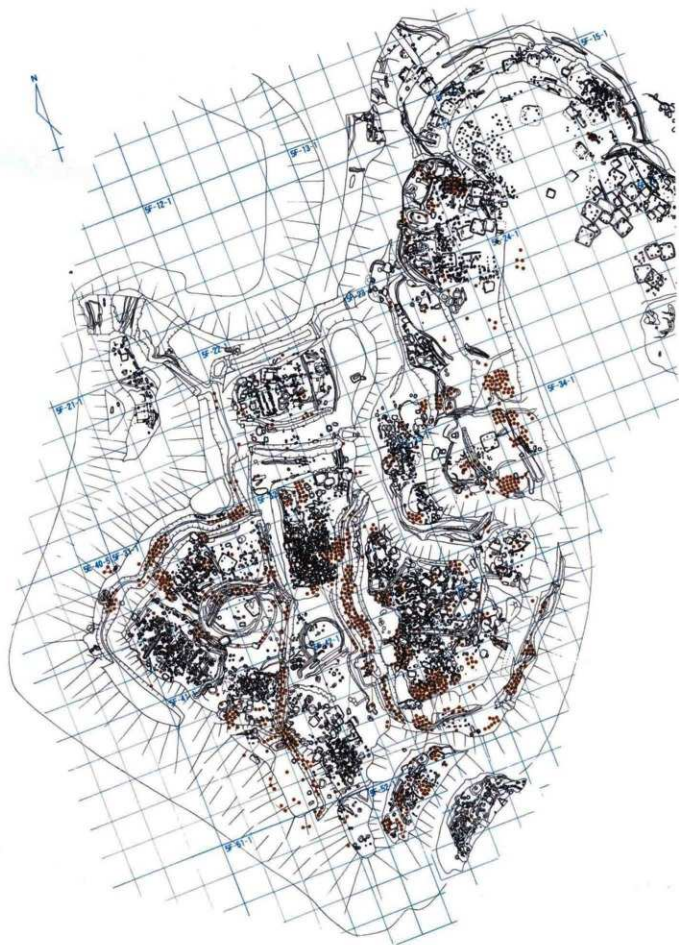


図25 土師質土器の出土分布② (内耳土鍋)

7) 瓦質土器 (がしつどき)

城山遺跡ではごく少数ではあるが、瓦質土器と呼ばれる陶磁器より軟質で土師質土器とは異なる中世の焼き物が出土した。それは主に現在の畿内大阪府枚方市樟葉(くすは)と奈良を中心に焼かれた土器で、平安時代の燻べ焼き(くすべ焼き)の技術がそのまま中世に引き継がれ、中世から近世、さらに最近まで消し壺がその伝統のもとで作られていた。中世では小物は碗・皿から、大物は火鉢まで作られ、主に近畿地方で消費されたが、一部は関東にも流通した。

城山遺跡の瓦質土器は、香炉が1点、火鉢が3点有り、このうち火鉢1点(571)を除いて、胎土は細かく表面の仕上げが丁寧な所から、畿内産のものとする。225の瓦質香炉は、1号埋納坑から出土したもので、体部に雲文押印を施し、3つの脚を有した独特の形態である。関東では畿内産の瓦質土器の出土数は少なく、京物として珍重されたものであろう。

8) 銭貨

中世の銭貨は32種類、235点が出土した。全て中国製のもので、最も古いものは唐代の初鑄年が621年である開元通寶、最も新しいものは明代の初鑄年1433年である宣徳通寶である。また最も点数が多いものは、明代の初鑄年1408年である永楽通寶が25点あり、次いで北宋代の初鑄年1086年である元祐通寶が24点ある。1種1点のものは北宋代の初鑄年976年である太平通寶ははじめ、すべてで10種類10点ある。王朝別では北宋代が976年初鑄の太平通寶から1119年初鑄の宣和通寶まで24種類146点あり、このいわゆる北宋銭の一群が半数以上を占める。そして北宋代最後の宣和通寶から120年後に南宋代の紹定通寶(1228年初鑄)・淳祐元寶(1241年初鑄)が有り、そのまた127年後に明代の洪武通寶(1368年初鑄)が造られるまで間があき、唐代の開元通寶・貞元通寶などを加えて、大きく唐代のもの、北宋代のもの、南宋代のもの、明代のもの4群に分けられる。これ



写真117 城山遺跡出土の中国製銭貨



写真116 土師質土器(茶釜形土器)

らのほかに文字の彫り込みが浅かったり、腐食したりして判読不能なものが33点あった。

銭貨の出土分布は台地上全体に散在し、まとまっても南西部腰曲輪と5・6号水場わきなどであった。また谷部の13・14号区画からは全く出土しなかった。墓坑では29号墓から7点出土したのみである。また上述4群に分けた時の、分布の片寄りは認められない。

表2 中世銭貨一覧

番号	銭貨名	国名	初鑄年	書体	枚数
1	開元通寶	唐	621年		10
2	貞元通寶	唐	758年		2
3	元祐通寶	唐	845年		1
4	太平通寶	北宋	976年		1
5	淳化元寶	北宋	990年	行書1	1
6	至道元寶	北宋	995年	真書1 草書1	2
7	咸平元寶	北宋	998年		1
8	景德元寶	北宋	1004年		1
9	祥符元寶	北宋	1009年		1
10	祥符通寶	北宋	1009年		1
11	天禧通寶	北宋	1017年		4
12	天聖元寶	北宋	1023年	真書3 篆書5	8
13	景祐元寶	北宋	1034年	真書2	2
14	皇宋通寶	北宋	1038年	真書6 篆書12	18
15	至和元寶	北宋	1054年	真書1	1
16	嘉祐元寶	北宋	1056年	真書2 篆書2	4
17	嘉祐通寶	北宋	1056年	真書2 篆書2	4
18	治平元寶	北宋	1064年	真書3	3
19	熙寧元寶	北宋	1068年	真書11 篆書12	23
20	元豐通寶	北宋	1078年	行書8 篆書11	19
21	元祐通寶	北宋	1086年	行書11 篆書13	24
22	紹聖元寶	北宋	1094年	行書4 篆書3	7
23	元符通寶	北宋	1098年	行書2 篆書1	3
24	聖宋元寶	北宋	1101年	行書2 篆書3	5
25	大觀通寶	北宋	1107年		3
26	政和通寶	北宋	1111年	分幣3 篆書2	5
27	宣和通寶	北宋	1119年	分幣1 篆書1	2
28	紹定通寶	南宋	1228年		1
29	淳祐元寶	南宋	1241年		1
30	洪武通寶	明	1368年		8
31	永楽通寶	明	1408年		25
32	宣徳通寶	明	1433年		3
33	判読不能				33
合計	32種類			書体別45種	232

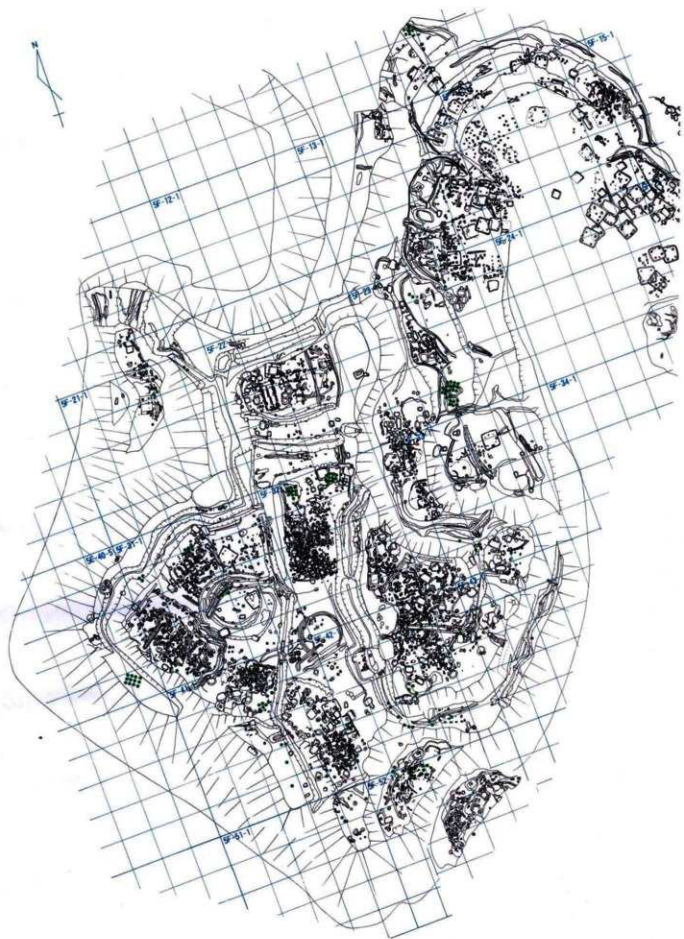


図26 錢貨の出土分布

0 20m

9) 金属製品

金属製品は貨幣として使われた中国製の銅製銭貨のほかに、銅製品では和鏡、切羽や目貫などの刀装具あるいは武装具、飾り金具など日常生活とは掛け離れたものが主に有り、それに対して鉄製品では釘、火打ち金などの日常に使われたものが多く、小柄や鎌などの武器は少ない。しかし、磁石が多数出土しているのに対して、研ぐ刃物は小柄2点しかないため、多くの鉄製刃物は再生されたり、携えて行ったものと考えられる。特に当時の武器の代表である太刀は、城山遺跡では全く出土しなかったばかりでなく、他の遺跡でもほとんど出土例は聞かない。また鉄鍋もなく土鍋が多く使われたことも、城山遺跡の特徴である。多分下総の地域では鉄は貴重品で高価であったことと、陶磁器と異なって鍛冶で再生可能であったことが、消耗しても廃棄する事なく何度も作り直して使われることになり、遺物として残ることが少なかったものと推定する。

鍍金した飾り金具では、蝶番（ちょうつがい）金具と目貫（めぬき）・八幡座（はちまんざ）金具などがある。蝶番金具は幅が7cm近くある比較的大きいもので、銅板の表面には蓮の花と葉に唐草文をあしらった文様が刻まれ、表面に鍍金されている。文様の意匠から、仏教に関連したものに使われたものと考えられる。目貫は太刀の柄に出た目釘を隠す飾り金具で、城山遺跡で出土したものは銅を素材に、獅子2頭をあしらった文様を押し出しで造り、表面に鍍金している。八幡座金具は鐙か兜に付けた飾り金具と思われ、銅板に菊花の文様を押し出しで造り、表面に鍍金している。

鍍に使われたと思われる金具に、銅製の鉾金具が2点出土している。また鞆（こはぜ）は兜や鍬の紐を絞めるときに使われた金具である。切羽（せつば）は太刀に鐙（つば）を付けこれを固定するための金具であり、大切羽はその大型のものである。弁（こうがい）は髪の毛のほつれを直したり、頭を搔いたり、また基手の小突起は耳かきとなったりした道具で、通常武士が太刀の鞘（さや）に付けておいたものであるという。これら蝶番金具を除いた銅製品は、武士と密接に関係する品物である。

和鏡（わきょう）は古代以来伝統的な円形の銅製の鏡で、裏面にさまざまな文様が鑄造によって彫られ、それによって各種の名前が付けられている。城山では大小2面の和鏡が出土した。小さいものは径9cm程で、腐食が進んで裏面の文様が見えにくい。菊花と雀をあしらった菊花双雀鏡（きっかそうじゃくきょう）と呼ばれるものであろう。大きいものは径11.2cmで、裏面の文様は秋草双鳥（あきくさそうちよう）と思われる。城山出土の和鏡2面とも、鏡面の縁に2箇所孔が

あけられているか、窓状にあけられ、これに紐を通して吊り下げられていたものと思われる。このようなものに、表の鏡面に仏像を彫って懸け仏（かけぼとけ）とした御正体（みしょうたい）があり、これにあてる事も考えられる。しかし、一方で小形の鏡（和鏡とは異なる）と思われるもの（18）が出ていて、これにも孔があけられているところから、城山遺跡では鏡を懸けて使ったとも考えられる。

皿は径8cm余の銅製で、ほとんど腐食がなく、良好な状態で7号区画31号建物跡から出土した。これは仏具の一つと考えられるが、他にあまり例を見ないため検討を要する。

そのほかの銅製品は、環状のものや円筒、線状のものなど、飾り金具と思われるものを除いて、何に使われたかわからないものがある。23の円筒は、馬にかけた紐を束ねた金具であると言われる。

鉄製品で多いのは建物に使う釘類で、鍛造の角釘が70点ほど、また鍍（かすがい）と思われるものが4点ある。釘の長さは3~10cmで、寸による規格があったのかはわからない。中でも8号区画の35号建物跡からは、31点の短めの釘が出土した。

次に多いのは鍍金（火打ち金）と思われる鉄片で、30点強出土している。この中で113の1点は平安時代以来の鍍鍍と呼ばれるもので、鍍金であることが分かる



写真118 城山遺跡出土の銅製品



写真119 城山遺跡出土の和鏡

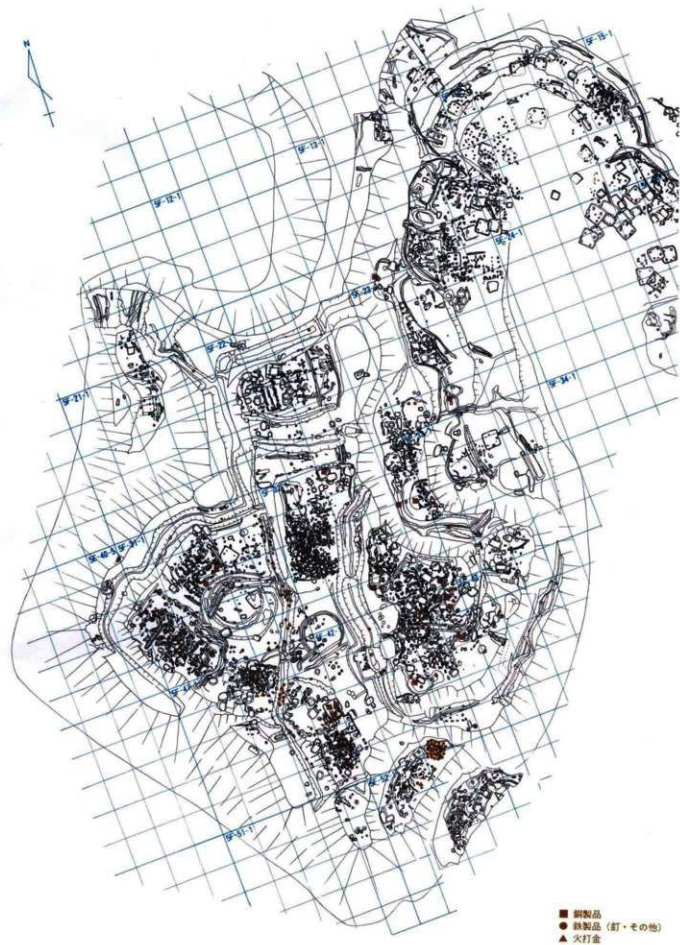


図27 金属製品の出土分布

0 20m

が、他は不定形の比較的分厚い鉄片である。燧石との数の比較からこの鉄片を燧金としたが、これは再利用されなかったものなのかかわからない。燧金の出土分布は台地上の建物跡の中からが多く、その使用目的と建物内での出土位置（例えば厨房——台所）との関連が想定されよう。

そのほか、小柄（こづか）2点、鎌（やじり）1点、鍬（くわ）と思われるもの1点が形のわかる鉄製品で、他は破片、板など原形がわからないものがある。

これら金属製品のほかに、この製品を造るのに使ったと考えられる埴塼（るつぼ）と思われるものや、鍛冶の時にその施設の一部としてのフイゴ羽口（はぐち）、また鍛冶で出る鉄滓（てっさい）が出土した。このような遺物は台地上で散在して出土したため、明確な鍛冶遺構はわからないが、鍛冶遺構と考えられるものは6号区画外郭にある。遺構は不明確であるが、フイゴ羽口や鉄滓が出土したことは、城山遺跡で鍛冶をしていたことの証明でもある。

10) 石製品

石製品では燧石（火打ち石）や砥石（といし）のように、鉄製品と関連するものから、それ自体単独で使われたものがある。燧石や砥石は主に手に持って使う小形のもので、それに対して石鉢（いしぼち）や茶臼（ちゃうす）は大形で重く、床に置いて使ったものである。石製品はそれぞれの種類によって用途が異なり、そのために材質もそれぞれ異なる。

燧石は、ガラス質の石をたたくと火花が出ることを発見した人間が、はじめて手にした火付け道具のひとつであるが、いつ頃から使いはじめたかは未だにわかっていない。平安時代には燧鎌が出土した例があるので、そのころには日本で使っていたことは確かである。城山遺跡では40点余り出土していて、そのほとんどは中世のものとする。燧石の特徴は、ガラス質の石の角を打ち欠いた跡があるもので、形はさまざまである。大きさは2.3×2cm、5gほどのものから、6cm角で135gまで、小さいものから大きいものまでである。21の大きいものはあまり打ち欠いたあとがなく角張っているのに対して、小さいものや丸みのあるものはよく使われて角が取れている。材質は珪瑯（めのう）が31点で最も多く、そのほかにチャート、石英岩がある。

砥石は刃物を研ぐ道具で、城山遺跡では平安時代の住居跡からも出土していて、形はほとんど同じである。城山遺跡では中世のものとする砥石は160点を数え、使い方によって擦り減り方が異なり、さまざまな形となっている。

基本的な原形は角棒状で、これに孔をあけたもの、あるいはくびれを入れて、おそらく紐を付けて携帯し



写真120 城山遺跡出土の鉄製品



写真121 城山遺跡出土の燧金と燧石



写真122 城山遺跡出土の砥石

た小形のものがある。次にすばまりで山形の三角形になったもの、両端が薄くなって中央が厚く残っているもの、逆に中央部が薄くなって反ったようになったものなどがある。またほとんど使っていない砥石も4点あり、その大きさは16×7cmもある。砥石の石材は、多くは凝灰岩で今日でも使われる天草石砥石に近い石質である。関東では群馬県に産地があると言われる。そのほかに砂岩、粘板岩が使われている。

砥石と分類した中に、陶片を利用したものがある。常滑や渥美あるいは奈良・平安時代須恵器の破片を、周囲の割れ口を擦っているもので、なかには四角形や



図28 石製品の出土分布

0 20m

三角形に形を整えたものもある。なかには切り込み状や溝状の使った跡が残るものもある。擦った割れ口や裏表面を使ったものであろうが、何を対象に、どのように使ったものであるか検討する必要がある。このほかに石塔を砥石に利用したものが、何点か出土している。これは石塔の項で紹介する。砥石は2号区画を除いた全体に分布し、特に3号区画や9号区画に多い。

硯(すずり)はすべて破損していて、原形を留めているものはなかった。硯と認められるものは7点あり、すべて粘板岩製で、長方形で海と陸を有した、今日使っているものと形は同じである。幅は7~8cmあり、今日の硯とあまり変わらない大きさである。陸の部分はかなり凹み、なかには119のように溝状になるまで使われたものもある。また119の裏面には、判読できないが文字らしいものが刻まれている。123は故意に切り取られていて、破損後に砥石として利用しようとしたのか。



写真124 城山遺跡出土の硯

石製品で大形のものになると白類がある。その中でまず茶臼が、城山遺跡では20点余出土している。茶臼は茶の葉を磨り潰して抹茶(まっちゃ)を作る道具で、環状の受けがついた下臼と、その上に載せて回転させる上臼とが合わさって一組になる。そして上臼と下臼が合わさる面には、放射状に浅い溝が切り込まれ、両者の中央には回転するときの心棒を通す孔があり、上臼には回転させるときの把手を差し込む孔が横に2箇所対あけてある。城山遺跡の茶臼で上臼は5点だけで、残りは下臼である。材質は安山岩が1点で、これは伊豆半島産の石材と思われ、東海地方から茶の葉とともに入ったのであろう。残りは砂岩製で、これは銚子産の石材で、東海から入ったものをまねて地元で造ったのであろう。

白では1点(139)、靱白の上臼が出土している。

また、白ではないが、石鉢が50点近く出土している。石鉢は文字通り石の鉢で、内面がツルツルに磨り減っていることから、こね鉢として使ったものと思われる。しかし石鉢の外表面は黒くススが附着していたり、赤く焼けているものがあつたり、熱を加えながら使ったと考えられる。すべて破損していたが、復元した大きさは、径が26~37cm、深さは10cm弱で、注ぎ口があり、



写真123 城山遺跡出土の陶片砥石



写真125 城山遺跡出土の茶臼



写真126 城山遺跡出土の石鉢

瀬戸・常滑の捏ね鉢とあまり変わらない。材質はすべて砂岩製で、銚子産の石材を使っている。石鉢の表面には削った鑿(のみ)の跡が残り、石塔に見られる鑿痕とほぼ同じであるところから、専門の石工職人がいて、石塔を含めた石製品を造っていたものと考えられる。形態は体部が60°くらいで真っすぐに立ち上がり、口縁が少し外反して波打つものと、内湾ぎみに立ち上がり、口縁が水平に面取りしたものがあり、年代的に異なるか、石工の個性かは不明である。石鉢の分布は、1~3号区画を除いた台地上から谷部まで、全体に散在する。その中で140の底部は、8号区画36号建物跡わきに置かれるように出土した。

11) 石塔

石塔は信仰に関連して造立されたものが多く、お墓に立てる墓石から路傍の野仏など、立てたときの時代や目的によって、さまざまな形・種類の石塔あるいは石仏がある。

城山遺跡で出土した石塔は、五輪塔(ごりんとう)・宝篋印塔(ほうきょういんとう)・板碑(いたひ)の3種類で、これらは仏教に関係して、墓石としての供養塔として立てられたものである。しかし墓坑の上から出土したものはほとんど無く、多くは堀や土坑などから、投棄されたような状態で出土した。五輪塔は4つの部分からなり、宝篋印塔も2点の一石塔を除いて4

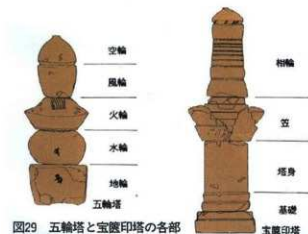


図29 五輪塔と宝篋印塔の各部



写真127 城山遺跡出土の五輪塔



写真128 東禅寺の五輪塔

つの部分からなっていて、それぞれがバラバラに出土したため、一基ごとの石塔に組み合わせることは難しかった。そこでここでは石塔の基数を示すのではなく、それぞれの部分の点数を記すことにした。

五輪塔は、仏教思想の宇宙観で地・水・火・風・空の5つの元素から世界ができていくと言う考えから発し、それを立体的に表したものである。つまり上から空輪・風輪・火輪・水輪・地輪と呼び、普通上2つの空輪・風輪は1つの石になり、また小形の五輪塔は一石塔になっているものがある。五輪塔は供養塔(くようとう)としてはじめは立てられたが、後に墓標として造られるようになり、室町時代には全国的に盛んに造立された。

城山遺跡出土の五輪塔は、すべて4つの部分からなるもので、石材は銚子産の砂岩で、梵字(ほんじ 古代インドの文字)の真言(しんごん)を彫ったものではなく、水輪と地輪に墨書しているものがそれぞれ1点ずつあったのみである。

空風輪は個体として数えられるものは27点あり、団子状にすんぐりしたもの(1類)と、砲弾形のもの(2類)とそれに少し偏平になったもの(3類)がある。

1類は3点で、空輪と風輪とのくびれが大きく、断面が円形である。これが城山遺跡出土の中で最も古い形で、周辺にある五輪塔と比較して14世紀頃のものと考えられる。2類は12点あり、砲弾形の中央部に小さくなくたぐいれがあり、断面はほぼ円形である。表面は丁寧に仕上げ、火輪への差し込み部分には鑿痕が残る。3類は12点あり、2類を少し偏平にして断面が楕円形である。この3類が城山の五輪塔で最も新しいと考える。空風輪の高さは22~26cm、幅は12~13cmで、大きさにあまり差がない。

火輪は風輪の下に置かれ、真上から見ると方形で、横から見ると笠状の形をしている。数えられる個体は37点あり、五輪塔の部分の中で最も多い。周りの側面が垂直に近く立つものから、斜めに立ち上がって角が鋭くなるものまであり、前者が古く、後者になるにつれて新しくなると考える。上面中央には空風輪を差し込む孔があり、鑿痕が見える。下面にも全体に鑿痕が残る、そのほかの面は丁寧に仕上げている。41の上斜面には「X」しるしの線刻がある。大きさは幅が15.5~26cm、高さが8.5~18cmで、差を生じている。

水輪は火輪の下に置かれ、28点を数える。真上から見ると円形、横から見ると饅頭状の形をして、上面と下面は平らであるが、鑿痕が残る、安定するように中央部が少し窪む。上面と下面とは径が異なり、下面の方が大きい。65には側面に発心門(東)の「パー」、涅槃門(北)の「バク」の真言が、それぞれ墨書されている。水輪の大きさは径(幅)が16~23cm、高さが9

～16cmで、皆高さの低いものである。また側面の中央が少し角張るものがある。

地輪は最下部の基礎に当たるもので、サイコロ状の直方体に近いものから、下面が少し小さくなった逆台形状になったものもある。24点を数える。下面は粗く鑿痕が残って凹凸があり、上面は平らに仕上げているが、中には鑿痕を文様のように残しているものがある。側面は全体に丁寧に仕上げている。93には側面に修行門(南)の「アー」の真言が、墨書されている。地輪の大きさは幅が15～26cm、高さが11～20cmで、差が大きくなっている。108・115は上面や側面が、砥石に利用されていた。

宝篋印塔は「唐の斜門不空三藏の訳による『一切来心秘密舍利宝篋印陀羅尼經』の教えの中から出た名称で」(県 1980)、はじめは經典を入れて立てられたが、後に五輪塔と同じように造立された。宝篋印塔は上から相輪・笠・塔身・基礎の4つの部分からなり、関西式と関東式とがある。また東総では下総型と呼ばれるものが分布し(井上 1994)、城山遺跡でも同型が出土している。

城山遺跡では一石塔が2点、相輪が8点、笠が4点、塔身が3点、基礎が4点出土した。すべて鏡子産の砂岩で造られ、隠れる面に残る鑿痕は五輪塔と同じである。塔身には何も彫られてなく、他の部分も飾り彫刻がなく、簡略に造られている。相輪は1点が121には「XX」しるしの線刻がある。笠はすべて欠損し、特に四隅の隅飾突起の欠損が著しい。128が最も原形を保ち、幅26cm、高さ17cmを測る。塔身は欠損が少なく、下部に段が付き、幅が15～17cm、高さが19～23cmである。基礎は2点のほかは破片である。

板碑は板石塔婆(いたいしとうば)とも呼ばれ、供養塔の一種で鎌倉時代から室町時代の中世に、全国的に多数造立された。主に偏平に割れる緑泥片岩を使った青石塔婆と呼ばれる武蔵型が原形となり、全国でさまざまな形の板碑が造られた。下総では雲母片岩(筑波石)を使った下総型が知られる。板碑の中央部には仏様を梵字で表した種子(しゅじ)を彫った種子板碑が多く、ほかに真言・題目・月待・庚申待など、目的によってさまざまな板碑がある。

城山遺跡で出土した板碑は、緑泥片岩製の板碑が4点、砂岩製のものが4点、自然石のものが5点あり、下総型はなかった。緑泥片岩製の武蔵型板碑は1点が原形で、阿弥陀如来(あみだによらい)の種子である「キリーク」が彫られ、その下に蓮台があるだけで、上部は山形になってなく、二条線もない。また紀年銘、その他もない簡略で、高さが50cm、幅が20cm、厚さが2.4cmで小形なものである。他の3点は破片で彫刻は見

られない。鏡子産砂岩製の板碑は、上部が山形で二条線はあるが、碑面には種子や紀年銘などの彫刻は全くない。裏面には鑿痕が残り、五輪塔と同じ石工職人が造ったものであろう。このようなところから、他に類例を見ないこの板碑を東総型とした。これには2点、砥石に使われたものがある。自然石の板碑は、飯岡石と呼ばれる飯岡町で産するシルト岩の偏平で大形の楕円礫を、形を整える事なく種子を彫ったものである。このような自然石の板碑は、東北地方に多く分布し、その影響を受けたものか。種子には「キリーク」と勢至菩薩(せいしぼさつ)の「サク」があり、蓮台だけが彫られているものもある。この自然石板碑は、すべて4号水場から出土した。



写真129 城山遺跡出土の宝篋印塔



写真130 城山遺跡出土の板碑



写真131 5号堀の中の石塔

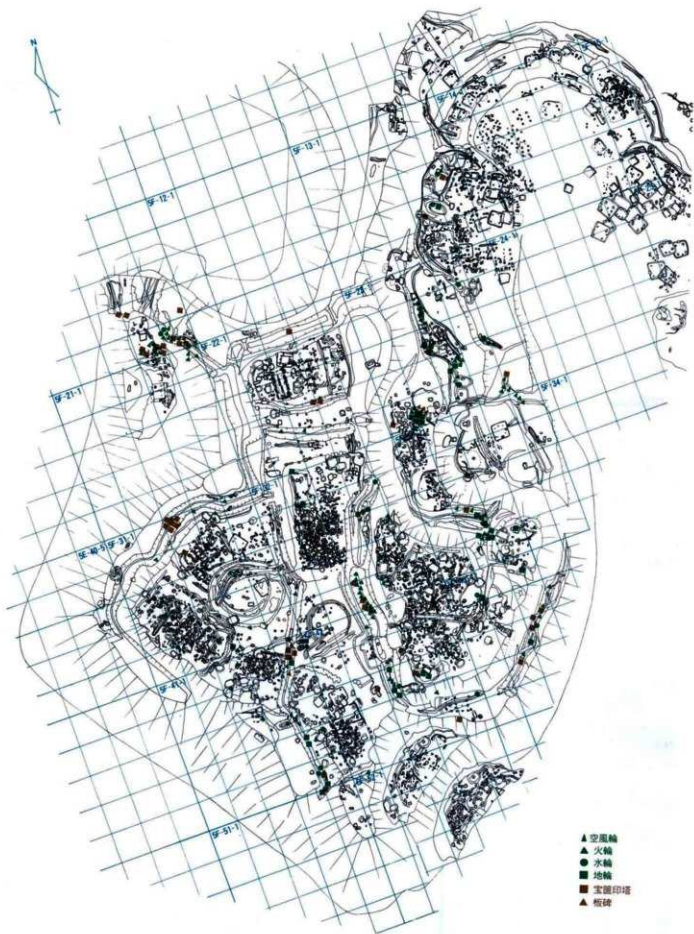


図30 石塔の出土分布

(3) 中世篠本城跡の復元

これまでに発掘調査によって出土した遺構・遺物について述べてきたが、それぞれ個別に触れてきたために、その中からは直接当時の人々の生活なり、城あるいは村の姿が見えてこなかった。そこでここでは個別に説明した遺構・遺物を有機的に捉え、そこから読み取れる情報をもとにして、中世の篠本城とその中で生活した人々の姿を復元していこうと思う。中世という時代は、今からたかだか500~700年前で、そんなに遠い昔でもなく、文書や絵図などの資料も残っていて、原始・古代に比べればよりわかっている。しかし、そのような資料は、京の都や鎌倉など、当時の都市とその周辺について書かれたものが多く、都市から遠く離れた地方についてはほとんどそれらが残っていない。そのため今回の発掘調査で得られた考古資料で中世社会を語らなければならない、多くのところを推定によっている。

中世の遺跡の発掘調査が日本で本格的に始まったのは、戦後10年以上を過ぎた昭和36年に広島県の草戸千軒町遺跡が、また昭和42年には福井県一乗谷朝倉氏遺跡がある。これ以後、各地で多くの中世遺跡が発掘され、暗闇に閉ざされていた中世世界が、次第に光明を照らされ明らかになってきた。草戸千軒町遺跡では中世の市場を中心とする町屋が、一乗谷朝倉氏遺跡では朝倉氏居館跡を中心に戦国城下町の都市が発掘され、当時の町並みとともに多くの陶磁器をはじめとする生活遺物が出土した。それは、武士による封建制で閉ざされた社会と長い戦乱とから連想される、暗い時代であったという従来のイメージとは異なり、瀬戸・常滑などの陶磁器の生産や貿易陶磁や銭貨に代表される産業や貿易の発展、茶の湯や芸能などの新しい文化の創

造など、人々の活動がむしろ活発になった時代であったと考える。

千葉県内でも木更津市真里谷城・笹子城跡などをはじめ多くの中世遺跡が発掘され、文献資料が少ない千葉の中世が次第に明らかになりつつある。しかし中世遺跡を発掘しても、多数の遺構に対して遺物の数量が少ないのがほとんどで、当時の生活まで踏み込んで想像することが難しかった。それに対してここに報告した篠本城跡は、城域のほとんどの遺構を調査することができ、他の遺跡に比較して多くの遺物が出土した。これによって、篠本城という一つの中世城郭の在り方、あるいは中世村落の一つの姿が見えてきたように思われる。その姿をここで、発掘調査で得られた資料から復元して、中世における一地域の社会及び歴史を明らかにしたい。

1) 篠本城跡の構造

中世の篠本城を復元する上で、まず発掘調査で出てきた城山遺跡の遺構から、城郭の構造について見て行くことにしよう。

発掘調査で出てきた城山遺跡の堀や建物跡などの遺構は、長い年月の間に造られたもので、ある一時に造られたものではない。中世に限っても13~15世紀の約300年近く営まれたことが、遺物によって知ることができる。しかし堀に限っては、一部の埋め直しや掘り直しがあるほかは、城が捨てられるまで使われていたことが、発掘によってわかった。堀の説明の項では、堀の形態がそれぞれ異なり、堀が一時期に掘られたのではなく、順次掘って行ったと述べた。それでいながらほとんどの堀は、城が捨てられる時に埋められたことが、その覆土の観察や出土遺物の状態からわかった。そのために堀を見ることによって、城山の盛時における城郭としての構造が推定でき、また堀に仕切られた

区画それぞれのあり方も解明できると考える。

まず城が捨てられる以前に埋められた堀は、1号区画と3号区画の間にある3号堀と、9号区画の中にある14号堀の2条である。3号堀は4号堀を新たに掘ったためと1号区画の拡張のために埋められ、14号堀は必要がなくなったことにより埋められ、そこに47号建物が建てられている。16・17号堀は掘り直しが行われている。それ以外はほとんど



写真132 城山遺跡全景（北側上空から）

ど掘ったときの原形のままであったと考える。これらの堀で最も古いと思われるものが、3・12号堀で、どちらも平面形が直線的でなく蛇行するように走る。それに対して最も新しいものは16号堀で、直線的で堀底仕切りが設けられている。

城山の台地はもともと斜面が急で、頂上部は平坦面が広がり、生活をともにする城としては最適であったと考える。しかし、生活するうえで（籠城するうえで）最も必要となる水の確保が、堀で仕切られるときに重要となったろう。12号堀の最深部には井戸が掘られているが、恐らく水は湧かなかったと思われる。そこで斜面部の湧水部まで行く道筋を考えながら、堀で仕切っていったことだろう。城山遺跡の区画の中で中心となる所は3号区画であろうと前に述べた。ここは台地の中央部にあたり、標高も最も高い。その中の建物跡の柱穴は最も密集して、最も建物が建っていたことがわかる。そこで台地上ではここにまず住みはじめ、これを核にして周りに次々と建て増しされていったものとする。この中心から水を汲みに行くとなると、12号堀を渡って9号区画を通って東側の12号区画まで降りて行かなければならない。3号区画の北には4号堀を越えて1号区画が、南には2号堀を越えて7号区画があり、これらの3区画を結ぶ南北線を中軸線として、城山は対称形のように造られている。この中軸線

を山の稜線と見立てると、城山が山城のように見えてくる。そして両翼に広がる区画は腰曲輪のようなものになると、3号区画と他の区画との地位的な差の関係が理解できる。さらにこの両翼の外側には堀が走り、見張り台も設置している。見張り台は城山の角になる部分に計5箇所あり、それぞれの見張り台に立つと、3方向が見渡すことができ、ほぼ死角がなかったものとする。この見張り台を造ることができた角があったことが、城山の台地の最も良好なところであったかもしれない。

さて城山の中心である3号区画及び他の区画への入り口あるいは道筋は、どのようになっていたものか考



写真133 9号区画北側外郭見張台（北側から）

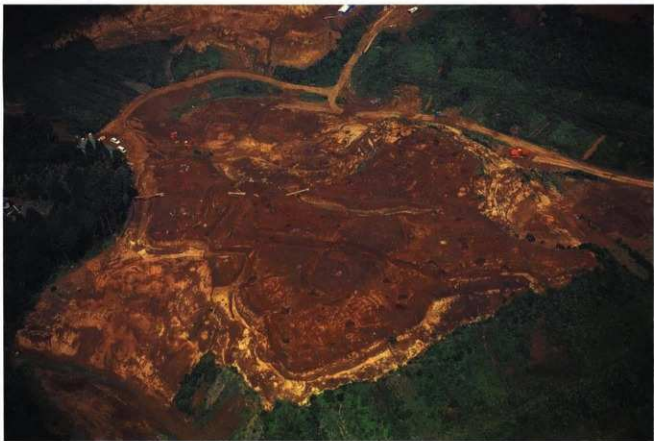


写真134 城山遺跡全景（西側上空から）

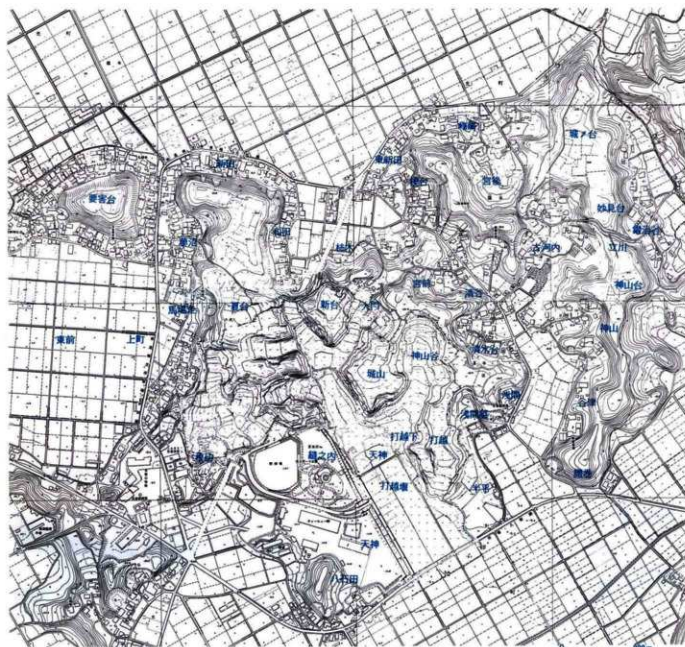


図31 篠本の小字

えて見よう。城山の北側の地名は現在でも大門と呼ばれ、おそらくその入り口である門があったと想像する。そこから城山へ上ってくる道があり、その道を上がり切ると城山の北側の尾根筋に出る。その尾根筋を抜けると城山の手前で1号堀の堀切にあたる。この堀切の手前で城山を見ると、真正面に北に出た1号見張り台が、右手正面に1号区画を見上げることになる。1号堀には土橋がなく、幅が10m、深さが4mもあり、城山はこの堀によって完全に仕切られている。堀には橋を架けた跡はなかったが、多分尾根筋と1号区画との間に木の橋を架けていたものと考え。1号堀の橋を渡って城山のなかに入り、1号区画と見張り台の間を抜けて進むと、次に4号堀にあたる。4号堀は東西両端が貫通してなく土橋のように残っているが、安心して歩くほどの幅がなく、これは堀の仕切りとしての意

味の方があったと考える。4号堀の中央部には橋を架けたと思われる柱穴があり、ここに木の橋を架けていたと考える。4号堀の対岸は地山が高くなっていて、遺構がないところから、土塁が築かれていたと推定する。4号堀を渡り、土塁の間を通過して中心である3号区画に入る。

3号区画に入った所は広場となっているが、墓地とか地下式坑があり、右手を見ると屋根の高い8号建物、奥に平屋で大きい居館のような14号建物がある。この建物の前を通過して12号堀と2号墳との間を抜けると、視野が開けて7号区画に入る。そして右手西側には櫓門があり、橋を渡ると6号区画、5号区画へと行ける。左手には30号建物が12号堀の脇にあり、これは想像をたくましくすると跳ね橋の基部であったかもしれない。中軸線から9号区画へ行くのに、12号堀にはほかに橋

を架けた跡がなく、前にも述べたように水を汲みに行くには9号区画を通らなければならない。9号区画へ渡る施設としては、30号建物以外に考えられない。しかし、その下の12号堀をさらに深くしていたことが理解できない。調査時に作業用としての橋を、3号区画と9号区画北部との間に架けたが、あるいはその場所に、当時も橋を架けていたのかもしれない。

城山の台地上の南部から西部にかけて、堀で区画された4つの区画の屋敷地があり、それぞれに屋敷が立

っていた。東側の9号区画は最も広いが、建物は中心部に大きい屋敷があって、周りに中規模の倉庫らしい建物が配されていた。また全体に地下式坑があり、この区画が食料貯蔵専門の区画であったかも知れない。9号区画の東側には階段があり、そこから降りて南側の8号区画の屋敷地に行くようになっていたと考えられる。また9号区画の中にある14号堀は半分埋められ、北行部を残して10号区画への連絡道に使われていた。その道を降りて行くと、出口の所に木戸門があり、そ

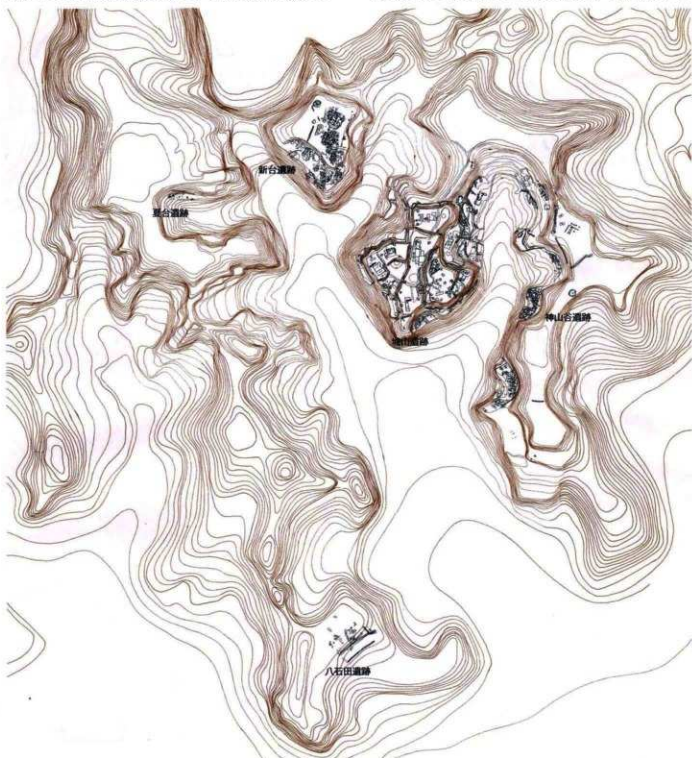


図32 篠本城跡全体図



図33 13世紀の遺構分布



図34 13世紀の城山

の手前の左側にはやぐらのような墓地がある。また右手には5号見張り台があって、ここには建物や地下式坑があった。木戸門を出て17号堀を通過して、10号区画に至る。10号区画は大規模に掘削して平坦部を造り、53号建物の屋敷を建てている。この屋敷の前を降りて水場へ行くことができる。水場のある12号区画の北には斜面部を掘削して造った屋敷地があり、さらに東の神山谷へ連続して行く。

このように城山は、大門から入って来てそれぞれの屋敷地に行くには、中心部の3号区画を通過して行かなければならず、この区画が一つの求心力をもっていたものと考えられる。それはこの区画の屋敷に住まう仮に言う城主と考える人物と、周りの屋敷に住まう仮に言う家臣団との間の関係が、このような構造に現れていたと考える。城山のような屋敷のあり方に似ている城跡として、青森県浪岡城跡を上げることができる。浪岡城跡では大きな堀で区画された曲輪が8つあり、その中の北館ではさらに区画されて屋敷が何軒も建てていた。この遠い東北の城跡と比較することは無謀であるかも知れないが、城の中に多くの屋敷が建ち並んでいたことは共通し、その中に住んだ武士団なり、社会構造に共通性があったかもしれない。

城山を中心とする篠本城跡は、さらに東の神山谷遺跡、南の八石田遺跡、西の新台遺跡、南西の夏台遺跡



写真135 青森県浪岡城跡



写真136 青森県根城跡



図35 14世紀の遺構分布



図36 14世紀の城山



写真137 城山遺跡谷奥部（上空から）

などに広がり、これらの遺跡からは同時代の遺構が発掘調査によって多数見つかった。このように周辺の遺跡の発掘調査でわかったことまで視野を広げて見ると、篠本城跡は中世の村落を包含した大きな城であったことが明らかになった。また篠本城跡は中世の村落から発展して、次第に城へと変貌して行ったと考えられ、その中世村落を見ることによって、城跡がどのように出来上がって行ったかがわかると思う。そこで次の項ではその中世の村落の側面から捉えた篠本城跡を、その変遷と展開を見ながら述べることにしよう。

2) 篠本の中世村落の変遷と展開

篠本の城山に中世に入って人々が住み始めたのは、出土した陶磁器から推定すると、13世紀の鎌倉時代に入ってからであるらしい。その陶磁器の分布から、はじめは城山と神山谷との間の谷津頂に取り付くように、ゆるやかな斜面部を少し削って平らに整地した所（13号区画前面）に、小規模な屋敷を立てて住んだと考える。また台地の上の中央部の3号区画にも同時期に住み始めたらしい。このように当初はまだ堀も掘ってなく、土塁も盛って囲っていない、2〜3軒程度の屋敷と、それに付属する小屋があった程度であったろう。そしてこの時に住んだ人々の墓が、城山北西側の斜面部に造られたものと考えられる。篠本城跡の北側に位置する新善光寺は、鎌倉時代作の仏像を安置することから、この頃には存在していたものと思われる。いや、寺の北西に日吉神社があるところから、その関係で平安時代には創建されていたかもしれない。

14世紀の南北朝から室町時代前期になると、城山の3号区画を中心核にして次第に人々が集住するようになり、4号区画や9号区画の台地上から、8号区画、10・14号区画などの斜面部にまで規模を大きく整地して、屋敷を増加させて行った。またこの頃になると、3号区画を中心にして堀を掘り始め、3号堀や12号堀などの古い形の堀が囲っていたと考える。また9号区

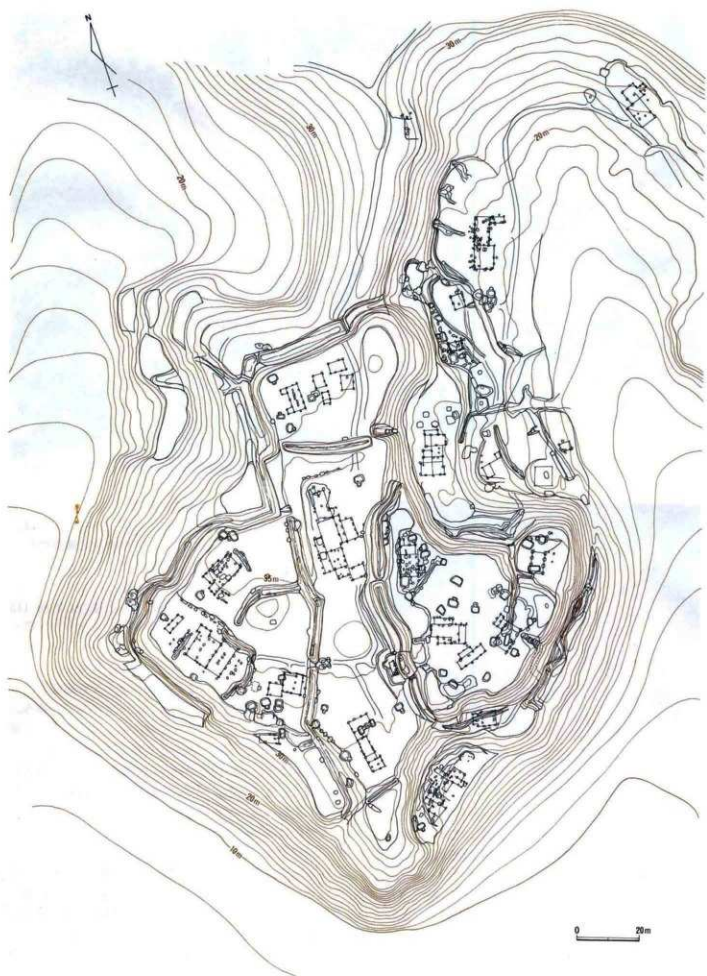


図37 15世紀の遺構分布

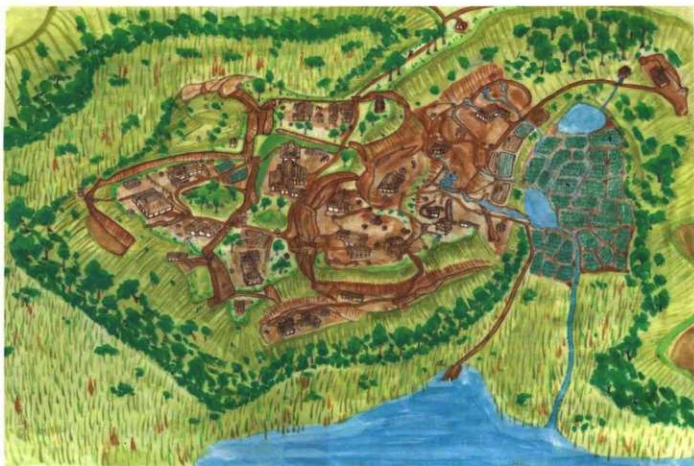


図38 15世紀の城山

画の14号堀もこの頃掘られたと推定する。このようにして、14世紀は人々が徐々にではあるが増加しながら推移し、後半には城山のほとんどの所は屋敷地となり、さらに周辺の山にも屋敷地が広がって、大体の村落ができあがったものと考えられる。

ここで周辺の中世遺跡の概要を見ることにしよう。

城山の東にある神山谷遺跡は城山に向けた斜面部に、掘削整地した屋敷地が5箇所、また台地上には北部に3条の堀に囲まれた屋敷地が1箇所ある。さらに細くくびれた所や台地南端部に墓地群がある。堀は北部だけでなく、南部にも台地を横切るように1条あり、北部の屋敷を守るために掘られたようである。

八石田遺跡は城山の南にあり、昭和63年に発掘調査され、2つの区画に建物跡や地下式坑があり、城山と同じ瀬戸・常滑などの陶磁器が出土した。

城山の西側にある新台遺跡は、城山を一回り小さくした台地に、上部と南側に掘削整地した面とを合わせて6つの区画があり、多数の建物跡や地下式坑を検出した。堀は小規模なものが数mあるだけであった。この新台からは北方に栗山川から多古町方面が眺められ、遠く東禅寺や土橋城跡などもその視野に入る。

城山の西南側にある夏台遺跡には、新台方向から入る小谷の斜面部にわずかに1区画があったのみで、台地上には中世の遺構はなかった。

これ以外の調査しなかった所にも、地表面観察によって台地を掘削整地した跡や屋敷地と思われるところがあり、篠本城を中心としての中世村落はまだ広がるものと考えられる。

15世紀になると城山は少しずつ堀が整備され、半ば頃にはほぼ完成して村落から城らしい姿に変貌したと思われる。上述した周辺の遺跡にも屋敷地が広がり、15世紀前半が篠本城が最も栄えた時期であることが、この頃の陶磁器が最も多いことからうかがえる。

このような中世村落は最近の発掘調査によって各地で発見され、次第にその様相が明らかになりつつある。



写真138 城山遺跡全景（東側から）

3) 中世村落と生活の復元

篠本城跡は13世紀頃に住み初めてから、15世紀に捨てられるまでの約300年の間に、次第に築かれて行った城であることは前に述べたとおりである。それではそのころの人々の暮らしぶりほどのようであったろうか。その暮らしの様子を、検出した遺構と出土した遺物から推定してみることにしよう。

1 屋敷地

東国の中世の屋敷は、未だに地面に柱穴を掘ってそこに柱を立てて建築したものがほとんどで、発掘するとこの柱穴が多数出てくる。この柱穴から屋敷の構造を推定するのであるが、地中に埋めた柱が腐りやすいため、建物の建て替えが頻繁に行われたために、多数の柱穴が出てくるが多く、一つの建物を抽出することが難しい。おまけに中世になると次第に建物は複雑になり、主屋や厨房、それらをつなぐ回廊などがあったと思われる。13世紀の図では、簡単な構造の屋敷にしたが、もう少し付帯した建物があったかもしれない。15世紀になると多くの屋敷は、主屋に厨房、さらに厩もあったと思われる。特に3号区画の城山中心屋敷は、最も規模が大きく、北側に2～3階建ての建物が建っていたと思われる。厨房跡と推定する所は、地面が焼けていて焼土が残り、火を扱った所とわかる。しかし竈のような構築物の跡はなく、おそらく囲炉裏を作って、そこに内耳土鍋をかけてご飯などを炊いたものと思われる。これは西日本では竈に羽釜をかけてご飯を炊き、東日本では囲炉裏に内耳土鍋をかけてご飯を炊いたという大きな傾向の違いがあるという。城山では羽釜は全く出土しなかったことから、竈はなかったと考える。

それぞれの区画の屋敷の前には、広場あるいは庭らしい空間はほとんど無く、狭い台地の中で必要最低限のものを備えて、生活していたものと考ええる。その中でも茶の湯を嗜むという、可能な限りの余裕もあったのであろう。

2 水と水場

人間の生活にとって、水は最も重要なもののひとつである。城山や神山谷の台地の裾には、何箇所もの湧水があって、豊富に水が湧いていた。そのような湧水を古代・中世にも利用したのと考えて1箇所調査したが、当時利用した痕跡は見つからなかった。しかし発掘調査によって台地斜面部から井戸や水場を多数検出し、当時から湧水利用でなく、積極的に水を得るための施設を作っていたことが明らかになった。特に12号区画の井戸・水場群の一連の遺構は、飲料水を得るだけでなく、洗い場としても多く使われ、当時の暮らしの担い手でもあった城山の主婦たちの社交の場としても重要であったろう。最後にこの城を捨てるとき

に、この水場に和鏡と花瓶を埋納したことは、その当時の思いを知らされる気がする。

3 食べ物

水の次に重要なものが食べ物である。城山でも6号区画から炭化したお米が、また地下式坑や斜面部から貝殻が出土したが、中世ではお米はもちろんのこと、五穀や野菜、魚介類や動物も食べていたという。それらをどのように調理して食べたかという点、文献や絵図から明らかになっている。篠本では遺物から見ると、片口鉢（こね鉢）や石鉢が多く、これらは味噌作りに使ったのではないかとと思われる。味噌作りは中世に急速に広まったと言われ、特に戦時の兵糧食として最適



写真139 炭化米の出土状況 (5号区画で)



写真140 3号区画の囲炉裏跡



図39 城山のおかみさんたちの井戸端会議

であったのだろう。そしてこの味噌作りに使われた遺構が、地下式坑であったとの推定は、前に述べた。城山で出土した貝類は、ダンペイキサゴ・チョウセンハマグリの今日でも九十九里浜で取れるもののほか、タニシ・カラスガイ・イシガイなどの淡水棲のものもあり、身近なものを取っていたらしい。貝殻の中には魚や動物の骨は混じっていなかった。

4 茶の湯

何度も述べてきたが、城山からは天目茶碗や茶壺、茶臼などの多くの茶道具が出土し、また西隣の新台遺跡からは茶入が出土し、中世の篠本の人々がよく茶の湯を嗜んでいたことが、これらから推定できる。また城山では天目茶碗よりも、青磁碗や瀬戸平碗などが多く、黒物の茶碗よりも青物の茶碗を好んでいたようである。他の遺跡では茶碗として天目茶碗が多く出土する。これも趣味の違いであろうか。そう思いながら中国製の天目茶碗（破片であるが）が出土したことは、個人的趣味と公的な物を使い分けていたことが推定される、おもしろい資料である。

5 化粧

衣服は出土しなかったが、篠本の人々もおしゃれであったことが、いくつかの遺物からわかった。和鏡は宗教的な呪いや仏様（御正体）・御神体に使われたこともあるが、基本的には顔を移す道具として使われたものと思う。城山では和鏡のほかにも小形鏡と思われる物も出土している。中世では特に武士としての男子の身だしなみが問われたこともあり、その道具として笄（こうがい）がある。それに対して女性の化粧道具として紅血がある。また鉄漿（御歯黒）はどちらがつけたかわからないが、容器の瀬戸と常滑の小形壺が計2点出土している。

6 宗教と生死観

その当時に書かれた文書が残っていないと、その当時の人々が何を考え、何を思っていたかなどの精神的な文化はなかなか理解することができないが、発掘で出て来た遺物や遺構によっても、辛うじてうかがい知ることができることもある。城山では墨書したカワラケが2点出土した。一つには「妙胤」と、また一つには「禪林」と書かれていた。これらの字句から推すと仏教と関連するようである。「妙胤」の妙の字は法華経の題目の1字であり、日蓮宗と関係があるようであり、胤の字は千葉氏族の名に使われる1字である。「禪林」はこの2字で禪宗の象徴的な字句である。このように1遺跡から宗派のこととなると考える墨書を見る、宗教の変化に対する当時の人々の心の揺れを推定することができる。城山の北に位置する新善光寺は今日真言宗に属しているが、西側に日吉神社があるところから、創建時は天台宗であったようである。また中世には一



写真141 斜面部の貝殻出土 (9号区画 5F-33-11付近)



写真142 篠本城跡出土の茶道具3点



写真143 城山遺跡出土の化粧道具



図40 餓鬼草紙に見る中世のお墓 (写し)

時浄土真宗がはやり、一揆が頻発したこともあり、篠本でも昔一揆があって、その後1寺1宗派とされたという伝承がある。この地域でも宗教が心のより所として、時とともに変わって行ったと考える。

仏教と深く結び付いた物として人々の死生観がある。今日では当たり前のようにお寺の裏にはお墓がある。しかしいつ頃からお寺にお墓を作るようになったのであろうか。京都ではお墓の近くに堂を建て死者を供養したことから始まったようであり、千葉県佐倉市高岡遺跡群では寺跡とともに多くの墓坑があった。おそらく中世ころからであろうか、江戸時代になると檀家制度によって、お寺にお墓が作られることが定着した。城山では墓坑が29基あった。また周辺の遺跡でも確実に墓坑とされるものは計20基程度である。これだけでは篠本城で死んだ人全てから比較すると到底足りない。城山では墓域以外では屋敷地の周りに、長老的な人と子供が埋葬されていた。それでは多くの人はどこへ葬られたのであろうか。中世に書かれた餓鬼草紙では、露天に放置する風葬が描かれている。その一方では中世には供養塔が盛んに建てられ、城山でも多くの五輪塔、宝篋印塔、板碑が出土した。しかしこの供養塔の中に逆修という自分の死後を供養するという、個人本位的、現世利益的な現実主義が当時の人々にあったのではなかろうか。

中世の経済発展に伴って、人々が精神的・物質的な

余裕が生まれると同時に、心の荒廃に伴って宗教に頼ろうとする姿は、今日にも重ね合わせて見ることははしないだろうか

4) 陶磁器に見る中世の流通

城山では遠く中国から輸入された青磁・白磁から、地元で焼かれたカワラケや内耳鍋など、多くの焼き物が出土した。これらの中には瀬戸や常滑など産地や製作年代がわかる陶磁器もあり、いつ頃、どこから運ばれたか推定することによって、中世の商品流通経済を読み取ることができる。

1 貿易陶磁

海外から輸入された陶磁器は貿易陶磁と呼ばれ、中世日本には中国のほか、朝鮮・安南（ベトナム）・宋胡録（タイ）などが入って来ていた。中でも中国は当時遠くヨーロッパまで輸出された、世界的な陶磁器生産国であった。特に宋代から明代（11～15世紀）には青磁と白磁が、また明代から清代初期（16～17世紀）には青花と呼ばれる染付磁器が、日本人に好まれて大量に輸入された。このほか青白磁・天目茶碗・褐釉陶器なども一緒に輸入されている。これらの陶磁器は産地（窯場）によって作られるものが異なり、青磁は福建省同安窯や浙江省龍泉窯、白磁は河北省定窯、白磁と青白磁・染付は江西省景德鎮窯、天目茶碗は福建省建窯などが有名で、日本への輸出品を多く生産した窯場



図41 12～15世紀の中国の陶磁器生産地と貿易港

は南部の港に近いところに多い。また貿易が盛になると、日本からの注文で特別品を生産したり、修理に陶磁器を中国へ送り返したという話もある。そしてこの輸出品だけでは需要が間に合わないために、それを補うように発展したのが日本国内で唯一施釉陶器を生産したのが瀬戸である。貿易陶磁は船でそのまま輸送されたために、日本海側に多く流通し、太平洋側はあまり多く流通しなかった。青森県市浦村の安東氏の貿易港であった十三湊では、大量の中国陶磁が出土した。

2 国産陶磁器

国産陶磁器は、縄文時代以来の土器作りに加えて、古墳時代になると韓半島から来た人達によって、須恵器生産がもたらされ、奈良時代には中国から三彩や緑釉などの施釉陶器が伝わって、これの模倣が国内でも作られた。須恵器は初めは大阪府泉地方で焼かれていたが、やがて全国にその製法が広がり、主に東海地方の泉投や湖西で多く生産され、この2産地のものは関東地方に多く流通した。平安時代後期になるとこれら須恵器産地が衰退して、瀬戸や常滑・瀬美などに産地が移り、またこれらの製品は須恵器と異なって、施釉陶器や焼き締め陶器などの瓷器と呼ばれる陶器になった。これが中世陶器である。一方では、須恵器生産の伝統が残った珠洲や備前などの中世陶器も発展した。中世陶器産地はこのほか、丹波・信楽・神出・越前・飯坂など、各地に広がって行った。

瀬戸は平安時代後期（12世紀頃）に生産を始め、室町時代（15世紀前半）まで密窯と呼ばれるトンネル状の窯で焼いたところから、この間に焼かれたものを古瀬戸と呼ぶこともある。前期・中期・後期の3期様式に大きく分けられ、中期（14世紀前半）には中国陶磁を模倣した物や独自に考案された物などさまざまな陶器が作られている。これら瀬戸製品は中国陶磁がなかなか流通しない太平洋側の東日本に供給され、主に常滑製品と一緒に船便で運ばれたと考えられている。中



写真144 青森県十三湊遺跡

には茶壺のように茶葉を中に詰め、その容器として運ばれたかもしれない。15世紀後半になると窯が密窯から大窯と呼ばれるより多く焼ける窯に変わり、それで焼かれる製品もより質のいい物に向上していった。城山では中期様式からあり、後期様式が最も多く、大窯I期が少し残る。

常滑も瀬戸と同じところに生産が始まり、今日まで続くのは同じであるが、こちらは無釉で大甕などの大形で頑丈なものが多いという、瀬戸とは異なるものを生産するという棲み分けを行ったことが、成功の鍵であろう。常滑の大甕は胴径・高さとも70～80cmもあり、陸路を運ぶよりは船で海路を運んだ方が効率的であっ



図42 中世日本の陶磁器生産地と港（淡・津）

たろう。瀬戸・常滑の両生産地の近くには、伊勢湾を挟んで中世の3津の一つと言われる安濃津があり、そこを集散地として瀬戸・常滑製品が各地に運ばれたことが推定されている(伊藤裕偉1998)。

このように瀬戸・常滑製品や貿易陶磁などから、中世では船を使っての物資輸送が主であったと考えられ、城山の周辺でも水上輸送の拠点があつたと推定されている(遠山成一1996)。城山の北から西には栗山川が流れ、太平洋に注いでいる。栗山川は今日でも川幅10m程の小さな川で、中世も変わらなかったと考え、太平洋を渡る外洋船では川を溯れなかったと思われる。そこで河口に港を設け、そこで荷を小船に積み替えて篠本まで溯って来たものか。栗山川の河口付近ではまだ中世遺跡は発見されていないが、光町木戸に不動院という中世以来の寺院があり、それを中心とした港(津)があつたとも推定できる。

貿易陶磁や瀬戸・常滑のように遠く離れた産地で生産された陶磁器に対して、土師質土器は原料の粘土は地元で取れ、簡単な設備で焼けることから、地元で生産されたものと考えられているが、未だにその生産地は発見されていない。これら土器の胎土には粘土と砂だけでなく、花崗岩を磨り潰したものが混ざり、強度を高めている。また内耳土鍋は遺跡を越えて形がある程度画一化していて、胎土と形から地域の専業工人が作ったものと推定される。城山で出土した浅い内耳土鍋は現在の利根川下流域を挟んだ地域に分布し、花崗岩は茨城県中央部に産する事から、その間に生産地を求め、あるいは専業工人が地域を巡回して作って廻ったか、さらに検討が必要である。

瓦質土器は、須恵器生産から変化して、燻べ焼きして作られるようになった焼き物である。主な産地は大府牧方市の樟葉と奈良で、前者は香炉を、後者は火鉢を生産して、住み分けていたようである。消費地は畿内が中心であるが、関東にも京物として運ばれて来た。また関東でもこれらの瓦質土器をまねて、粗雑な物が作られている。

5) 歴史的背景

これまでに篠本城跡の中にある城山遺跡を発掘調査して出て来た遺構・遺物から、その中世についてさまざまな面を述べて来たが、中世の成果の終わりに篠本城跡の歴史的な面について触れよう。

中世の篠本は、下総国香取郡千田庄篠本郷と呼ばれ、千田庄は千葉氏の支配するところで、千葉氏が本家・分家で争った所でもあるが、文献資料が少なく、神奈川県金沢文庫でわずかに散見できる程度である。

篠本城跡の初めと終わりについては、出土陶磁器から13世紀から15世紀までに取まることは前に述べた。

初めの13世紀という鎌倉時代である。千田庄は平安時代末期は平家方日代藤原親政が支配していたが、源頼朝が挙兵したとき、千葉常胤が頼朝を支持して親政を討った。鎌倉開幕後に千葉氏領となり、特にこれを支配したものが千田太郎と呼ばれた。また千葉氏は九州肥前の小城にも領地を得、これとよく往復したと言われる。その中で篠本城の城主について、その元は九州から加瀬某が来て城を造つたという伝承が地元であり、この加瀬某が千葉氏に従って九州小城から来たことが考えられる。その時期が鎌倉時代13世紀ころだとすれば、遺物からも年代が一致する。この加瀬某が篠本に土着し篠本氏となり、千葉氏に代々仕えるようになったと思われる。

鎌倉幕府の滅亡と南北朝の動乱期に、千田庄でもある事件が起こった。これより前の九州に行っていた千葉介頼胤が小城で死に、その長子宗胤が跡を継いだのが早逝し、その子の胤貞が継ぐところを、宗胤の弟胤宗の長子貞胤が千葉介を継いだ(1312年)。これが胤貞と胤宗との対立を生み、建武2年(1335年)に足利尊氏が建武政府に反旗を翻した時、新田義貞側に胤貞が付き、胤貞が尊氏に付いた。そして胤貞が留守のときに胤宗は千葉城を襲った。それに対して胤宗方の守護使が胤貞方の千田庄に乱入している。次いで胤貞は嫡子の胤平に肥前小城、下総千田・八幡庄知行分の惣領職を譲ったが、その後胤貞の養子胤泰が小城を、末子胤継が千田・八幡を継いだために、胤平の子の胤龍が、千葉介に付いて反乱を起こした(1336年)。この時に千葉介方に付いて千田方の土橋城や東禅寺を攻めたものの中に、「竹元(さきもとと説わか)氏」がいたと金沢文庫文書にある。この乱で千田方は滅び、胤泰は小城に土着して九州千葉氏となり、千田庄は千葉介の支配となった。

それから約百年後の応永(1416年)から永正(1517年)にかけて、千葉氏をも巻き込む乱が関東全域にわたって起こった。はじめは鎌倉公方と関東管領の間の争い(上杉禪秀の乱、永享の乱)であったが、次第に



写真145 多古町志摩城跡

高望——良文——忠頼——将恒

忠常（子兼）——常将——常永——常時——常澄（上總介）——広常

常兼（下總介・千葉介）
 常重（白井六郎）
 常康（籠名五郎）
 常廣（距離八郎）

常胤
 （籠名五郎）
 風光
 ……
 （距離南条地頭）
 風高

胤正
 常秀
 秀胤

胤常
 成胤
 時胤
 頼胤

胤盛
 胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資
 胤紹

胤信
 胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤通
 胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤頼
 重胤
 胤行
 行氏
 時常
 常顕
 師氏
 胤綱
 胤常
 胤和
 胤氏
 胤盛
 胤数
 胤常
 胤尚
 胤常

氏胤（千葉介）
 満胤
 兼胤
 胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資
 胤紹
 胤頼
 （千田氏）

胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

胤直
 胤将
 胤宣
 胤胤
 胤朝
 胤資

図43 千葉氏系図と一族抗争

関東各地の大名をも巻き込み、享徳3年(1454年)に起きた乱では、幕府・管領方の千葉宗家の胤直が、公方方に付いた庶家馬加康胤・孝胤親子に討たれた。この時胤直は子の胤直、弟の賢胤を率いて千田庄まで逃れ、志摩城と多古城で康胤らを迎え討つが、敗れて胤直・賢胤らは東禅寺で、胤直は多古城近くで自刃したという。この後、賢胤の子実胤・自胤は武蔵赤塚城に拠り、武蔵千葉氏となり、孝胤が千葉宗家を継ぎ、本佐倉城に移った。この千田庄での千葉氏の内乱では、篠本(竹元)氏は文献上では出て来ず、その動向は不明である。しかし発掘調査で得られた成果から見ると、15世紀後半まで続いたものの、16世紀までは続かずに廃城になったものとする。おそらく享徳の乱の時に千葉宗家が滅ぶまでは、その侍所(家老職)として栄えたが、千葉宗家滅亡時に運命をともにしなかったものの、その後の後継には付かず引退して行ったものと推定する。そして16世紀になるころに篠本城を捨て、どこかへ立ち去ったものとする。その後篠本は後継宗家に付いた匠璣権名党の一族が、北の寒風城を築いて領有したらしい。

千葉氏はこの内乱を経て、古河公方に付いた孝胤が宗家を継いだ。庶家・分家が多く立って領地を取り合い、急速に勢力を失っていった。また16世紀になると、南は里実氏、西からは後北条氏・上杉氏らの戦国大名に領地を侵蝕され、最後には北条氏の家臣に組み込まれ、豊臣秀吉の小田原攻めで北条氏と運命をともにした。

此間無便直、不令申入候之条恐入候、抑千田孫太郎殿
 子息瀧桶殿千葉介殿と一味同心、可落大嶋之由、依被
 申下候、竹元と岩部中務□□合力仕候、竹元も
 去月廿一日大原へ付候て國中軍勢を集候、雖然候けハ
 しき合戦ハ未遂候

金沢文庫断簡

以上、篠本城を巡る歴史的背景について、多くの研究者が採集した文献と論考、また地元に残る伝承などを元にわかる限り述べてきた。篠本城跡は千葉でも東の端の方に在り、歴史上あまり知られない存在であるが、千葉氏と深く係わり、重要な位置にあったことが次第に明らかになってきた。そしてそれは発掘調査によって出て来た、多くの遺構・遺物が何を物語っているかが、明確に示している。篠本城跡について、シンポジウムや視察などを通して、多くの研究者にさまざまな意見を伺って、ある程度その実相が明らかになって来たと思う。

<参考文献>

- 千葉市史編纂委員会(1976)千葉市史 史料編1 千葉市
 橋崎章一編(1977)世界陶磁全集3 日本中世 小学館
 長谷部楽爾編(1977)世界陶磁全集12 宋 小学館
 藤岡一・長谷部楽爾編(1977)世界陶磁全集14 明 小学館
 泉 敏夫他(1980)日本石仏事典 庚申懇話会編 雄山閣
 大木衛・小笠原清編(1980)日本城郭大系 第6巻 千葉県・神奈川県 新人物往来社
 森田 勉(1982)14~16世紀の白磁の分類と編年 貿易陶磁研究No.2 日本貿易陶磁研究会
 上田秀夫(1982)14~16世紀の青磁の分類について 貿易陶磁研究No.2 日本貿易陶磁研究会
 八日市場市史編さん委員会(1982)八日市場市史 上巻 八日市場市
 千野原靖方(1984)南北朝の動乱と千葉氏 叢書房
 山崎貞幹編(1986)八日市場城と城主 八日市場歴史研究会
 工藤清泰(1988)北日本・浪岡城戦国城館の中世遺物 東国土器研究第1号 東国土器研究会
 新井和之(1989)千葉東匠璣郡光町八石田遺跡発掘調査報告書 光町八石田遺跡調査会
 塚田順正編(1990)小田原城とその城下 小田原市菅谷通保(1990)「地下式坑」の系列と変遷 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡 東京大学文学部
 津田芳男(1990)神田山第三遺跡 桂遺跡群発掘調査報告書 長生郡市文化財センター
 浅野晴樹(1991)東国における中世在地系土器について -主に関東を中心にして- 国立歴史民俗博物館研究報告第31集 国立歴史民俗博物館
 石井 進編(1991)帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 考古学と中世史研究 名著出版

峰岸純夫編 (1991) 争点日本の歴史4 中世編 新人物往来社

比田井克仁・工藤敏久 (1991) 中野城山居館跡発掘調査報告書 中野城山遺跡調査会

笹生 衛 (1991) 房総の中世土器様相について 史館第23号 史館同人

青木 豊 (1992) 和鏡の文化史 水鏡から魔鏡まで 刀水書房

井上喜久男 (1992) 尾張陶磁 ニュー・サイエンス社

林田利行 (1992) 駒井野荒追遺跡 印旛郡市文化財センター

千田嘉博・小島道裕・前川要 (1993) 城館調査ハンドブック 新人物往来社

谷口 榮編 (1993) 特別展下町・中世再発見 葛飾区郷土と天文の博物館

鳴田浩司・土屋潤一郎・大野康男・笹生衛・井上哲朗 (1994) 房総考古学ライブラリー8 歴史時代(2) 千葉県文化財センター

小野正敏編 (1994) 国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書5 日本出土の貿易陶磁 東日本編1・2 国立歴史民俗博物館

柴田龍司 (1994) 村落型城郭から都市型城郭へ 千葉城郭研究第3号 千葉城郭研究会

永井久美男編 (1994) 中世の出土銭—出土銭の調査と分類— 兵庫埋蔵銭調査会

井上哲朗 (1994) 印西町小林城跡 千葉県文化財センター

中野修秀 (1994) 田向城跡 山武郡市文化財センター

柴田龍司 (1995) 中世城館の構造とその変遷—千葉県内の発掘成果を通して— 研究紀要16 千葉県文化財センター

井上哲朗 (1995) 房総における中世城郭の築城から廃城—印西町小林城跡の発掘調査から— 研究紀要16 千葉県文化財センター

笹生 衛 (1995) 東国における中世墓地の諸相—房総の事例を中心にして— 研究紀要16 千葉県文化財センター

永原慶二編 (1995) 常滑焼と中世社会 小学館

長谷部楽爾・今井敦 (1995) 中国の陶磁12 日本出土の中国陶磁 平凡社

伊藤一男 (1995) 坂田城跡総合調査報告書<史料調査> 上総井田文書 横芝町教育委員会

工藤清泰 (1995) 第4章中世・近世 新編弘前市史資料編1-1 (考古編) 弘前市

榊原滋高 (1996) 十三湊遺跡—市浦村第1次・第2次発掘調査概報— 青森県市浦村教育委員会

遠山成一 (1996) 中世房総水運史に関する一考察—舟戸・船津地名をめぐって— 千葉城郭研究第4号 千葉城郭研究会

根津美術館学芸部編 (1996) 甕の鎌倉—遺跡発掘の成果と伝世の名品 根津美術館

藤澤良祐他 (1996) 古瀬戸をめぐる中世陶器の世界 瀬戸市埋蔵文化財センター

高崎市史編さん委員会編 (1996) 高崎市史 資料編3 中世I 高崎市

小野正敏 (1997) 戦国城下町の考古学 講談社

小野正敏 (1997) 城下町、館・屋敷の空間と権力表現 国立歴史民俗博物館研究報告第74集

前川要・大平愛子編 (1997) 江馬氏城館跡III 富山大学人文学部考古学教室

築瀬裕一 (1997) 千葉市高品城跡I 千葉市文化財調査協会

小野正敏 (1998) 八王子城御主殿の建物と陶磁器 八王子市郷土資料館研究紀要「八王子の歴史と文化」第10号

椎名幸一・遠山成一 (1998) 匝瑳郡南条篠本郷の城館跡について 千葉城郭研究第5号 千葉城郭研究会

遠山成一 (1998) 建武期千田庄動乱の再検討—下総国における南北朝内乱の展開をめぐって— 千葉史学第33号

鳥居和郎編 (1998) 発掘品から見る関東の戦国文化—後北条氏関連新出土資料を中心として— 神奈川県歴史博物館

国立歴史民俗博物館編 (1998) 陶磁器の文化史

国立歴史民俗博物館編 (1998) 企画展示 幻の中世都市十三湊—海から見た北の中世—

水村伸行・宮永一美編 (1998) 記念巡回展 越前朝倉氏・一乗谷 眠りからさめたる戦国の城下町 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

千葉県史料研究財団編 (1998) 千葉県の歴史 資料編中世1 (考古資料) 千葉県

前川要・榊原滋高 (1998) 十三湊遺跡—第77次発掘調査報告書— 青森県市浦村教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室

津田芳男 (1998) 企画展 中世の風景—甕の人々の生活— 茂原市立美術館・郷土資料館

久保智康 (1999) 日本の美術394 中世・近世の鏡 文化庁 至文堂

笹生 衛 (1999) 東国中世村落の景観変化と画期—西上総、周東・周西郡内の事例を中心にして— 千葉県史研究第7号 千葉県

5. 江戸時代（近世）

篠本では中世末期から近世初期（安土・桃山時代）の16世紀は寒風城の方に中心が移ったと思われ、篠本城跡の方には人影の痕跡が消えてしまう。そして江戸時代になると少しずつ人々が戻ってくるが、もう住むことはなくなり、山仕事や畑仕事にくるぐらいになってしまった。

（1）遺構について

1) 炭焼き窯

山仕事は炭焼きが主な作業とし、その窯跡が残されている。炭焼きは今日では地上に大きい窯を築いて大量に焼く方式が多いが、遺跡に残されていた江戸時代の炭焼き窯は地面に方形の穴を掘り、そこに火の通りが良いように溝を十字に切ったものである。底に種火をつけて原木を入れ、伏せ焼きの方法で焼いたものと思われる。最近でも山梨県のあるところで、この方法で炭焼きをしているのを見たことがある。城山ではこのような炭焼き窯が8基あり、これらの覆土の上部には富士山宝永噴火（1707年）の火山灰が堆積していたところから、17世紀ころのものであると考えられる。

9号区画にも宝永火山灰が堆積しているのが確認でき、その堆積状態が波状になっていたことから、この辺りで畑を作って耕作をしていたかもしれない。

2) 小屋跡

炭焼きや畑作のために作り小屋があったと考えられ、その跡らしい遺構が2基検出した。2基とも2×3mほどで、小屋程度のものであったと考える。

そのほかに墓坑が1基、2号区画D小区画にあり、脚部の骨と六道銭が出土した。江戸時代でも墓地とするところは、中世と変わらない事を示している。

（2）遺物について

1) 陶磁器

江戸時代の陶磁器は、瀬戸や常滑だけでなく、北九州の肥前系と呼ばれる有田や唐津などで磁器も生産するようになり、全国的に陶磁器生産が拡大した。城山では17世紀代は瀬戸・美濃の陶器が多いが、18世紀代になると肥前系の染付や色絵の磁器が増える。そのほか堺の播鉢や、関東で生産した陶器、瓦質土器などもあり、各地の陶磁器が出土した。これらの陶磁器は塵



写真146 6号炭焼窯（西側から）



写真147 1号近世小屋跡



写真148 城山遺跡出土の近世陶磁器



写真149 城山遺跡出土の銭貨・煙管・懐中鏡

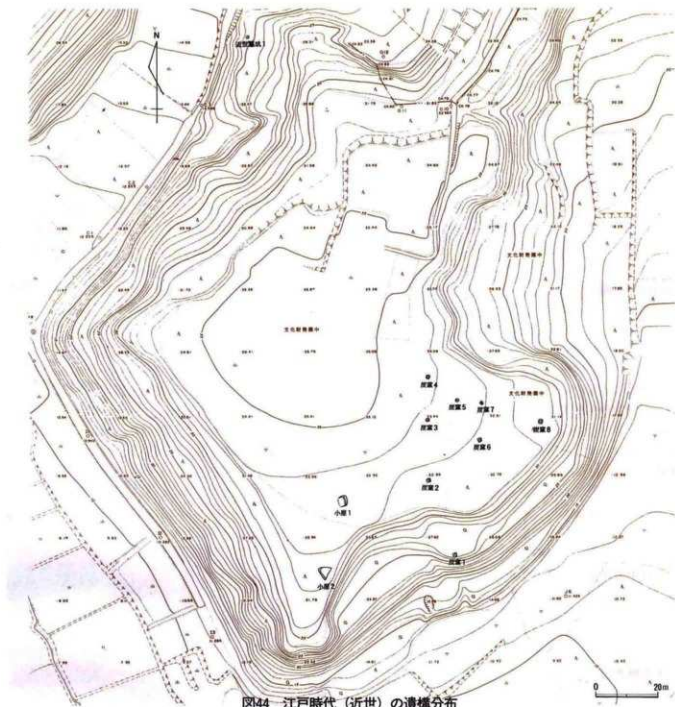


図44 江戸時代(近世)の遺構分布

芥と一緒に、城山に捨てられたものか。

2) 金属製品

炭焼きの山仕事や畑仕事の合間に、江戸時代の人々は煙草を吸ったらしい。城山からは煙管が何点か出土している。煙管には煙草を詰めて火をつける雁首と、煙を吸う吸い口と、その間をつなぐ竹管とからなり、ほとんどは銅製か真鍮製の雁首と吸い口だけが別々に出てくる。城山で出土したものは雁首の首が細く、煙草を詰める部分が大いものや、吸い口が六角になったものなど、さまざまな形のものがある。

また女性の化粧道具のひとつである小形の鏡(懐中鏡)が出土している。また子供のおもちゃである泥面子が2点出土した。

3) 銭貨

城山では江戸時代の銭貨が27点出土した。すべて銅銭で、江戸時代を通じて鋳造された寛永通寶が25点、幕末に鋳造された文久永寶が2点である。

以上、遺物から見ると江戸時代の初期から末期までを通して、城山に人々が細々とではあるが、足を運んでいたことがわかる。

<参考文献>

小林 克他(1996)企画展 掘り出された都市 — 江戸・長崎・アムステルダム・ロンドン・ニューヨーク — 東京都江戸東京博物館

III. 発掘調査の諸記録とまとめ

1. 発掘調査と整理の記録

(1) 発掘調査

篠本城跡を含むひかり工業団地事業地内の発掘調査は、平成5年1月神山谷いせきの確認調査を皮切りに開始し、平成10年3月に新台遺跡の本調査が終了して、現地作業が終わった。その間5年間にわたり4遺跡、約11万㎡の発掘調査をした結果、本書を見るごとく旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の原始・古代から、中世の大規模な城郭遺構まで、数多くの遺構・遺物が出土し、それらは皆この地域でこれまでに見られないような貴重なものであった。そしてそれら貴重な遺構・遺物を順次公開するべく、現地説明会を開いたり、学校の見学などを受け入れたり、新聞や関係書で発表したりしてきた。また多くの専門研究者の視察も受け、その重要性が指摘された。その記録を城山遺跡に限って、たどってみることにする。

また、発掘調査では後述するように、多くの調査補助員が活躍し、夏の暑い日も、冬の寒風が吹きすさぶ日も、負けずに作業を進めていただいた。本文化財センター所属の調査補助員約100名だけでなく、あるときは香取都市文化財センター所属の調査補助員にも応援に来ていただき、お陰で深い堀や地下式坑などをすべて発掘することができた。また、補助員の中から記録担当に、専従で多くの実測図を描いていただいた。調査補助員皆様の、多くの労苦をここに報いることができ、大変感謝致します。

平成5年1月の発掘調査開始に先立って、前年12月に現地の踏査や、調査可能地の下調べなどの、調査の準備を始めた。ひかり工業団地事業地内は開始時で8割程度の用地買収がすすんでいたが、管理されない山林が多く、畑地であった所は耕作をやめて久しいところが多く、人の侵入を拒むほど荒れていた。そのために荒れ地の草刈りから作業を始め、また山林の開発許可がまだおいていないため、木の伐採は後回しにしながら、同時にセンターで林地開発の許可を取り、調査区域の確保をして行った。これら草刈りと木の伐採とによって、斜面部に掘削整地跡が多数あることが分かり、調査区域の再検討をしていった。

年度が変わって平成5年4月からは、本格的に調査を拡大して、城山遺跡の方に確認調査を移した。そして調査区域の確保や作業上の行程などの事情から、城山遺跡を確認調査から本調査に移行していった。城山

遺跡の本調査は台地中央部から開始し、平成5年度は台地上のほぼ西半分が終了した。この時点で、多くの中世遺構が現れ、ただならぬ城跡であることが次第に分かってきた。

平成6年4月からは、台地上の東から台地周囲の斜面部に調査範囲を移して行った。そして城跡の遺構がある程度出た5月中旬の14日に、第1回の現地説明会を開いた。事前に新聞発表したこともあって、当日は千人近くの人々が見学に訪れ、中世依頼のにぎわいを見せた。12月16日には印旛都市文化財センターの調査補助員が見学に訪れる。平成7年1月22日には、千葉県遺跡調査発表会で篠本城跡の発表をする。

平成7年4月からは城山東側の斜面部から谷部にかけて調査をし、この一部から縄文早期の遺物包含層を検出し、これまでに見られない土器が多数出土した。この年も現地説明会を実施し、5月23日から6月3日までの間の4日間を充てて開いた。そして10月14～15日には、篠本城跡の謎を解明しようという目的で、光町民会館を会場にして、シンポジウムを開き、多くの参加者があり、改めて関心の高さを知らされた。発掘調査の方は城山の台地上の上層調査が完了して、下層の確認調査をしたが、旧石器時代の遺物は出土しなかつた。



写真150 城山遺跡斜面部の確認調査



写真151 平成5年度の発掘調査



写真152 堀の発掘作業（5号堀）



写真153 平成7年度の発掘調査



写真154 斜面部の発掘調査（9・10号区画）



写真155 発掘調査が進む篠本遺跡群

った。その後、城山周辺の調査は一旦中断して、発掘の主力を東隣の神山谷遺跡に移した。残りの城山周辺の調査は平成8年度の後半に再開して、その範囲を終了したが、遺跡は神山谷遺跡に連続していて、さらに発掘は続けられた。

この3年間に上記以外にも、見学・視察に来られた方は多数に上った。また、ご教示もたくさん賜りました。ここに記して感謝とお礼を表します（敬称は略させていただきます）。

国立歴史民俗博物館 小野正敏、信州大学 笹本正治、九州大学 服部英雄、和洋女子大学 寺村光晴、立正大学 池上 悟、国学院大学 谷口康浩、専修大学 土生田純之、(財)福島県文化センター 飯村 均、静岡県菊川町 塚本和弘、同 石川睦美、江戸東京博物館 齋藤慎一、(財)横浜市ふるさと歴史財団 坂本彰、埼玉県立歴史資料館 小野義信、(財)山形県埋蔵文化財センター 伊藤邦弘、同 水戸弘美、茨城県歴史館 斎藤弘道、上山町文化財調査委員会 宮原哲雄、小田原城郭研究会 小笠原 清、千葉城郭研究会 椎名幸一、中世城郭研究会 竹村雅夫、同 藤本正行、同 八巻孝夫、同 浜崎昌夫、古城撮影研究会 逸見仁、九十九里総合文化研究所 伊藤一男、(財)千葉県史料研究財団 滝川恒昭、同 外山信司、同 石橋宏克、千葉県立中央博物館 木村 修、千葉県立佐倉東高等学校 遠山成一、千葉県教育庁文化課 橋本勝雄、同 長沼律朗、(財)千葉県文化財センター 西山太郎、同 谷 旬、同 石田廣美、同 藤崎芳樹、同 柴田龍司、同 笹生 衛、同 小高春雄、同 鳴田浩司、同 井上哲朗、同 蜂屋孝之、(財)君津都市文化財センター 松本 勝、佐倉市役所 高橋健一、(財)印旛郡市文化財センター 高橋 誠、同 林田利行、同 阿部寿彦、同 宇田教司、同 松田富美子、千葉市教育委員会 村田六郎太、(財)千葉市文化財調査協会 築瀬裕一、船橋市教育委員会 栗原薫子、同 道上 文、富里町教育委員会 篠原 正、酒々井町教育委員会 木内達彦、(財)香取郡市文化財センター 原田享二、同 黒沢哲郎、同 佐藤喜一郎、八日市場市教育委員会 藤崎宏道、小見川町教育委員会 平野 功、佐原市教育委員会 吉田博之、茂原市立美術館・郷土資料館 津田芳男、松戸市教育委員会 大森隆志。

千葉県企業庁、同東総建設事務所、同北総建設事務所、(財)千葉県史料研究財団、(財)千葉県文化財センター、(財)香取郡市文化財センター、(財)印旛郡市文化財センター、(財)山武郡市文化財センター、上山町町教育委員会、野栄町郷土史研究会、千葉城郭研究会、中世城郭研究会、野栄町立野田小学校、光町立日吉小学校、同白浜小学校。

(2) 整理作業

発掘調査の整理作業は、現地に事務所を設け、専従の整理補助員をおいて、現地調査と平行しながら進められた。整理は発掘で出土した土器や陶磁器などの遺物の洗浄、注記(遺物1点ごとに出土場所を記載する)をし、選別をして行く。これのできたために現地説明会では、遺物の展示も同時に可能となり、速報展のようにもなった。

整理補助員は、このあと選別した遺物の接合・復元を行い、実測の準備を進めて行った。そして遺物の実測を習得し、城山遺跡から出土した遺物のほとんどを、補助員が実測した。その数は約2,500点に及び、小はガラス小玉から、大は10kgを越える石塔までであった。この実測作業は平成6年から同9年にかけて続いた。実測した図面は、このあと遺跡で書いた遺構実測図とともに、トレース(墨入れ)をして、報告書を作る準備をする。

平成10年には、トレースした図面をまとめて、図版を製作する作業に入る。また遺構の鳥瞰図の作成を始め、補助員にも多くを手掛けてもらう。また、原稿の執筆を進める。こうして平成11年度にこの報告書を刊行する。

このような整理作業には、10数名の整理補助員が携わった。難しい作業を頼んだり、根気のいる作業をこ



写真156 室内の整理作業 (遺物の実測)



写真157 室内の整理作業 (須恵器の復元)

なしたりして、苦勞をかけてしまった。ここにその勞に感謝致します。

2. シンポジウムの記録

平成7年10月14・15日の2日間にわたって、光町民会館を会場にして、発掘調査によって姿を現した篠本城跡を、多くの人々から意見を聞きながら、探っていくと言う目的で、シンポジウムを開いた。シンポジウムを開く1年以上前に篠本城跡の現地説明会を行い、そのときの反響の大きさと、それからの専門研究者の来訪と、その折にさまざまな意見が寄せられた。それらの貴重な意見をこちらで置かせておくだけでなく、多くの人にも聞いてもらい、なおかつ議論を深めて謎が多い篠本城跡の解明に繋がればと思い、シンポジウムを企画した。

シンポジウムでは発掘調査の成果をはじめ、下記の方々にそれぞれの立場から発表していただき、そして全体討論をして篠本城跡の謎に迫った。

伊藤一男 「中世篠本郷の武士と村落」

小野正敏 「篠本城の焼物が語ること」

椎名幸一 「東総の中世城郭」

柴田龍司 「考古学からみた房総の中世城館の構造」

橋浦芳朗 「篠本城跡出土の仏教遺物」

遠山成一 「栗山川水系の中世城館跡について」

そして遠山氏には全体の司会をお願いした。

伊藤一男氏は、篠本を中心として東総地域に関連した中世の文書を多数収集して、篠本城跡を築いた人物をその中に求め、またその中から東総地域における中世の武士団の動勢を解明しようとした。特に金沢文庫断簡ほかに出てくる「竹元」氏をさきもと氏と断定して、同氏が篠本城を中心として南北朝期に活躍し、16世紀初頭には排除されていったことを突き止めた事は、篠本城の人物像解明に大きな成果である。しかし文書の中に130年間の空白期があることに一つの疑問を抱き、その間の「竹元」氏あるいは篠本城の動向について、さまざまな可能性を示し、中世の地域社会の実像に迫ろうとしたことは、篠本城跡及びその周辺地域の中世社会を解明する上で大変参考になった。

小野正敏氏は、考古学の方法を使って遺跡から出土した陶磁器を中心に、どこから何が出土したか、ある

いはその構成の変化を分析し、その使われ方や価値、さらに陶磁器の流通に見る当時の経済を明らかにした。特に篠本城跡から出土したさまざまな陶磁器を分析して、全国的な比較の中からその位置付けをしたことは、同城が一地域の小さな城であったのではなく、日本の歴史の中の渦に飲み込まれて行ったことを示した。篠本城跡でも出土している中国製の陶磁器と、同じ千葉県内の他の城跡から出土している同じ陶磁器とを比較して、その種類の違いや時期の差から、当時の日本と中国との関係が現れている事を具体的に示した。また当時と今日との物の価値観の比較は、参加者からも身近かな物に直結するところから、大きな関心が寄せられた。

椎名幸一氏は、八日市場市に在住して長く東総地域の中世城郭を調査しており、その中で篠本城跡を中心にその周辺の城跡を示し、東総地域の中世城郭の特徴を述べた。東総地域は丘陵状の下総台地と平坦な九十九里平野とからなり、台地にはこれを削り掘で切り区画した直線連郭式の城跡が多く、平野では土塁と堀で方形に区画した城跡が多く点在していた。また、はじめは椎名氏が入って領地支配のために簡単な構造の城を築き、後に支配構造が変わると、城もより技巧的になって行ったことなどを述べた。その中で篠本城跡だけは、東総地域の中で異なる形を示していることを指摘して、他地域の特徴を取り入れて築城したのではないかと導き出したことは、この城を考えるうえで大変参考になった。

柴田龍司氏は、千葉県内で発掘調査した城跡を中心に取り上げ、千葉における中世城郭の変遷の特徴を述べた。特に氏は笹子城跡を自ら発掘し、それをスライドで紹介して篠本城跡と比較し、千葉の城郭の中でその類似性を指摘した。その上で中世後期に登場する戦国期の城郭本佐倉城等の惣構構造の城郭を示して、篠本城跡のような周りに曲輪を有する城跡がその前段階的構造であるとし、城郭の変遷史を歴史背景と重ね合わせて説明した。また、氏は篠本城跡が城であるかあるいはそうでないかの多くの疑問に対して、これに「村落型城郭」と言う新しい概念を提唱したことは、篠本城跡の性格・構造を解明する上で注目される。

橋浦芳明氏は、僧籍にある立場から篠本城跡で出土した石塔をもとにして、仏教を中心に中世の宗教について述べていただいた。篠本城跡では多くの五輪塔や板碑、宝篋印塔などの石塔が出土し、氏はこれらを単なる墓石ではなく、さまざまな供養に対して建立したものであるが、それらが投棄された状態で出土した物である所から、建立目的は特定できないとした。その中で砂岩製の板碑は、初期のものであろうと指摘したことは、石塔研究に一石を投じることになろう。光町



写真158 シンポジウム

には今日も多くの寺院があり、それらの宗派的な変遷を紹介し、日蓮宗に帰依した千葉氏とその一族あるいは武士団の動向によって、この地域の仏教もさまざまな変化して行った事を明らかにした。

遠山成一氏は、栗山川流域の中世遺跡を取り上げ、篠本城が存続した時代のこの地域の社会情勢について述べた。特に南北朝期に登場する竹元氏を篠本氏としたことは同意しながら、この竹元氏が篠本城跡をこの時期に築いたかどうかは別問題とした。また文献に現れる竹元氏と、発掘で出て来た篠本城跡とを比較しながら、その実像を明らかにしようとした。そして15世紀半ばの千葉氏の宗家交代劇が、栗山川流域で起こった事は、篠本城だけでなくそのほかの家臣団にも大きな影響を与えたことを明らかにした。

このように発表していただいた後に全体討論に移り、篠本城跡の謎について会場からの質問を受けながら議論して行った。その議論の中心となったのは、篠本城の構造とこれを誰が何のために築いたかである。中世室町時代は鎌倉幕府崩壊から南北朝・戦国時代を経て江戸時代になるまで、武士の抗争や一揆が各地で頻発した戦乱の時代でもあった。そのような時代の中で、篠本城跡が発掘調査で現れたその姿から、国人領主が築いたのか、庶民が一揆に際して造って立て籠もったのか、あるいは竹元（篠本）氏が中心となって、村落から発展して城を築いて行ったのか、さまざまな意見が出て討論が交わされた。このシンポジウムでは結論が出なかったけれども、第3の意見に取敢される方向で締めくくったが、中世におけるさまざまな問題が浮き彫りにされ、篠本城跡を巡る謎の解明に大きな成果が得られ、当初の目的が達成された。

発表された諸氏、コメント・質問をいただいた方々、参加された方々、準備・協力された多くの関係者の方には、大変感謝致します。ここに御礼申し上げます。

3. 現地説明会の記録

第1回は、平成6年5月14日土曜日に開催した。事前に新聞で発表したこともあり、600人近い参加者があり、関心の高さを感じた。中には熱心に質問したり、疑問を投げかけたり、調査員をたじろにする場面もあった。遺跡は台地上が半分以上進み、堀や建物跡などの遺構が多数現れていて、城跡として見ごたえのあるもので、見学者は皆実際に見る城跡を目の当たりにして驚嘆していた。遺跡の中には実際に出た城跡より古い時代(奈良・平安時代)の住居跡に復元家屋を造り、古代への理解にも努めた。また現地事務所には城



写真159 第1回現地説明会

山遺跡より出土した遺物を展示し、城跡からはどのようなものが出土するか、見学者により興味をもってもらえるようにした。

第2回は、平成7年5月23日から6月3日までの間で、延べ5日を充てて開いた。前回は多数の見学者が来て混雑して、遺跡をゆっくり充分に見てもらうことができなかったため、今回は一週間の期間を設けて、その中で5日に振り分けて現地説明会をすることにした。しかし、今回は事前に新聞発表をしなかったため、多くの方に情報が行かなかったためか、参加者は合計で220人程度であった。



写真160 第2回現地説明会

4. 城山遺跡(篠本城跡)の評価と意義

ひかり工業団地事業地内の埋蔵文化財調査では、篠本城跡という中世城郭のほとんどを発掘し、その全体像を明らかにすることができた。その中で城山遺跡は篠本城跡の中心にあたり、まずそこから調査を進めたことにより、周りの遺跡にある中世の遺構の在り方まで予測でき、延いてはそれが全体像を明らかにする一因であったろう。こうして一遺跡を越えた中世村落の姿を捉えることができたことは、中世の地域社会を研究するうえで大きく役立つことだろう。またこの調査では城跡の発掘ということで、その範囲が台地斜面部から谷底にまで及び、その結果として、中世の遺構はもちろんのこと、縄文時代から平安時代にわたる遺構まで多数検出した。このことは遺跡が台地の上だけにあるのではなく、あらゆるところにあるという事を知らしめた。これが城山遺跡だけの特殊性なのか、あるいはどこにでも認められる普遍的なものであるか、今後類例の有無を見守りたい。

最後に、篠本城跡がいつ頃、誰が築いた城かという、最も関心を寄せる問題に対して結論をまとめよう。篠本城跡から出た多くの遺構・遺物と、多くの方々のご意見やご教示、またシンポジウムなどを通して、発掘を担当して直接城跡を見つめて来た者の総合的な判断として、やはり篠本氏が鎌倉時代に土着して在地領主となり、南北朝期に城を造り始め、室町時代の後期になる頃、情勢の変化とともに、生きるため一族皆、他へ移って行ったものと結論付ける。

5. 城山遺跡発掘調査に携わった組織・人々、及び係わった協力者

調査主体	財団法人東総文化財センター
理事長	鶴之沢 昭(～平成10年6月)
〃	清古 正士(平成10年7月～)
常務理事	若林孝男(～平成10年4月)
〃	大島正夫(平成10年5月～、兼庶務課長)
調査課 課長	宮 重行(～平成6年3月)
	川島利通(平成6年4月～同9年3月)
	横山 仁(平成9年4月～)
調査員	道澤 明
〃	宮内勝巳
〃	鈴木美成
〃	實川 理(～平成10年3月)
〃	赤塚弘美(～平成10年3月)
〃	本多昭宏(平成7年4月～)

庶務課 課長 山口和壽（～平成6年3月）
// 飯塚禎司（平成6年4月～同8年3月）
// 萩原良男（平成8年4月～同10年3月）
主任 渡辺ゆう子（～平成8年3月）
係長 鈴木洋子（平成8年4月～同10年6月）
// 遠藤喜枝（平成10年7月～）
嘱託 片岡秀子

発掘調査補助員（遺構発掘）

飯田和子、飯田史外子、鶴沢よ志子、遠藤アキ、金谷かをる、小堀キミ子、小堀好子、岩山郁子、柴田節子、嶋田せつ子、鈴木瑞代、鈴木みよし、田宮高、千葉信子、浪川こう、名雪光江、保科礼子、吉岡つね、椎名文雄、石井高志、飯田あや、飯田勝恵、岡村安、木内才子、小林マサ、椎名かね子、鈴木和子、鈴木竹一、鈴木邦次、鈴木政司、高橋和子、長房利直、林かね、林圭子、林静江、林静江、林せつ子、林なか、林久子、林美津江、林むつ子、増田なつ、水口キヨ、小林克実、明石静子、大木美津江、香取信子、金杉まさ子、鎌形タカ、黒巢コト、椎名政子、鈴木ともい、高安ふみ、高根たか、椿定子、寺本はな、戸村ハツ、戸村つね、平山利子、真行寺登、鎌形一、秋山きく江、秋山幸、秋山茂、秋山すい、秋山せつ、石毛たけ、伊藤あつ子、江波戸松江、大木かつ子、大木キク、小川新助、鎌形聡、鎌形満寿美、向後千代、高藤愛子、佐藤悦子、鈴木八重子、土屋久子、林ミヨ、行木臣、吉田恵子、渡辺芳子、森輝男、石毛美代子、稲田淑子、崎山節子、菅谷富美、高木美津江、浪川あい子、平野サク子、宇井ふみ、江波戸きみ子、加瀬八重子、都築愛子、北野新市、池田とよ子、金杉なか子、神明茂子、多田とし子、長谷川ヒデ子、川島幸子、向後たけ子、小又和代、田山よね、伊藤久代、遠藤せい、高橋和子、中村睦子、山崎好子、島田正恵、高木和夫、保立奎子、茂木千賀子、角田照代、山口富枝、宇海孝枝、大木和子、川島弘子、古川雅史、石毛ひさ子、佐瀬明美、佐藤輝江、高藤良枝、土屋紀子、野澤正子、松田京子、宮内準司、山口圭子、山口水雄、渡邊せな、飯田正明、池田澄江、伊藤光江、木内好子、越川初江、篠塚春江、鈴木とし、成毛かつ枝、林テル、平野さく、平野せつ子、福水文子、石橋たつ、尾形正子、日下部きぬ、久保木はつ、篠塚けい、鈴木春枝、高橋定子、土屋光枝、額賀しも、石橋重雄、秋葉ミエ子、秋山やす、石橋きみ子、石橋八津江、伊藤喜美子、宇野あき、宇野かい、大貫つね子、小川せつ、菅澤やす、菅谷あさ、菅原登美、高木志ん、高木つね、塚本クニ、根本良江、平野愛子、伊能美喜子、香取千江、高木京子、椿さと、椿リン、松山トキ、本多勝子、内田喜美子、飯田清子、飯田さと、飯田千榮子、飯田富江、鎌形一枝、越川松江、齋藤茂代、佐藤すみ子、澁谷一江、鈴木和、土屋

朋子、内藤あや子、並木きみ、行方すみ、長谷川ちよ、平山アイ、大木あさ、小倉レイ子、小山田みさ子、郡はる、椎名たつ子、高木三七子、梶山こう、堀越幸司。

発掘調査記録補助員（遺構実測記録）

遠藤昭江、柴山記代美、常世田美智子、横田敦子、久古千恵、星野忠義、熱田恵子、穴倉洋子、大木薫子、岩井久美子、石井圭子、伊藤幸子、鈴木哲夫、長谷川丈敬、佐野恭子、高野一枝、篠塚栄子。

整理補助員（遺構実測図整理、遺物整理実測、実測図トレース）

向後幸子、関啓子、林リカ、嶋田純子、秋山節子、櫻田美佐子、菅原喜久美、佐藤政代、高橋淳子、佐久間孝子、山元麻由美、印東明美、椎名理子、加瀬純子。

協力者

発掘調査では、これを進めるに当たって多くの方々からご協力をいただきました。また、この報告書をまとめるにあたって、多くの方々からご教示をいただきました。ここに併せて記して、御礼申し上げます。（敬称を略させていただきます）

国立歴史民俗博物館 平川 南、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 藤沢良祐、浪岡町史編纂室 工藤清泰、市浦村教育委員会 柳原滋高、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 富樫孝志、(財)山武郡市文化財センター 青木幸一、同 中野修秀、(財)総南文化財センター 菅谷通保、(財)香取郡市文化財センター 村山好文、同 戸村勝司朗、同 荒井世志紀、同 鬼澤昭夫、篠本眞理子、道澤道子、千葉県立匝瑳高等学校 加瀬靖之、千葉県企業庁 高山義則、ひかりスポーツ公園 森郁之助、同 郡司 昭、小川重機 小川義弘、同 向後憲治。

千葉県教育庁文化課、光町教育委員会。

本書掲載の遺構の写真は各調査員が、遺物の写真は道澤が撮影し、空中写真は粟田商事と中央航測に委託した。また墨書土器の赤外線写真は、国立歴史民俗博物館と平川 南氏、(財)香取郡市文化財センターの協力で撮影した。低地の土壌の花粉分析・珪藻分析はパリノサーベイに委託し、資料採取には同 辻本崇夫氏に御足労お願いした。

本報告書をまとめるにあたり、特に国立歴史民俗博物館 小野正敏氏から、陶磁器のご教示はじめ、あたたかい励ましを賜りました。あらためて御礼申し上げます。

またこのほか、多くの方々からご支援、ご協力、励ましを賜りました。最後ではありますが、誠に御礼申し上げます。

本報告書の執筆・編集は道澤があたった。

報告書抄録

ふりがな	ささもとじょうあと・じょうやまいせき							
書名	篠本城跡・城山遺跡							
副書名	ひかり工業団地内埋蔵文化財調査							
巻次	2							
シリーズ名	財団法人 東総文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	道澤 明							
編集機関	財団法人 東総文化財センター							
所在地	〒289-1727 千葉県匝瑳郡光町宮川字宮内前2334 TEL0479-84-3368							
発行年月日	西暦 2000年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じょうやまいせき 城山遺跡	千葉県匝瑳郡光町篠本字城山1143	12381	28	35° 41' 56"	140° 29' 49"	19930308~ 19970331	29,300㎡	工業団地 造成工事
ささもとじょうあと 篠本城跡								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
城山遺跡	集落跡	縄文	包含層・陥穴	縄文早期・中期土器 ・石器	縄文早期包含層は花輪台Ⅱ式 がまとまって出土。			
		弥生		弥生土器				
		古墳	住居跡・土坑 古墳跡	土師器・須恵器 ガラス小玉・琥珀棗玉				
篠本城跡	城跡	奈良・平安	住居跡・土坑 井戸跡	土師器・須恵器 砥石、凹石、火鑽白	城跡は多くの区画と建物跡が あり、鎌倉時代から室町時代後 期直前まで続いた村落的なもの に、堀を巡らし、城として行っ た、村落的城郭の拡大したもの である。			
		中世	堀・建物跡 地下式坑 粘土貼土坑	中世陶磁器（中国製 青磁・白磁、古瀬戸 常滑、瀬美、内耳土鍋、 カワラケ、茶釜形土器 銭貨、刀装具、和鏡、 火打石、砥石、茶臼 石塔				
		近世	炭窯・小屋跡	近世陶磁器（瀬戸・美濃、 肥前系） 銭貨、煙管、懐中鏡				

後記

遺跡は、残念ながら発掘調査とともに消え、この報告書に記録として残るのみになりました。調査途中には多くの方々に遺跡を見ていただき、そのまぶたの中に遺跡を焼き付けていただいたことと思います。また、この報告書を見ることによって、再びその姿を思い起こしていただければ幸いと存じます。

この報告書に記録したものは、日本国民共有の文化財であり、人類共通の文化遺産であります。この報告書を、多くの方々にご活用いただければ、記録のみになってしまった遺跡にとっても、調査及び本書製作した者にとっても、報われる思いがします。

財団法人 東総文化財センター発掘調査報告書 第21集
千葉県匝瑳郡光町

篠本城跡・城山遺跡

本 編

— ひかり工業団地内埋蔵文化財調査報告 2 —

平成12年3月31日 発行

編集 財団法人東総文化財センター

千葉県匝瑳郡光町宮川字宮内前2334

発行 千葉県企業庁

印刷 鶴エリート印刷 成田市並木町44-20

